Fate/stay night プリズマ☆イリヤ

やかんEX

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り、プリズマ☆イリヤとｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔのクロスオーバーです。

舞台はｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの冬木市。第五次聖杯戦争時の平行世界へとイリヤ達が飛ばされます。

目次

Prologue ―― 1
2月1日・
ACT1「邂逅」―― 11
ACT2「夢と現実」―― 46
2月2日
ACT3「面影」―― 68
ACT4「夜、再び」―― 97
ACT5「遠い背中」―― 133
ACT6「槍兵（上）」―― 175
ACT7「槍兵（中）」―― 205
ACT8「槍兵（下）」―― 236
ACT9「来訪者」――

Prologue

八枚目のカード回収。

とにかくそれは難航を極め、鏡面界ではなく外界に顕現した異常を倒すべく、イリヤはルビーとサファイアの二対のステッキを使い、自身の身体全てを代償に力を引き出すことにしたのだった。

そして、結果。

賭けに勝ったイリヤは、最後にして最大の敵を討ち果たし、残るは目の前で地面に座りこむ美遊を引っ張り上げるだけとしていた。

全身が痛みで軋む。

それもそうだろう。筋肉、血管系、リンパ系、神経系までをも魔術回路として誤認させ、自身の全魔力を捻り出したのだ。痛覚共有を通じて同じ感覚を得ているクロには随分申し訳ないことをしたなとイリヤは思う。ボロボロの身体では、この場に立っているだけでもやっとのことだ。

……ただ、そんなことは、今のイリヤには関係なかった。

彼女は決めたのだ。

目の前で、まるで迷子の様な目をしてこちらを見つめている少女が、たとえどれだけ大きな秘密を抱え込んでいるのだとしても、たとえその秘密に触れればもう引き返せなくなってしまうのだとしても、自分は、そんな彼女を、自身の全力を持って助け起こすのだと。

――――ミユはわたしの友達だから。友達が苦しんでいるなら、もう放っておいてなんかあげない。

「ねぇミユ、帰ろ？」

そう言って手を差し出したイリヤに、言葉を返せずにぱくぱくと口を開け閉めする美遊。先ほどまで流していた涙の痕も相まって、ひどく間が抜けた感じだ。

その様子がやけにおかしくて、イリヤはなんだか、疲れきった体がゆっくりと癒されるような気がした。

「イリヤ……う、上っ……！」

「え？」

だけど、何故か焦ったように慌てて声を絞り出す美遊に、イリヤは言われるが儘に頭上を見上げて――――

空が
ばくりと
縦に
裂けた――――

「――――なに、あれ」

思わず惚けた声を上げるイリヤ。
そんな彼女を置いて、辺りの空気を突如揺るがしたエーテルの奔流。
ごうごうと音を立てて沸きあがった突風に頭上から嬲られ身を屈めるしかないその場の全員を余所に、倒れこみながらも一人悠然と空を見上げていた金髪の少年が、そのままの格好で、はたと呟いた。

「あ、しまった。そっちの扉(平行世界)も切っちゃったかな」

「なっ、なんですって～～～～ッ!!??」

その言葉に叫んだのは凛とルヴィアだ。

何が逆鱗に触れたのか、彼女たちは二人して物凄い形相で少年を睨みつける。

しかし、その視線の先。この現象の原因となったその彼はというと、「あはははは」なんて楽しげな笑い声をあげているだけだった。

そして、そうこうしている間に、状況が動く。

「イリヤッ！　手をッ!!」

「え!!?」

急にそう言って手を差し伸ばしてくる美遊にも、イリヤは戸惑って動けない。

しかし、次の瞬間。彼女は美遊の言いたい事を理解した。

身体が宙に浮いているのだ。

ステッキの力でもなんでもなく自然に。

あの頭上に現れた孔に向かって、吸い込まれるように彼女たちの身体は浮かび上がっていく。

「ミユッ!?」

「イリヤッ!!」

互いに名前を呼び、二人は同時に手を伸ばす。

そうして空に吹き上げる風を切り、彼女たちの指と指が重なり合おうとして――――

しかし、あと数センチの間隙を埋めようとしたその瞬間、より強い突風が場全体を包み込んで巻き上がった。

「いやぁぁぁぁぁ!!!???」

イリヤは叫びを上げ、まるでブラックホールみたいな孔に呑み込まれていく。強い烈風に耐えながら薄目を開けた彼女は、自身と同じように吸い込まれていく他の皆の姿も視認した。

だが、それだけだ。

世界を切り裂いた事象の前では、少女一人にできることなど何もない。

堪えきれなくなって目を瞑ったイリヤは、そのまま深い闇の中に呑み込まれていった。

■

「……うん」

イリヤが目を覚ました時、まず彼女は、まだ今が夜だということを認識した。

夜特有のしんとした静寂が場を包んでいる。

頭上にある筈の月は雲の後ろに身を隠し、辺りは墨を流したような暗い闇に染まっていた。

「ここは……」

身を起こして周囲を見渡す。

そこは、見たことが有るような無いような。

緩やかな坂道になった、静かな住宅街の一本道。

道のところどころにぽつぽつと立っている街灯が、黒一色に塗りつぶされた暗い闇の中、無機質な青白い光を宿して、ぼんやりと白く浮き上がっていた。

「……さむ」

横から吹き付ける風が肌身を叩いた。

雪は降っていないようだが、その寒々とした空気は冬の季節のもの。
イリヤは反射的に素肌が曝け出されている腕をさすり――――そこで彼女は、自身の纏っている服が意識を失う前の魔法少女服でなく、変身前に着ていた自前の私服だということに気がついた。
「ルビー？」
小さな声で呟いた。
「ミユ？　クロ？　リンさん？　ルヴィアさん？……みんな、何処にいるの？　悪戯だとしたら、性格が悪すぎるよ……」
か細い、消え入るような彼女の言葉にも、人通りの絶えた道は答えない。耳の痛い静けさの中、街灯に嵌められた白い蛍光灯が、じじ、と、僅かに明滅しながら爆ぜるような鈍い音を立てた。
知らない場所で夜に一人。そんな意味不明な状況で、時間だけが、ただ滔々と過ぎていくように感じられた――――その時だった。
寒空の下、身を縮こまらせて独り震える彼女の背に、不意に、声が掛かる。

「ねえ、あなたは誰？」

夜の底に、まるで鈴の音のように響く、自分と同い年くらいの少女の声。その声に引き付けられるように、イリヤは後ろを振り向いた。

すると闇の中、街灯に浮かび上がる長い銀色の髪。紅玉を嵌めたように透明な紅い瞳が、イリヤに向けられていた。視線の先に立つ、紫紺の外套とロシア帽を纏ったその人影に、彼女は瞠目したまま言葉を返せない。

――――自分と全く同じ外見をした少女。

クロとも異なる、瓜二つなんて言葉も足りないくらい完璧に自分と同一なその姿。

「ふうん。どうやったかは知らないけど、わたしを真似るなんて大胆なことをしたものね」

これまた自分と全く同じ声で、目前の少女がそう呟いた。

けれど、その冷たい声色。その冷たい気配は、自分ともクロとも少しも似通っていないものだった。

……上手く頭が回っていない。

今日起こった全てのコトが異常だったけれど、今はもう、自分の理解が及ぶ範囲をとっくに超えてしまっていた。

一方、そんな風に呆然とするイリヤを、少女はまるで実験動物でも見る様にまじまじと検分していたのだが、唐突に気まぐれに、彼女はその瞳から興味の色を失わせると、ひどく冷たい声色で、口を開いた。

「まぁ、いいわ。あなたが何者であろうと、わたしを知っているなら聖杯戦争関係者ということでしょうし。それなら、扱いなんて簡単だもの」

無感情にそう言い切り、少女が右手を上げる。

すると、イリヤの目の前に、俄かには信じられないモノが忽然と浮かび上がった。

意志の感じられない虚ろな瞳。

申し訳程度に身に付けられた、鈍錆色の鋼の軽鎧から露出する、岩のような体躯。

纏われた、見ている人間を圧迫するような尋常ではないほどの夥しい魔力。

そして褐色の、血の気のない大男の手に握られた、大岩から砕き出したような無骨な大戦斧。

――――それは以前、自分たちが力を合わせて、確かに打倒した筈の存在だった。

そして、そんな有り得ない光景に怯え、カチカチと歯を鳴らして動けないイリヤを尻目に、少女はくすっと浅い笑みを洩らすと、次にそのあどけない表情とまるでそぐわない、ぞっと底冷えのする冷酷な声で、自身の後ろに控える異形に、命令を下した。

「――――殺しなさい、バーサーカー」

2月1日・ACT1「邂逅」

それは、この世の物とは到底思えない、圧倒的な死の具現であった。

姿を見せた月に、虚空に飛んだ黒の大影が浮き上がる。

どうどうと大気を震わせて身体を圧す、身の毛のよだつほどの獣じみた咆哮。

自我のない紅い光が、漆黒の影の中、虚ろな瞳に明かりのように茫洋と灯っていた。

差し迫る死の影を動くことも出来ずに呆然と眺めて、イリヤは、冷酷で残酷な現実を、他人事のように胸の内で認識して――――

――――考えるより先に真横に飛んだ。

側に着地した大男の足元で、重量に潰れた地面が悲鳴を上げるような音を立てて踏みしめられる。

間髪入れず振り下ろされる大斧。神速を持って叩き込まれた、掘削機のような強力な一撃の下、ついぞ耐えきれなかったコンクリートが虚空に砕け散った。

イリヤはその光景を視認する。

一瞬前に自分が居たあの場所、あの空間。

もしも一刻でも長く呆然としていたのなら、代わりに真っ二つになっていたのはイリヤ自身だっただろう。

「――――――ふうん」

思わずぞっと背筋を凍らせていたイリヤの耳に、どこか感心したような声が届く。

反射的に目を向ければ、そこには楽しげに口端を吊り上げる少女の姿。その怖いくらい無邪気な真紅の瞳に、またもやぞわりとした悪寒が湧き上がる。

少女がそんなイリヤを静かに見据え、言った。

「いいわ、バーサーカー。ゆっくり、もう一度ね」

何を――――と、疑問を抱く前にイリヤは転がるように再度飛び退いた。
一刻遅れてやってくる疾風。
ほんの瞬きの間に突進してきたソレは、容赦なく空間ごと、先程までイリヤが立っていた地面をごっそりと削り取った。
そしてその衝撃にまた避けられたことに気づいた黒の巨人は、酷く緩慢な動作で彼女の方に顔を向け、再度愚直な突撃を開始する。

そうして幾たびか繰り返される死の追いかけっこ。未だ捕らえられていないイリヤだったが、それもきっと長くは持たない。
そもそも彼女が先の攻撃を避けることができたのは、一度この存在を相手にした経験がある故だった。
しかし、それも本来なら一度っきりのこと。ルビーが手元にない、唯の少女にすぎない今のイリヤでは、怪物のように強大な男の前に奇跡など二度以上望むべくもないのだ。

――――それなのに、こうしてイリヤが今も無事なのは、あの少女の命令通り、化物の方が手加減をしているからに決まっていた。

「あははははは！　まるでネズミみたいね!!
バーサーカー、そのまま暫く遊んであげなさい。わたし、そいつが苦しむのをもっと見たいわ！」

少女の、くすくす笑いの浮いた、愉しげな声が闇に響く。
一方、それとは対称的な、圧倒的強者によって徐々に嬲り殺されていく獲物のように、ゆっくりと体力を削られていくイリヤ。息を切らして走る自分に向けられる、少女の哄笑がいやに耳についてやまない。

――――なんで、どうして、こんなことができるの……！

全く意味が分からなかった。
思考はぐるぐるぐるぐる回り回っている。
目の前の少女は真実自分と同じ姿カタチをしているのに、その精神の在り方はこれっぽっちも似通った部分が見受けられないのだ。
自分はあんな表情なんて決してしない――――残忍で苛虐的で、目の前の人をまるで

路傍の石に見做してしまう様な、あんなむごたらしい表情は――――

「――――っ！」

不意に背に激痛が走り、次いで脚がもつれて地面につんのめった。

無理もない。八枚目のカードとの激闘を経たイリヤの身体には、既に尋常でない程のダメージが蓄積されていたのだ。精神的にも肉体的にも、もう限界なんてとうに超えている。

そして痛みに蹲るイリヤのその身体を、大戦士が鷲掴みにして持ち上げた。

「いやっ――――ぁ」

言葉にならない声が零れた。

恐ろしいほどの怪力で握り締められる、華奢なイリヤの躯体。

臍下から圧迫された彼女の内臓が、みしみしと鳴ってはならない音を立てて凝縮される。

「あーあ、もう終わりかぁ。まぁ、予想よりは持ったけれど、もう少しのたうち回ってくれても面白かったのになぁ」

一連の流れを眺めていた銀の少女が、心底つまらなそうに独りごちた。

言いながらその実興味なさそうな瞳は、まさしく傍観者のそれ。

その少女の軽薄な態度が、イリヤにとって信じられなかった。

「な、なんで……」

「うん？」

知らず絞り出すように口から洩れた疑問に、少女が小首を傾げてイリヤを伺った。

無邪気で純粋な、それだけ切り取れば、まるで鏡で自分を見ているような錯覚を受けるその仕草。

「な……んで、こんなこと、するの？」

「なんでって、これは聖杯戦争だからでしょ？　マスターにサーヴァント、それにその関係者。全て殺してしまえばわたしの勝利だもの。これって、そんなに難しいことかしら」

「聖杯、戦争……？」

知らず、イリヤは反芻するように呟いていた。

聖杯戦争。

その言葉は最近よく耳にしていたものだ。

自分やクロ――――それに、ミユ。

自分たちに深く関係し、そして振り回してきたのがその言葉。

だけど、それは――――

「十年前に、終わったん、じゃ？」

そう。母であるアイリスフィールから聞いた通りなら、父の衛宮切嗣が未然に発生を防ぎ、そして既に終わった過去の産物であるのが聖杯戦争というものだった。ならば自分のこれは順当な疑問な筈だと、痛みに耐えながらイリヤは必死にそう考えたのだ。

――――しかし、その言葉を少女は浅く笑って否定する。

「はっ、何を言っているのかしら。十年前に終わったのは第四次聖杯戦争でしょ。そし

て、今わたしたちが始めようとしているのは、第五次聖杯戦争」

「……っ？」

意味が分からなかった。母が自分に嘘を言った筈はない。だけど、目の前の少女が偽りを口にしている風にも見えなかった。

……どこか、ボタンを掛け違えているかの様な奇妙な違和感が胸中に湧いている。

あと少し、何かほんの少しの切っ掛けで、全てがカッチリ嵌るような気がするイリヤだったが、不意に、また目の前の少女がその揶揄していた様な笑みを引っ込めると、冷淡な表情で自身の従僕に指令を下した。

「バーサーカー。そいつ、ゆっくり握りつぶしちゃいなさい」

「――――あ」

再び身体に掛けられる力が増した。

外側から塞き止められた血管が、どくどくと鼓動を圧迫する。

「わたしと同じ姿をしているのだから、少しは変な気分になるかとも思ったけど……そ

んなこと、全然なかったわ。本当に、わたしと全く違っているのだもの。特に、この目」

「いやっ……！」

化物の腕が下げられたと思った瞬間、地面に立つ少女に顔を鷲掴みにされた。

乱暴なその行動に思わず瞳を閉じそうになるイリヤだったが、瞼を無理やりにこじ開けられ、強制的に目の前の少女と対面されられる事になる。

紅と紅。

全く同じ色をした二人の瞳が、視線を交わす。

「な～んにも、知らないような目をしているのだもの。この世界に蔓延る苦痛も悪意も、絶望も。――――この癇に障る眼、くり抜きたくなっちゃうわ」

手袋を脱いだ素手で、少女に瞳を撫でられる。

「っ……！」

他者に瞳を触れられる、という常識から逸脱した行為に拒否反応を見せたイリヤは、

悲鳴にならない声を喉元から零した。
身体の芯が、凍っている。
怯えてる、心の底から。
目の前の少女は冗談なんか口にしていない。あどけない表情をして自分を見下しているこの少女は、ともすれば気まぐれに楽しげに、自分の二つの瞳をそのまま掴んで抉り出してしまうだろう。
先ほどまで暴虐の限りを受けていたイリヤは、そのことを本能的に察していた。
「もう、嫌だよ……やめて、離して……」
頬に涙が伝った。
数々の手強いカードと相対してきたイリヤだったが、ここまで残酷な悪意との対峙は初めてだったのだ。
加え、魔法少女の力もなく、仲間とも離れ離れになり、たった独りで無惨たらしく殺されそうになっている。そんな理解範疇を超えた出来事の前に彼女ができたのは、もう、情けないまでの無様な命乞いでしかなかった。

……だがここで、唐突にまた表情を急変させた少女が、思いもしないコトを口にする。

「ふうん、いいわよ」

「……え？」

その言葉に疑問を浮かべた瞬間、イリヤは尻臀から地面に着地する事になった。

痛みが走る。激痛なんて言葉が生易しいくらい、身体の芯から自身を壊して動けなくする程の痛み。それでも、そんなことを気にしていられないくらい、イリヤは少女の行動の訳が分からなかった。

そんなイリヤを見下しながら、銀の少女が淡々と言葉を紡ぐ。

「何よ。あなたの望み通り、離してあげたんじゃない。さぁ、どうするの？　自由になったのなら、早く逃げたほうがいいんじゃないかしら？」

「……あ……っ!!」

少女の言葉が頭に染み込んだ瞬間、イリヤは弾かれるように立ち上がり、彼女たちに背を向けて走り出していた。

そんな無様な自身の姿を見て、後ろの少女がまたくすくすと笑う。
その声からなんとか逃げたくて、下唇を噛んで目を瞑りながら、ただひたすらにイリヤは走った。

疑問は山ほどあった。
この少女は何者なのか？
なぜ以前倒したはずのカードが存在するのか？
終わった筈の聖杯戦争が何故始まっているのか？

だけどそんな次々に湧いてくるよくわからないコトを頭の隅に追いやって、イリヤは必死になって走っている。この状況も身体の痛みも、今だけは全てを忘れて、ただひたすらに不恰好に自分の命を繋ごうとしていたのだ。

だが、死神はそう簡単に、彼女を逃しはしない。

「それじゃあ、鬼ごっこね。三つ数えるから、そのうちによく逃げるといいわ」

それは残酷なまでに楽しげな、無邪気な子供の遊び声だった。

「――――Ｅｉｎｓ（アインツ）」

少女のその声から逃げたくて、イリヤは今まで以上に必死に走る。

俯き、ぎりぎりと歯を食い縛り、きつくきつく拳を握って、足が棒になるくらいに全筋力で地面を蹴った。

「――――Ｚｗｅｉ（ツヴァイ）」

だけど、悲鳴を上げながら走っても走っても、少女の小高い声が聞こえて来る。

そもそもこの道は見渡す限りの一本道。遮蔽物のないこの街道では、どれだけイリヤが速く走っても、どれだけ遠くまで逃げることができたとしても、あの狂戦士は一瞬にして間合いを詰めることだろう。そしてそれを、イリヤはようやくと理解していた。

「――――Ｄｒｅｉ（ドライ）。はい、三つ。これでタイムオーバー。うんうん、やっぱりなかなか足は速いみたいね。思ったよりも随分頑張ったと思うわ――――本当に、ムカつく。

……それじゃあ、バーサーカー」

だから、イリヤがこの局面で咄嗟に縋ってしまったのは、自分ではなく他者の存在。友達へ、仲間へ、家族へ。イリヤは涙を瞳に溢れさせながら、思いつく限りの助けを心の中で叫んで走っている。

「あいつを、蹴り殺しなさい」

――――それでも、死の宣告は下された。

そして、瞬間

下を向いて走るイリヤの視界に、不意に巨大な黒影が覆いかぶさった。
それと同時に感じる、先ほどよりも尚濃厚な死の気配。
ぞわりと身体の芯を凍らせる、圧倒的な存在感。

それを身に感じたイリヤは、ふと、真っ白になった頭で緩慢に顔を上げようとして――途端、背中に信じられないぐらい強烈な一撃が、叩き込まれたのを自覚した。

「――――あ」

呆然と、息が詰まって言葉を継げないイリヤの身体が、ぐっと宙に浮かぶ。
不意に無重力を感じたイリヤは、視界で無機質なコンクリートを流れていくのを眺めていた。
そして、何メートルか分からないくらい吹き飛んでいった身体は、ぐるぐるぐるぐる回りまわって、イリヤは、進行方向に、民家の石塀が現れるのを、視認した。

――――あ、死んだ、わたし

呆気ないほどの、絶望的な未来への確信だった。
身動きの全く取れない空中の自分、その身体が飛んでいくスピード、極めて硬そうな民家の石塀。物理なんて習ったことがない小学生のイリヤでも、本能的に分かってしまう単純な結末だった。

だからもう、ぐちゃぐちゃになってしまった思考を頭から放棄して、ただぎゅっと目を瞑り、次に身を襲うであろう衝撃に独り涙を流して受け入れたイリヤは――――

「――――ぐッ!!」

「……え？」

――――唐突に包み込まれた暖かい感覚に、またもや惚けた声を上げていたのだった。

……どうやら、石の壁に激突する事は避けられたらしい。

だって、その代わりにイリヤの身体を受け止めたのは、力強くも身を気遣われた、とても暖かい安心する感覚だったのだ。

けれど、衝撃が完全になくなる事はない。あれだけのスピードだったのだ。たとえ見知らぬ誰かが受け止めてくれたのだとしても、それ相応の痛みは受けることになる。

故に、もともと疲労の限界を超えていたイリヤの意識は、今の一撃で完全に許容範囲を振り切っていた。

「――――つッ――――おい、大丈夫か!? 意識があるなら返事をしてくれっ!!」

どこかで聞き覚えのある声が遠くで聞こえたイリヤは、朦朧とする意識を歯を噛んでなんとか保った。そうしてゆっくり瞼を上げて薄目を開くと、そこに、やっぱり見覚えのある、赤銅色の髪の毛と自分を伺う優しい瞳を、その視界に収めたのだった。

そしてイリヤは、その何よりも大好きな暖かさの内で意識を失いながら、最後の力を振り絞って、こんな状況で見るはずのないその人物の名を、口にしていた。

「……おに、い……ちゃ、ん……?」

■

開発地区である新都で五時から八時までの荷物運びのアルバイトを終えた衛宮士郎は、日が沈みきって闇に染まった冬木の街を、一人自宅へと向かって帰路に着いているところだった。

いつも通りに学校に登校して授業を受けて、放課後に時間潰しがてら公園で佇み、何時もと変わりないアルバイトを作業的にこなした。帰りに高層ビルの屋上で同級生を見掛ける、という妙な事はあったものの、それ以外はなんの変哲もない、ただの有り触れた日常。

「――――ここは」

そうして、自宅のある深山町の坂を上がっていた士郎は、とある交差点の前で立ち止まった。

新都と違い人影の一つもない閑散とした道。

その道を割けている交差点の前に、玄関に立ち入り禁止の札が掛かった、朝も見かけた一軒家があった。

その一軒家で、ある事件が起こったのだという。
押し入り強盗によって殺された両親と姉。
そしてたった一人残された、幼い子供。

「――――」

不意に感じた無力さに、士郎は唇を噛んでぐっと耐えた。
正義の味方になる。その目標をずっと追って生きてきた士郎だったが、自分の身の回りの悲劇でさえ防げやしない。――――その事が、そしてそれ以上に、それでものうのうと日々を暮らしている自分の事が、ひどくもどかしかった。

「……正義の味方って、いったいどうしたらなれるんだよ、親父」

故人に縋る、なんて普段の士郎らしくない事だ。
そもそも、士郎は自分で実現可能な願いしか持っていないと考えている。だから、一つずつ小さな事を積み重ねていけば、どんな願いもいつか叶えられると信じているのが、衛宮士郎という人間なのだ。

……しかし、これは既に何度も自問自答した問いだった。

父親から受け継ぎ行った、正義の味方になるという誓い。士郎は昔からずっとそれに向けて努力してきた。

それでも、考えれば考えるほど解らなくなって、この世界にある不条理を知れば知るほど、その存在と自分の間に大きな壁が現れるように感じられていたのだ。

だからそんな士郎が、また身の回りで起こった事件を前に、亡くなった父に思わず泣き言のような言葉を漏らしてしまった――――

――――そんな時だった

「――――？」

不意に、遠くで、悲鳴のような何かを聞いた気がした。

……いや、気のせいではない。確かに、坂の上から幼い子供の金切り声の様な叫びが

聞こえてきている。そしてそれを認識した士郎は、先程まで考えていたこともあり、いつの間にか走り出している自分に気づいたのだった。

深山町の坂は傾斜がきつい。

普段なら決して走ったりなどしないその急斜面を、士郎は息を切らして全力で駆け上っていく。

そうして、いよいよ先程まで聞こえていた悲鳴の近く、坂道と横道を繋ぐ三叉路にまでやってきた士郎はその時。

――――横から弾丸のように飛んでくる、小さな少女を目にして

「なっ――――ぐッ!!」

何か考えを巡らすより早く、反射的にその少女を受け止めていた。

もちろん、その衝撃を受けた身体は無事ではない。全身を押され、気道が詰まり、呼吸もろくに出来ない程の痛みを感じる。常日頃から体を鍛えている士郎とは言え、これ

はその修練で可能な無茶の範囲を超えていた。

「――――つッ――――おい、大丈夫か!?　意識があるなら返事をしてくれっ!!」

それでも、いま考えるべきは自分のことではない。

そう判断した士郎は、自身の腕の中で呻く少女に必死に呼びかける。

長い、綺麗な銀髪をしたその少女の容体は、一見して酷いものだと見て取れた。埃だらけの衣服に、季節外れの半袖から露出する肌に帯びる、夥しいまでの裂傷の数々。

とにかく命に別状がないか、意識を確認するために覗き込んだ士郎は――――

「――――っ」

少女が薄目に覗かせた瞳に、思わず息を呑んだ。

どこまでも紅い、綺麗な水晶玉のように静謐に澄み通ったその瞳。

暫く思考を失っていた士郎は、自分に少女が小さく答えた何かを、明瞭に聞き取る事は叶わなかった。

けれど、どこか安心した風に意識を失った少女が、規則正しいリズムの呼吸を刻み出

す。士郎はその様子を見て、ほっと安堵の吐息をついた。

「――――バーサーカー!!!!」

そんな時、甲高い怒声が横道から聞こえてきた。

気を緩めていた士郎が弾かれるように視線を遣ると、彼は再び驚愕を表情に浮かべた。

まず、その憤怒の感情を発露した人間の姿。

月光に輝く銀の髪に紅玉の瞳。

夏服と雪国の服。着服している洋服に違いがあるものの、視線の先で猛っている少女は、自分の腕の中で意識を失っている少女と全く同じ姿をしているのだ。一卵性の双子だとしても、これ程まで似ることはあり得ないぐらいに同一なその姿。

「何してるのよ、バーサーカー!!

私はあいつを蹴り殺せって言ったのよ!?

なのにどういうことなの、この体たらくは!?

あなた手加減したわね!!
ただの使い魔であるバーサーカーが、マスターであるわたしの命令に逆らって!!!」

ただ、その少女がまるで駄々をこねる子供のように罵声を浴びせている存在に、士郎はいよいよ言葉を失うことになる。

――――それは、現実に在ってはならない異形だった。
未熟な魔術師である士郎にもわかる、絶望的なまでに凝縮されたエーテルの塊。それが大型の、二メートルを優に超える巨人としてこの世に具現していた。

その存在は、ただ茫洋として地に直立している。
隣で怒声を叫ぶ少女にも、何も反応を返さない。
そして、それを前に、少女はショックを受けたように目を丸くする。
悔しいのか、薄っすらと涙の滲んだ瞳で巨人を睨みつけ、更なる罵声を繰り出した。

「――――っ!!
もういいっ!!　もういいっ!!

バーサーカーなんてもう知らないっ!!　知らないんだから――――」

――――そのとき

不意に、いつまでも続くかの如く癇癪を上げていた少女が、側でもう一人の少女を抱きながら佇む士郎に気づいて、その宝石のような瞳を士郎に向けた。

その紅い瞳に魅入られた士郎は、見れば見るほど同じ色だと、そんなことを麻痺した頭で考える。

そんな呆然とする士郎を視界に入れて少し言葉に詰まった少女が、やがてハッと気を取り直し、一転、極めて優雅な所作でスカートの端を掴み、彼に向かって丁寧なお辞儀を行って言った。

「こんばんは、お兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

その言葉に、士郎は唐突に思い出した。

丁度昨夜、同じ様な時間帯にこの少女と士郎は出会っていたのだ。突然の出来事に混乱していたが、言われて見ればすぐに思い当たる事が出来た。

その士郎の様子を感じ取ったのだろう。目の前の少女が楽しげにくすくすと笑う。

「あーあ、こんな風に二回も会うつもりじゃなかったのにな。まぁ、しょうがないよね」

くるくる手を伸ばしてその場で回る少女。

言葉ほどに残念がっていないのは明らかだった。

無邪気なその仕草と、この場に満ちる殺気の間に隔たる、決定的な違和感。

……だがそれよりも、今の士郎には、この少女に問い詰めなくてはならない事があった。

「お前が、こんな事をこの子にしたのか……？」

「？　ええ、もちろんよ。このウスノロの所為で殺し損なったけれど」

「――――」

士郎の問いに、コツン、と、隣に立つ巨人の脚を蹴る小さな少女。

その当然の様に返された言葉に、彼は今度こそ瞠目して動けなくなった。

頭にカッと血が昇る程の激怒と、それを凌駕するほどの心からの疑問。耐えきれなくなった士郎は、突き動かされるがままにもう一度少女に問いを投げかけていた。

「……な、んで。お前たちは、姉妹じゃないのか？　それなのにどうして、こんな事を――――」

士郎が最後まで言い切る事はなかった。

尋常でないくらいの殺気が、唐突に目の前の少女から放たれたのだ。

「――――姉妹？　わたしとその紛い物が？

お兄ちゃん、二度とそんな事言わないで。でないとわたし、今ここでお兄ちゃんを殺しちゃうかも」

ぞっと士郎の背筋に悪寒が走った。

いや、背筋なんて生やさしいものじゃない。

体はおろか、意識まで完全に凍りついてる。

少女は決して偽りなど口にしていない。その確信だけが士郎の思考を掴んで離さなかった。

一方、少女は、ふっと冷たい表情を緩めると、空気を変えるように朗らかに口を開い

た。

「だからそいつを渡して、お兄ちゃん」

「え……？」

士郎は少女の言っている事が分からなかった。

その様子に少女は少しだけ眉を潜め、士郎の手の内に収まるイリヤを見下しながらもう一度告げた。

「だから、そいつをわたしに渡すだけでいいんだってば。そうしたらお兄ちゃんは見逃してあげる」

「っ！　そんなの渡せるわけ――――」

「――――いいから。じゃないと殺しちゃうよ。ねえ、バーサーカー」

士郎の言葉に覆い被す様に放たれた少女の声。

その声に応えるように今度こそ動き出す、黒の巨人。

「――――」

そこで士郎は息を呑んだ。

少しでも動けば死ぬ事になるのだと、その巨人の圧力が言葉として発せられていたのだ。

そして、その隣でようようと士郎の様子を観察する、残酷な色を灯した紅の瞳。

その両方に挟まれた士郎の脳内では、今まで感じた事のないほど正確な予感が湧いていた。

死ぬ。

きっと死ぬ。

惨たらしく、死ぬ事になる。

目の前の巨人には理屈など通じない。

圧倒的な死の具現の前では、矮小な人間など塵芥の様に散る事になるのだと、士郎は、必然に近い残酷な現実を読み取っていた。

……断れば死ぬ。

断れば死ぬ。

断れば死ぬ。
断れば死ぬ――――

――――それでも

「――――ダメだ。俺はこの子を、お前になんか渡す事は出来ない」

士郎は、襲いかかる全ての圧力を胸の内に呑み込んで、相対する絶望二つを見据えながら、精一杯毅然とした、決意を滲ませた声で、そう言い放っていた。

「――――っ」

それに息を呑んだのは少女の方だ。
その瞳に困惑の色が浮かぶ。
心から理解不能な、そんな存在を目にしたかのような表情を少女は浮かべた。

「なんで……？　お兄ちゃんはそいつの事を知ってるの？」
「……いや、知らない」
「じゃあ、なんで……？」

少女の問いに、士郎は答えなかった。
答えるまでもなかったのだ。
衛宮士郎は、倒れている誰かを見捨てる事はできない。自分はそういう生き方を選んだ筈だし、自分の腕の中で弱った少女を見捨てるなんて考えは、衛宮士郎にとって許されるものでない。
――――それがたとえ、自分の命を犠牲にするものだとしても。

「……」
「……」

耳の痛い沈黙が場に降りる。
その中でじっと黙して二人を視界に入れていた士郎に、少女はゆっくりとその両目を眇めて――――唐突に踵を返し、彼に対して背を向けた。

「――――もういい、帰る」

「……え？」

「帰るって言ったの。もう別にいいわ。お兄ちゃんはまだ呼び出してないみたいだし、よく考えたらそいつも問題にならないもの。器までなんて、ちょっと信じられないくらい精巧に作られているけれど、わたしがいる限り、そいつは所詮ただの出来損ない。今度見つけたときに処分すればいいわ」

そのまま道を歩いていく少女。

朗々と物騒な事を言っているが、もう今は士郎にもその腕の中のイリヤにも興味がない様子だ。

「まっ、待てっ！　この子は一体何者なんだ!?　昨日も言ってたけど、呼び出すって何を!?」

意味不明な事だらけで焦って問い叫ぶ士郎に、少女はまたもや楽しげに笑いながら振り返った。ただ先ほどまでと違うのは、困惑する士郎の様子が心底滑稽だと、そう馬鹿

にした色を瞳に湛えている事。
そうしてひとしきり満足するまで笑っていた少女は、やがて、その軽薄な笑みをどこかに引っ込めると、感情のない冷たい声色で、謳うように口を開いた。

「まだそんなこと言ってるのね、お兄ちゃんは。あいにくだけど、そいつの事は私も何にも知らないわ。でも心配しなくても大丈夫。わたしがきっと処分してあげるから。
そして、呼び出すものはサーヴァントよ。英霊、使い魔、エーテルの塊。なんとでも言えるけど、なんでもいいわ。それよりもはやく呼び出してね、お兄ちゃん。その時になったらわたしが――――」

――――殺してあげるんだから

少女はそう一言最後に言い捨てると、もう振り返らずに去って行った。
その後ろ姿を、士郎はただ愕然として見送り眺めている。
いつの間にかあの強力な存在感を放っていた巨人も、闇に溶け込むように消え去っていた。

月が、翳る。

再び流れ戻ってきた雲が、月に掛かっていた。
急激に薄暗くなる場の中、全てが闇に染まる中で、士郎はただ、浅い呼吸を繰り返し、次々に浮かび上がってくる疑問を一緒くたに飲み込んで、その場で独りごちた。

「くそっ、なんだってんだ一体全体ッ――――あっ」

よく解らないことばかりで苛立ち紛れに吐き出された言葉に、腕の中で眠る少女が反応した。
穏やかな呼吸に、しかし無意識に腕をさすって震える少女。季節外れの夏服はむやみやたらに寒そうで。
そのことに気づいた士郎は、自身の上着をすぐに脱いでその少女に被せながら、今度は違う意味で、心底困った声色で独り呟いた。

「……参ったな。とりあえず、家に連れて帰るしかないか。……藤ねえ、もう帰ってるといいけど」

そう言いながら少女の体を横向きに抱え込み、自身の家に向けて坂を登っていく士郎。ゆっくりゆっくり、その少女の身体を気遣いながら、なるべく振動を伝えないように。

そんな士郎の腕の中で緩やかに揺られている少女は、彼の胸に無自覚に頭をすり寄せながら、心から安心した穏やかな表情で、眠っていたのだった。

ＡＣＴ２　「夢と現実」

それはまだ、イリヤがもっと幼い、遠い日の記憶だ。

年の頃は四、五歳だったか。

まだ新築に近い自宅で過ごした何気ない日々。

物心ついたばかりのイリヤは真新しい家の中で、時折、得も知れない寂しさを感じることがあった。

もちろん、リズ・セラ・兄が家に居る。イリヤは彼らが大好きだ。それは昔から変わらないし、今も胸を張ってそう言う事ができる。

それでも、寂しいものは寂しかったのだ。

だって家のどこを見渡しても

父がいない。

母がいない。

幼少期の子供にとって両親というものは何物にも代えられない存在だ。

なら、その頃から父と母が殆ど家に居なかったイリヤが、その家で居るときにどうしようもない寂しさを感じるのも仕方ないというものだろう。

だからイリヤは、家の中から飛び出した。

不意に感じる寂しさを紛らわしたくなって、一人で家を飛び出して冬木の街を練り歩き、いろんな場所を探検した。朝早くから外で遊び、日が暮れる前に泥んこになって帰って来る――――そんな毎日。他の子達と比べて自分の足が速いのも、きっとこの頃の経験が生きているのだと、イリヤは密かにそう思っている。

生来のわんぱくな性格も（彼女自身認めるのは複雑だけど）あったのだろう。幼いイリヤにとっては家の一歩外ですら未踏の地だったのだ。『危ないから一人で決して歩き回らないように』というセラの言いつけを破ることに一抹の罪悪感はあったが、それすらも冒険の一つのスパイスでしかなかった。

そして、そんな幼い頃の日常の、ある日のこと。

その日は朝から快晴だった。近頃外出の味をしめたイリヤにとって、それは絶好の冒険日和。

だから、三時のおやつを引き換えにリズを買収して、セラが目を光らせている玄関と

いう名の自由の門を突破し、イリヤは外の世界へと繰り出した。なけなしのドーナッツを犠牲にしたのだ。その分も精一杯遊び尽くしてやろうと息込んだ彼女は、時間を忘れて色んな場所へと赴いた。草むらがあれば割って入ったし、知らない人が居れば気づかれないように尾行したりなんかもした。

そうして、ずんずんずんずん歩いて行った彼女がたどり着いたのは、知らない大きな公園だった。そこは随分人だかりが沢山あって、なんだかそれにとても安心したイリヤは、未知の遊具を使って遊ぶことにしたのだ。

――――そして、しばらく

イリヤはふと、沢山有った筈の人影が少なくなっている事に気がついた。

時間を忘れて遊んでたからだろう。いつの間にか夕日が山の向こうへと段々降りて行って、薄暗い闇が広がりつつあった。まばらになっていく人影の代わりに、ぽつぽつと公園の街灯が点いていたのだが、幼い彼女にとってはそれがかえって不気味に思えたのだろう。それに思わず震えて公園から出ようとしたイリヤだったが、尚悪いことに、そこに行ったのが初めてだったから、家への帰り方すらわからなかった。途方に暮れた。

夜の公園に一人。その状況に震えたイリヤだったが、それでも他に行くあてがなかった。だから、仕方なくブランコに座ってぎいぎいと音を鳴らし、母親や父親と手をつないで帰る他の家の子供たちを、イリヤはぼんやりとして眺めていた。『今日は帰ったらハンバーグだから』そんな声が彼らの方から聞こえてくる。それを横に、イリヤは、淋しさと悲しさの感情が浮かんだ紅い瞳を、ただ茫洋として携えていた。

家にいる時と今一人でいる寂しさ。それらがない混ぜになって込み上げてくる孤独感に、イリヤはもう堪えきれなくなって膝を抱えて目を瞑って――――だけど、そんな時に、ふと声を掛けられたのだ。聞き覚えがあって、耳触りの良い、優しい声。そしてそれにつられて顔を上げると、やっぱり想像通りの人影があった。

それは、走り回ったのだろう、自分以上に泥んこで息切れした兄の姿。

そして兄は勝手に家を抜け出した自分に怒るでもなく、ただ自分の無事な姿に安心したように笑い、イリヤを背におんぶして歩き出したのだった。

それから、家までの帰り道。

二人はポツポツと話をしながら帰っていた。

現金なもので、幼い頃の彼女は迎えに来てくれた兄に安心したのだろう。不安から解

放された途端いろんな感情が爆発したイリヤは、わざわざ迎えに来てくれた兄に向けて、なぜ自分が家を抜け出したのか、いかに自分が寂しく思っているのか、それを泣きじゃくるようにして話していたのだ。

とつとつと、ただ感情をぶつけているだけの支離滅裂な言葉の束。それを黙って聞いていた兄は、やがて、静かにイリヤの泣き言に言葉を挟む。

『俺も本当の両親の顔を覚えてないことや、親父やアイリさんが家に居ないのを残念に思うことはあるよ』

その言葉を聞いて、イリヤはハッとした。イリヤが更に小さい頃に引き取られてきた兄は、自分以上に親というものに関して寂しい思いをしてきたのかもしれない。そのことに気づいたのだ。幼いながらも、なにか思うことがあったのだろう。彼女は兄の首にぎゅっと抱きついた。

そんなイリヤを他所に、兄は穏やかに笑って言った。

『でも、俺にはイリヤがいるから。もちろんリズとセラもいる。中には兄妹だっていない人がいると思うけど、俺にはみんながいるから。……イリヤは、どうだ？』

彼女は言葉を返さなかった。ただ無言で、ぎゅっぎゅっ、と、兄の首に回した手の力を強めていた。

それを感じ、兄が嬉しげに頷いた。

『よかった。……ただ、どうしようもなく寂しくなったら言ってくれ。俺はイリヤのお兄ちゃんだから。だから、いつだって側に居てイリヤを守るよ』

その言葉は、何よりも暖かくイリヤの寂しさを溶かしていった。

そして、とても安心した彼女は、彼の背中をしばらく目に焼き付けようと思いながら、だけど、その体温の暖かさと振動に揺られ、いつの間にか知らず眠っていたのだった。

それは、もう、遠い昔の日の出来事。

今でも鮮明に覚えている、イリヤがもっと兄を大好きになった、陽だまりのような記憶だった。

――――目を覚ます。見慣れない天井がイリヤの視界に飛び込んだ。

薄暗い部屋の中で見えるのは自分の部屋のものではない色。等間隔に並べられた竿縁の上に乗る天井板は、洋室ではなく和室のものだ。イリヤはまだ曖昧な気分のままその木目をぼんやりと眺めて、ここどこだろう、と、覚醒しきっていない意識で考えた。

軽く寝返りを打ってからうつ伏せで身体を起こす。乾いた衣擦れの音とともに、銀の長髪がさらさらと顔と肩に零れた。その前髪を手でよそって整え、依然判然としない頭で部屋の中を見渡してみる。すると、窓から差す月明かり越しに、素朴な白襖がうっすらと見えた。次いで浅く呼吸をすると、余り使い込まれていない畳の匂い。どうやらここは一般的な日本間のようで、部屋の中央に敷きぶとんが置かれた、そこに自分は横になって寝ていたらしい。

周囲を観察したところでますます意味がわからなくなったイリヤは、とりあえず、もっとしっかり意識を起こそうと軽く伸びをして

「――――っッ」

不意に全身に走った痛みに、思わず身を潜めて耐えることになった。
何なの、と、疑問に思いながら軋む身体に耐え切れず視線を落としたイリヤは、そこで手足に施された治療の痕を視認する。大量のガーゼとその上から巻かれた包帯。ところどころ血が滲んで赤染んだ白布は、自分の事ながらとても痛そうに見えた。
何故そんな怪我をしているのか、起きてからずっと混乱続きで頭が全然ついていっていない。
イリヤは軽い深呼吸をして、それから一つ一つ、絡まった記憶の束をゆっくりと解いていって――

「――――ぁ」

そこで、思わず声を漏らした。

思い出したのだ。
頭が真っ白になったのと同時に、無意識の内に避けていた記憶。圧倒的な死の気配と、それによってもたらされた残虐な行為を。

「……ぁ……ぁあっ」

継いで出てくる筈の声を上手く発せない。
記憶とともに襲ってくる恐怖が大きすぎて、イリヤの許容範囲を超えて脳が混乱しているのだ。
それでも、夜気にさらされて頭が目覚めるにつれ、あの恐ろしさが実感を伴ってイリヤの全身を覆いだす。
――――自分と同じ少女が赤い瞳で笑って以前戦ったカードがなぜかあって自分の瞳を触られて巨人に追い掛けられて背中に衝撃を受けて――――
「ぁ、ぁあっ……ぁあぁあっ……！」

イリヤはその場に屈み込んだ。漏れ出そうになる声を、顔を布団に押して必死に堪えようとした。
それでも、体の芯から込み上げる震えを抑えきれなくて、
次いで不確かに視界がぼやけていって、それに気づいて、
イリヤは、自分にできる精一杯の我慢を用いて、次々にやってくる恐怖心を一人噛み殺すしかなかった。

「――――あ、目が覚めたんだな」

だけどそんな時、不意に横から聞こえてきた声。
それに対して、イリヤが緩慢に顔を上げて視線を送ったその先。
ずざ、と開いた襖の向こうに見えたのは、赤銅色の髪と琥珀の瞳。見覚えのある、その優しい色。
やがて声の主の全体像を視界に入れたイリヤは、くずおれた姿勢のままでまた思考を停止させた。
一方、その人物は自身の体を抱き締める彼女を見て何を思ったか、はたと口に手をあてて考え込む。
「ああ、そっか。そんな埃だらけの服は嫌だよな」
……この人は何を言ってるんだろうか。

全く見当違いのその発言に、凍りついていた思考が氷解した。
未だ難しい顔をして考えるその姿に、凝り固まった身もほぐれていった。

「ええと、一応体を拭いて手当てをしたトコで、着替えさせるのはさすがにマズイかなと思ったんだけど。……うん、よし。とりあえず、もし良かったら俺の子供の頃のものを――」

言葉が最後まで告げられることはなかった。
彼が顔を上げた、その途端、ものすごい速さの銀色が視界に現れたのだ。

「お兄ちゃん……っ!!」
「うおっ!!?」

どんがんどすん
なんて音を立てて、もつれ倒れる二人。
不意に鳩尾に叩き込まれた衝撃に、彼――――士郎は、そのまま自身の部屋に押し戻されて尻もちを打った。そして間髪入れず胸に押し付けられる華奢な身体に、さらさら

と彼へと落ちる長い銀の髪。

「な、ちょ、ちょっとまっ――――」

あまりにも予想外の少女の反応に、士郎はいったいどういう状況なのかと慌てて少女を諌めようとして――――その言葉をふと飲み込んだ。そして気づく。背に回された彼女の手が震えていることに。

少女を見ると、彼女は歯を噛んで彼にひっ付いたまま顔を俯かせた。銀色の髪が顔に掛かって、その表情はそれ以上見えない。

「……お、にいちゃ、ん」

その耳に、微かに震えを押し殺した声が聞こえる。

それに思わず息を飲む士郎を余所に、少女が何かに耐えるようにして涙声で続けた。

「怖、かった……怖かったっ、怖かったよぉ!!

知らない所で、何もかもワケがわからなくて!!

怖くて、痛くて、辛くて……寂しくて……!!
やだ――――もうやだよぉ、お兄ちゃん……」

彼を掴む手に力がこもる。まるで、この場に、自らの側に、必死に彼を留め置こうとするかの様に。

「――――ひとりにしないで」

消え入りそうなその言葉が、士郎の耳に確かに届いた。

「……」

士郎は瞠目し、黙って少女の顔を眺めた。
俯いたまま、歯を食いしばっている少女の顔を。
微かな震えは止まらず、肩に伝わってきて

ふと

少女の様子に、士郎は既視感を抱いた。
その感覚を知っている。その感情を知っている。
その怖さを――――確かに自分はよく知っていた。

それは、もっと幼い、士郎がこの家にやってきたばかりのこと。
あの頃の自分は、まだあの時の悪夢を見てよく泣いていた。十年前の大火災の記憶。炎の海に飲まれて死んでいった大勢の命。その大量の骸が、のうのうと生き延びた士郎に向かって怨嗟の声をあげる夢。それに魘され、ぎりぎりと歯を喰いしばり、布団を握り締めながら耐えていた自分。毎晩毎晩、就寝とともに訪れる恐ろしい光景に、ともすればその声に呑まれ、二度とその夢から醒められなくなるのではと思うこともあった。

だけど、そんな夢に怯えて震えていた時、いつだって気づいてくれる存在が士郎には

あった。
隠し通そうとしても何故か絶対に士郎の様子に気づき、そしてずっと側に居てくれたその人。ともすれば鬱陶しく感じるほどに騒がしくて、こっちが怯えるのが馬鹿らしく思ってしまうほど底抜けに明るいその人。子供心に強がりながらも、本音を言うと、それが心底嬉しかったのを、今でも鮮明に覚えている。
だから、自分は――――

「――――大丈夫、大丈夫だ」

二度繰り返しそうやって言い、少女の肩を緩く抱き締める士郎。
それに少女はぴくんと肩を震わせ、ややしてから力を抜いて息を落ちつかせると、瞳にあふれた涙を隠すように彼の胸に頭を擦り寄らせた。背に回した腕を深く、彼の存在を側に感じられるように。
そして士郎は、そんな少女の背を、とん、とん、とん、と一定のリズムで叩く。ゆっくり、少女が自分の腕の中で、ちゃんと安心できるように。

いつかだれかに、ほかでもない自分がそうしてもらった時のことを思い出しながら、士郎はただ静かに、少女が泣き止むのを待っていた。

■

「ご、ごめんねお兄ちゃん、急に泣いちゃって」
赤らんだ目をごしごしと拭いながら、彼に向かってはにかむイリヤ。
「……いいや。落ち着いたなら、よかった」
それに士郎は、安心させるように少し不器用に微笑んだ。

その不意打ちの笑顔に思わず赤面したイリヤは、誤魔化す様にわざとらしく咳を零して――――そういえば、と、溜まり溜まった疑問を吐き出していた。

「お兄ちゃん、ここどこ？　家に和室なんてなかったよね？　もしかして旅館か何か？　それにしては物が少ない気がするけど……あ、そういえばクロやミユ、リンさんやルヴィアさんを見なかった？　わたし、ちょっと色々あってみんなと離れ離れになっちゃったんだ……って、そういえばお兄ちゃん!!　あの子とあのカーッ……か、怪物はどうなったの!!?　あれからお兄ちゃんは大丈夫だったの!!!?　どうやってわたしたちあそこから――」

「ちょ、ちょっと待ってくれ!!」

矢継ぎ早に質問を繰り出すイリヤの勢いを、がしっと両肩を掴んで留める士郎。

それに『あ、お兄ちゃん凛々しい』なんて更に頬を赤らめたイリヤは、ぱくぱくと口を開け閉めさせて頷いた。

そして、その様子にほっと一息ついた士郎は、次の瞬間、イリヤの全く予想外の言葉を発したのだった。

「――――その前に、君の名前、教えてもらってもいいか？」
「え……？」

イリヤの思考が、今度こそ完璧に停止した。ただ瞠目して口を半開きにし、まっすぐに自分を見つめる彼の瞳を見た。
だけど、少しして言葉が頭に馴染んだ彼女は、震える声で口を開く。

「……な、なに言ってるの、お兄ちゃん？
わたし、イリヤだよ？
お兄ちゃんの妹の、イリヤスフィールだよ？
……冗談、だよね……？
お兄ちゃんの嘘なんて、全然面白く、ないよ？」

彼女の言葉に、彼は首を横に振った。

「いや、俺は君のことを知らないし、ましてや俺に妹なんていない。
……たぶん誰かと混同してるんだと思うけど、無理もないさ。あんなコトがあったば

かりだもんな」

タチの悪い冗談だと思った。縋り付く様に目で問いかけていた。

だけど、訥々と、困惑した自分の様子に僅かな逡巡を交えながら語る士郎の様子が、その話の信憑性を裏付けしているようで、イリヤは、その確信にも似た嫌な予感を振り払いたくて、更なる質問を目の前の兄に重ねていたのだった。

「じゃ、じゃあセラやリズのことは!?　そ、そうだ今は家にママもいるよね!?」

「……いや悪い、知らないんだ。それに俺に、母親はもういない」

「――――っ！　じゃあ海外のお父さんのことは!?」

「海外での親父に？　……いや、どうなんだろう、切嗣に別の子供が居たってのは聞いたことないけど……」

「！　キリツグってお父さんの名前だよっ!!　わたしが掛けるから電話貸してお兄ちゃん!!」

やっと望む言葉を聞けたイリヤは、士郎に必死に頼みこんでいた。普段父が決まった番号を持たないことも忘れ、焦燥感に押されて連絡を取る方法もわからないままに。

しばし考え込んでいた士郎は、そんなイリヤに再度首を横に振って口を開く。

「いや、たぶん別人だと思う」
「な、なんで!?　キリツグなんて名前、他に聞いたことないよ!?　絶対お父さんだよ!!」
「……君のお父さんは、今海外に居るんだろう？」
「そ、そうだけど」
「……だったら、違う」
士郎は一旦言葉を切った後、狼狽するイリヤに言い聞かせるように、はっきりと言った。

「俺の親父は、五年前にもう死んでいるんだから」

――――その言葉に

唐突に、イリヤは理解してしまった。

「――――あ」

知らず納得の声が零れる。

昨日から今までの、先ほどまで全く分かっていなかった状況。その点と点。不意に頭の中でそれら全てが繋がり、一つの結論をもたらしたのだ。

……何故、

今まで悟ることができなかったのだろうか。

恐怖に囚われていたから？

兄の存在に安心しきっていたから？

イリヤは自問自答を繰り返したが、きっと、そのどれもが少しずつ正解だったのだろう。

それでも、結局、イリヤは無意識のうちにその結論を避けていただけ。

ただ、今の士郎の言葉が、その結論を出さないこと以上に、彼女にとって認められるものではなかったというだけなのだ。

「え、おい、大丈夫なのか？」

士郎が心配そうに伺ってくるが、それにイリヤは返答を返せなかった。その場で思考がぐるぐる回って、何度も何度も夢じゃないかと疑問を繰り返していたのだ。

自分の置かれている状況を理解したイリヤは、ただ、途方に暮れるしかなかった。

――――『平行世界』

そんな言葉が、イリヤの脳裏に浮かんでいた。

２月２日
ＡＣＴ３「面影」

とんとん、ことん。

小気味よく響いた包丁の音を休ませ、士郎は最後の具材の準備を終えた。今切り分けたばかりの果物を、水分が他のおかずに染みないようワックスペーパーの隣に詰め、弁当箱の蓋を閉める。

そんな彼の様子を朝食後の皿洗いをしながら見ていた桜が、ふと疑問に思って尋ねてきた。

「あれ？　先輩、そのお弁当どうしたんですか？」

「ん、ああ、ちょっとな」

「……でもそれ、いつもは使ってないお弁当箱ですよね？　それに、さっき先輩の分は別に詰めてた気がしますし……」

「あ」

重ねての質問に、思わず惚けた声をあげる。

彼女の目敏さには感心する士郎だったが、正直今は困ったもの。なので、彼は苦しい言い訳をすることにした。

「え、ええっと、これは一成の分。ほら、あいつってお寺の子だろ？　そんでもって親父さんの趣味で肉料理が禁止なんだ。それでよくおかずを盗られちまうもんだから、今日くらいは作ってやろうと思って」

「……そういえば、今日は生徒会に寄るって言ってましたね。なるほど、納得です」

彼の言葉に妙に安心して頷く桜に、士郎も同じくらい安堵してほっと息をついた。

ただ、そこで突っかかってくる人も居る訳で。

「あ～～～っ!!!!　士郎、ずるい!!　さっき私がお願いした時は作ってくれなかったくせに、柳洞くんには作っちゃうんだ!!!」

「……藤ねえのは桜が用意してくれただろ？　それに桜の作った蓮根とこんにゃくのいり鶏、『おいしい、おいしい』ってさっきも食べてたじゃないか」

「むむ、それはそれ、これはこれよ！　私も士郎のおかず食べたいんだから！　食後の果物食べたいんだから！」

「はいはい」

「コラ～ッ!!　お姉ちゃんはね、士郎をそんな子に育てた覚えはないわよ～～っ!!」

はいはい、と、先程と同じように繰り返しながら、士郎は鞄にその弁当箱を入れる振りをしつつ、居間を後にする。おざなりなその態度にがみがみ怒る声を背中に聞いたが、それを無視して自室へと向かった。居間からのそう長くない廊下を、しかし、いつもより少し足取り遅くして渡り切った士郎は、静かに障子を開いて室内へと戻り、ふぅ、と体の力を抜くように息を吐いてその場に佇立する。

そうして、暫く。

意気込みを決めたのだろう。やおら、彼はくっと顔を上げて吐いた以上に息を深く吸い込むと、自室と隣室を遮る襖の前に向かって立ち、ひどく神妙な表情を持って、静かな声でそこに語りかけた。

「……起きてるか?」

返事はなかった。

予想していたのだろう。彼は構わず言葉を続けた。

「一応、弁当を作ってみたんだ。
ほら、昨日から何も食べてないだろう？　気づかないうちに腹は絶対空いてると思う。
……嫌いな食べ物とか、あったか？」

返事はない。

「あ、その前に着替えがしたいんだったら、俺の古着を用意したのを好きに使ってくれ。サイズがよくわからなかったから、こっちの机の上に幾つか余分に準備しておいた。
……デザインには期待しないで欲しいけど、動きやすいのを選んだつもりだ。それで、いいか？」

やはり、返事はなかった。

「……」

変わらない沈黙に、彼は軽いため息を吐いた。同時に、昨夜の少女の様子を思い出す。

昨日、士郎にとって全く意味がわからない質問に答えた後、呆然自失といった風に全く言葉を発さなくなってしまった少女。心配になった彼が声を掛けても、彼女はただ唖然として動きを見せなかった。そしてその姿に戸惑った士郎が、仕方なしに彼女の肩を揺らして気づけをしようとした――――その時、ようやく士郎の姿を再度しっかりと認識した少女が、何故か心底怯えたような目で彼を見たのだ。

そうして、少女がそのままの表情で後退り、下を向いて呟いた、『一人にして』という懇願の言葉。そんな姿の彼女にどう対処していいか分からなかった士郎は、ただその言葉に頷くしかなかった。――――今はそのことを、酷く悔やむ。

やがて、士郎は少し言葉を溜めるように息を潜めたと思うと、できるだけゆっくり、なるべく相手を安心させられるように、落ち着いた声色で、別の問いかけを発するのだった。

「……『イリヤスフィール』っていうのが、君の名前なんだよな？」

――――その言葉に

襖の向こうで、微かな物音が立つ。
次いで聞こえる、深く潜められた呼吸音。
それに少し手応えを感じた士郎は、もう一度同じような調子で問い掛けた。
「……何か、知ってることを話してみてくれないか？」
一歩二歩、相手に踏み込んだ質問。昨日、彼が少女についぞ出来なかった問いかけだ。
その大胆な彼の問いに、襖の向こうからいっそう大きな物音が聞こえてきて――――
それでも、返事はなかった。
ただ聞こえるのは彼と彼女の息遣い。
その後に続く言葉はどこにもなく。
間にある襖一枚が実際よりも大きく二人を隔てているような、そんな風に士郎には感じられた。
ゆっくりと時間だけが過ぎていく。
朝特有の清涼さとは逆の、どこか重苦しい静寂。

その中で無意識のうちに手を握りしめ、士郎は少女の返事を根気よく待った。

――――そして

「士郎～！　何やってるの～～？
桜ちゃんが玄関で待ってるんだから、早く支度しなさいよねー！」
聞こえてきたのは士郎が望んだ物でなく、違う方向からの騒がしい声。その内容の呑気さに思わず溜息ひとつ零して、彼は呼びかけの主に返事を返す。
「もう行くさ！　藤ねえもさっさと行けよな!!」
「へっへーん、士郎に言われるまでもなくもうスクーターも出しちゃってるもんねー！
とにかく、二人も遅刻はしないこと！」
『また後でねー！』なんて言う大声が、ブブンと鳴るエンジン音とともに遠ざかって行く。
朝っぱらからのその元気さに脱力を抑えきれない中、彼は改めて襖の前に向かい立ち、努めて朗らかな声で話しかけた。
「俺も学校に行ってくる。家にあるものは何でも使ってくれていいから……それじゃあ」

言いつつ、念のためさらさらと書置きもしたためた士郎は、最後まで帰ってこない返事を背に、軽く首を振って部屋を後にした。

広い家の長い廊下。片側を大きなガラス窓にしたその廊下を、一人歩く。今日も変わらず、暖かい陽光がガラス越しに木造の床に落ちていた。

歩きながら士郎は思う。

なぜ、どうして、自分はこう何もできないのだろうかと。たった一人の少女すら痛めつけられる前に助けることができず、震える彼女が何故震えているのか知らず、そんな彼女をどのようにして元気付けてやればいいのか、それさえも自分には分からない。

こと、こういった事柄に関しては、本来なら自身の姉貴分とも言える人に相談すべきなのだろう。底抜けの明るさが持ち味なあの人だ、きっと見知らぬあの少女相手にも親身になって話し合い、そうして緩やかに彼女の心を開かせていくだろう。自分も少なからず影響を受けたように、暗かった頃の桜のあの笑顔を引き出していったように。急に女の子を家に連れ込んだなんて知られればきっと大騒ぎになるだろうが、今のあの少女の様子が明るくなるのなら、それは士郎にとって些細な話だ。迷う筈のない事だった。

……ただ、その選択肢を取れない理由が士郎にはあった。それは、昨晩あの女の子を襲っていた者達の存在。少女と巨人、明らかに此方側（魔術）に関わる、あの二人組。彼等は危険な存在だ。特に、いま士郎の家にいる少女と同じ姿をした、あの紅い瞳の少女。

勿論、単純な脅威や存在感から言えば、巨人の方が上だろう。あれは死そのものだ。敵対した者にとって暴虐的な残酷さの象徴であり、あの存在に抗う術なんてない。――――だが、それよりも怖いのがあの少女だった。ただ茫洋と意思が感じられなかった巨人と違い、どこまでも無邪気に人を殺すと宣言した銀の少女。彼女はあのイリヤという子だけでなく自分も殺すと言っていたが、きっとあの言葉に嘘はなく、彼女は躊躇などしない。路傍の石を蹴るよりも軽く、あっさりと、自身の邪魔となる存在を排除するのだと、あの巨人へ残酷な命令を下すだろう。士郎には奇妙な確信が湧いていた。

そして、そうであるのなら、身の周りの人間を不用意に巻き込む事は出来ない。士郎にとって、あの二人の女性は日常の象徴なのだ。父から習った魔術を鍛える傍ら、そのことを知らずに、ただ彼のことを想って自身の家にやってきてくれるあの二人。そんな彼女達の身が、魔術に関わる・事によって危ぶまれるなど、あってはならない。

――――だから、自分がなんとかする必要がある。例え力が足らず無謀だとしても、例え自身の命がいくら脅かされることになろうとも、何より、『正義の味方』を目指す衛

宮士郎として、あの様な存在を見過ごす事は許されないのだから――――。

「……先輩？」

聞きなれた後輩の声が掛かる。

そこで自分が玄関にたどり着いていた事を知った士郎は、その前で既に準備を終えて土間に立つ桜が、心配そうにこちらを窺っていることに気づく。

彼は詮のない思考を巡らせていた自分に苦笑し、靴を脱いで駆け寄ろうとする桜を手で押し止めて言った。

「悪い、桜。ちょっとぼんやりしてた」

「……先輩、本当に大丈夫なんですか？」

「ああ、もちろん。

それじゃあちゃっちゃっと出るか。このまま遅刻でもすれば藤ねえが調子に乗っちまう」

「……」

依然気遣い気な表情の桜を外に促す。靴を履いて、自分も同じように家を出た。
今日は学校に行かなくてはならないが、明日は幸い日曜日だ。もともと取り立てて用事もなかったし、明日一日を費やして少女と向き合い、そうして少しでも彼女の助けになれるように自身の力を尽くす事にしよう。
そう結論を出した士郎は、『桜と藤ねえに念のため明日は断りを入れとこう』なんて考えつつ、玄関の引き戸と鍵をしっかりと締め、学校に向かって歩き出した。

■

イリヤは夢の中にいた。
そしてそれを、彼女は自覚していた。

夢を見るのは眠りが浅い時だと言うが、それは間違っている。イリヤはそう思う。
いや、そうじゃないとおかしい。だって、今、自分はあんまりにも長い夢を見ているのだ。浅い眠りだとしたらとっくに覚めているだろう、ずっとずっと長い夢。ともすれば、奇妙に鮮明な自意識と相まって、その夢が実は現実だと言われても、信じてしまうくらい。

いずれにせよ、イリヤは自分がいる此処が夢だと認識していた。
理由は簡単で、夢の中で繰り広げられる出来事が単純に現実でありえないコトばかりだから。
それは本当に荒唐無稽な話で、自分自身変だと、ありえないと、すぐに理解することができた。

その夢の中では、まずイリヤは見知らぬ場所に投げ出されている。寒い、冬の日の夜、たった一人で路上にぽつんと。現実世界では夏だったから、これが第一におかしな点だ。もしもこんなにおかしなコトが現実だとしたのなら、あの魔法ステッキが飛んでこない筈がない。

次に見知らぬ少女が現れる。いや、見知らぬ少女と言ってもその姿は見慣れたもので、彼女の姿は自分と全く同じ物。……自分自身、安直なものだと心から思う。きっと、クロの姿が自分と少しだけ異なるものだから、完全に同じ存在を夢の中で作り出してみたのだろう。そして、これが▪次のおかしなコトとして、その少女は以前自分たちが倒した筈のカードを従えていた。こちらの方も、これが夢だから知っている存在を再利用したのだと、そう推測する。

そして、その少女とカードはイリヤを追いかけてくる。自分を捕まえて殺すのだと、ひどく残酷な事を言って追いかけてくるのだ。それは本当にリアルに感じられて、実際に痛みや恐怖などを本当に受けているように思えるくらい、現実感を伴っている出来事。もう自分自身、そんな怖い夢をわざわざ見る必要もないと叫びたかったのだけど、その後に、なぜ自分がこんな夢を見る事になったのか、イリヤは理解することになった。

なんと、兄が現れたのだ。ピンチの場面、怪物に追われ、蹴飛ばされ、イリヤが夢の中で死にそうになっている、その時に。そこでイリヤは悟る。自分がわざわざ怖い夢を見ていたのは、よく見ているアニメや漫画みたいに『主人公がヒロインのピンチに颯爽

とやってくる』――――そんな場面を再現したかったのだろうと。主人公が兄で、もちろんヒロインがイリヤ。そうして、その予想通りに兄に助けられて、彼の家に連れて行ってもらう自分。夢の中の自分と兄は他人設定だったが、これはきっと、自分が日々妹という立場に満足しつつもどこかそれ以上を望んでいた、そんな気持ちの顕れなのだろう。……まったく、これでは乙女思考だと馬鹿にしてくるルビーに反論ができない。イリヤはそう自嘲して苦笑したくなった。

何はともあれ、彼女はこれを夢だと結論付けた。
だって、今ざっと振り返っただけでも分かる。
この夢はおかしな所だらけだ。
現実にはありえない、そんなコトばかり。
だから、自分が今居るのは、深い深い夢の中。
絶対にその筈で、そうでなくてはならない。

そうである、ハズなのに

『イリヤスフィールっていうのが、君の名前なんだよな？』

何故、そんな言葉が、聞こえてしまうのだろうか。

「――――――あ」

思わず、イリヤは声を漏らす。

それと同時に、その小さい声がくぐもったように近くで響き、嫌でも自身の耳に入っ

てきた。
そして耳で音の振動を拾ってしまえば、次にそれは脳に上がって認識という段階に至り――――そこでイリヤは、自分の意識が確かに現実にあるのだと、自覚した。

「――――っ!!」

零れ出そうになる悲鳴を必死で押し殺す。
恐怖で噛み合わない歯が擦れて鳴る音がした。
障子と襖。できる限りの光を遮断したその薄暗い部屋の中、壁際に凭れた毛布が一つ、ぐちゃぐちゃになって置かれている。そして、その毛布の内側で視界を真暗闇にして、かたかたかたかた、ただ震えている少女が一人。

どれだけの間、震えていたのだろう。
どれだけの間、涙していたのだろう。
現実逃避していた頭は判然とせず、大まかな感覚さえ覚束無いでいる。

だけど、今になって確かなことが一つ。

彼女は夢を見ていなかった。
いや、そもそも、眠ってさえいなかった。

昨夜のあの彼との問答。
その結果、ここが平行世界だと知ったイリヤは、その事実を到底受け入れられなかった。なにせ、ここには父も母も、リズもセラも、誰も居ない。そして、たとえ彼らが居たのだとしても、自分が知らない世界だということは、ここでは誰もイリヤのことを知らないということで――――。

――――それは当然、彼女の目の前に居た、兄にも当て嵌まることだったのだ。

「……なんで……どうして……」
抑えきれなかった疑問が零れ落ちるが、それに答える声も此処にはない。

理由もわからず殺されそうになったこと。それはもう良かった。だって思えば、イリヤは既にそういった事に慣れてしまっている。魔術という存在を知って魔法少女となったイリヤは、これまで数々の理不尽と対峙してきた。手強いカード達や自身の半身

であるクロ、そんな相手との戦いでは、ともすればその命を落としそうになる事も多々あっただろう。だから、どれほど残虐な目にあったとしても、時間が経てばきっと自分はそれを呑み込んで歩いていける。

知らない場所に一人で取り残されそうになったこと。確かに一人は心細い。加えて意味不明な事ばかりが起こる状況では、ただ震えて身を潜めるしかなかった。……けれど、それも既に解決した筈の事だった。だって、一人だと思い込んでいたイリヤの前に、自分が一番大好きな人が現れてくれたのだ。だからイリヤは安心した。その姿に安堵し、情けなく涙して縋り付きつつも、その人のお陰で立ち上がることができる筈だった。

なのに、どうして、よりにもよって――――

「……おにぃ、ちゃんっ」

自分で呟いたその言葉に、イリヤは流しきった筈の涙をまた流し始めた。

必死に目を閉じても一睡もできなかった。それでも、懸命に耳を塞いで毛布の中にくるまっていたイリヤ。何も聞こえず、何も考えず、そうしている筈だったのに――――

けれど、そんな彼女にどうしても聞こえてしまう声、そして目蓋の裏に浮かんでしまうその姿。それは、彼女が最も好きで、いつまでも自分の味方だと、そう最も信頼していた人物だった。

――――それなのに、よりにもよってその人物に、『お前など知らない』と、そんな言葉を突きつけられてしまったのだ。

だから、イリヤは堪えきれなかった。
未だに部屋の隅で、ただ震えていた。
長い長い時間だけが、ずっと過ぎていった。

そして

ぐう、と、彼女のお腹から、小さな音が鳴った。

……。

……。

「……うぅ」

イリヤは思わず涙を浮かべた。気の所為だと思って腹部を抑えて背中を丸めるが、それでもマヌケな音は留められずにぐぅぐぅと鳴り続ける。

「……お腹、すいたよぉ」

口に出すと、また音が大きくなった気がする。

本当に情けない。今はそんなことは気になんかならないと思っていたのに。……だけど、それも仕方がない事だと思う。だってこれは生理的反応という物。昨夜から何も食べていなかった胃は空っぽになっていたのだ。結論、お腹も減るし鳴る。イリヤはそんな風に心の中で独りごちた。

そして、ふと俯かせていた顔を上げて訳もなくきょろきょろと部屋を見渡したイリヤは、やがてもぞもぞと毛布から抜け出し、そうして起きてから初めて、この部屋を出ることにしたのだった。

障子と襖。

二つある出口を見比べたイリヤは、少ししておそるおそる隣室に繋がる方に近づき、扉を開く。

すると、明るい光が視界に飛び込んだ。暗闇の中にいた彼女の目はしょぼしょぼしていて、顔の前に腕を翳して瞳を眇めながら歩き出そうとして――――コツン、と、何かを軽く蹴飛ばした感覚を得た。

「……お弁当箱？」

下を向いたそこにあったのは、シンプルな灰色の四角形。そしてその横にある、五百ミリリットルサイズの水筒が一つ。頭に疑問符を浮かべつつ屈み込んでそれらを手に取ったイリヤは、その下に敷かれてあったメモ用紙も加えて発見した。

『しっかり食べること』

そう一言書かれた素朴な筆跡の伝言。

それがまた、どうしようもなく誰かの書いた物と同じように見えて、イリヤはひとりでに潤みだす瞳を腕で拭いつつ、少しの逡巡の後、その場にしゃがみ込んで弁当箱の蓋を外した。

「……わぁ」

思わず声に出して感嘆した。

蓋を開けたそこにあったのは、丁寧に調理された具材の数々。もうとっくの昔に冷めてしまっているだろうに、おかずの一つ一つから美味しそうな香りがせり上がってきて、イリヤの鼻腔を擽った。

一瞬、彼は自分の事を知らないのにここまで世話になってもいいのだろうか、そんな考えが頭によぎった彼女だったが、追打ちとばかりに鳴った腹の音には勝てなかった。備え付けの箸を持ち、弁当の端っこに入った卵焼きを一つ、片手で受け皿を作りながら口に運んだ。

「――――美味しい」

そう漏らしたイリヤは、瞠目して動きを止めた。

静かな和室の畳に、傾きを変えた陽光が強く差し込んで、がらんとした部屋に暖かな

色を灯す。
しばらく黙ったまま居住まいを保っていたイリヤは、やがて、自身のごくりと言う喉の音に誘われるように、ゆっくりと次のおかずに手をつける。
そうして、一口、二口、食べる度に口にするスピードをどんどん早くしていく。
もうイリヤは、ただ無心で手を動かしていた。
お腹がすいていたと言うこともあるのだろう。特別食いしん坊というわけではないが、家で出される料理は美味しく、そこで育った彼女もまた、食事をしっかり取るということを覚えていた。
……だが、それだけが理由ではない。
今イリヤが食べているこの料理は――――兄が作った物に、とてもよく似ていたのだ。

勿論、イリヤは既に、兄とあの彼が同一人物ではないことを理解している。そもそも、味付けや盛り付け方、様々な部分がイリヤの世界の兄の物とは異なっていた。
たとえば、イリヤの兄は弁当に和洋中様々なおかずを入れるが、この弁当は和の色で統一されている。それは幼かったイリヤが要求していた事の名残で、その分、この弁当のおかずはどれもとても美味しいのだけど、兄と比べると、弁当全体の色合いに関して

はあまり気を遣えていない様に思う。

他にも色々な違いがあった。

兄は最近、少し凝って土鍋でお米を炊く。こちらはたぶん、炊飯器で炊いたお米だろう。

こちらの弁当には白菜の深漬けが入っているが、兄は作らない。それは家に嫌いな人がいるからだ。

……こんな風に違いなんて幾らでも言える。自分は小さい頃からずっと、兄の料理を食べてきたのだから。

それでも、イリヤはこの料理の品々の中に兄の姿を見る。それは、ほんの些細な『気遣い』の現れ。

この弁当には揚げ物が一つもなく、代わりに胃に優しい豆腐や大根などが多く使われている。これはきっと、昨日からずっと食事を取らずに震えていた自分の体調を気遣ってのものだろう。

この弁当には色んなおかずが少しずつ入っている。もしかしたら、好き嫌いがわからないイリヤのために、わざわざそうしてくれたのかもしれない。

他にもそういった配慮の意識が節々に感じられた。紛れもなくこの弁当はイリヤの為に心を尽くして作られた物で、それは、自分が幼い頃から食べてきた、大好きな料理にとてもよく似ていた。

そうして、米粒の一欠けらもなく綺麗に平らげたイリヤは、不意に、言葉に出来ない何かが胸内からせり上がって、思わずこみ上げた感情を飲み込むように、彼女は静かにその瞳を閉じて――――

――――ふと

兄の言葉が、姿が、脳裏に蘇った。

自分とクロの料理対決。その結果を判定してくれる兄に、お世辞にも美味しいとは言えない自分の作ったパウンドケーキ。それを食べた彼の率直な感想に意気消沈した自

分へと、兄は、自分がもう覚えていなかった頃のコトを話してくれた。遠い昔、兄が初めて料理をした時の話。彼が作った肉じゃがの失敗作を幼い自分がひたすらに食べていた、なんていう些細な話。その時に兄が大切だと感じた物を、料理対決で自分の作ったパウンドケーキにも感じたのだという。

そして、自分は、その時に嬉しそうに兄が話した事を、今食べたばかりのお弁当にも確かに感じ取っていた。それは――――

「『料理は愛情』……そうだよね、お兄ちゃん」

呟き、その言葉をイリヤは噛み締めた。

そして一つの結論に至る。

自身の兄は、どこの世界でも兄なのだと。同一人物ではないのかもしれない。イリヤのコトを知らないのかもしれない。……それでも、不器用で朴念仁で――――誰よりも暖かくて優しい、自分が一番大好きな、そんな兄のままなのだと。

「――――よしっ！」

パチンッ、と、両の手で頬を叩いた。

じんじんと痺れる痛みに気合を入れた彼女は、考えを纏めるように取るべき行動を口にしていく。

「まずはお兄ちゃんに謝ろう。そして『ありがとう』って言わなきゃ。……でも、平行世界の事なんかは話しちゃってもいいのかな。って、そうだ、お兄ちゃんにも昨日の事を聞かなきゃいけないよね。……というか、ここって一体何処なんだろう？」

言って室内を見渡したイリヤは、この部屋の唯一の調度品の上に置かれたある物を見つける。

「洋服……あれ、こっちにも書き置きがある。なになに、『好きなのを着てくれて大丈夫』……え、これってわたしが着ていいの!?　お兄ちゃんの（物と思われる）服を……!!?」

言って戦慄したイリヤは、口では戸惑いの言葉を発しつつも卓上に置かれた衣服を次々に物色しだす。他人の部屋の中、一人顔を真っ赤にして匂いを嗅いでもいいかどうかなんて躊躇う彼女のその姿は、どう考えても不審者のそれである。

ただ、そんな少女の小さい背中は、もう決して、震えてなどいなかった。

そうして、自身の心の内で一悶着あったイリヤは、結局シンプルな白黒のジャージに着替えた後、今になって漸く呼吸を整えたところだった。

「……ふぁ」

ふと零れそうになる欠伸を噛み殺す。

思えばイリヤは自身の置かれた状況に一杯一杯で、昨夜から一睡もしていなかった。けれど、今は抱いていたその不安も振り切り、残るは極限まで蓄えられた疲労のみ。お腹も膨れて着替えも済ましたことだし、となれば収まっていた眠気が襲ってくるのも当然と言うものだろう。彼女はそう考える。

「……少しだけ、寝ようかな」

兄の部屋にある置き時計は三時を指していた。こんな時間から眠る事には違和感があったが、それでも睡眠欲には逆らえない。自身に充てがわれた隣室に戻り、壁際にくしゃくしゃにしていた毛布に今度はちゃんと布団の上で包まって横になると、そう時間

を置かずして目蓋が自然と閉じられていく。

「……お兄、ちゃん……ありがとう」

そして、大好き。

もう口を開くのも億劫になりつつも、イリヤは心の中でそう付け足した。

今度は怖い夢なんかきっと見ない。そんな温かい確信とともに、意識は緩やかな微睡みに落ちていった。

ＡＣＴ４「夜、再び」

「――――う、ん」

唐突な声を零して、イリヤはふと目を覚ました。泥のように深く沈みこんでいた意識が、急速に鮮明になっていく。麻痺したように活動を鈍らせていた体が、意識の覚醒に引かれて、ゆるゆると目覚め始めた。

「……そっか、ちょっと眠ることにしたんだっけ」

深い眠りに痺れてしまった腕を解しながら、イリヤはそう呟いた。

軽く頭を振ると、乱れた髪が頬に掛かった。ぐちゃぐちゃになってしまったその毛先を手櫛で整えつつ、昨日から風呂に入っていない事を今更ながらに思い出して、思わず顔を小さく顰めてしまう。

「……もう、暗いや。いま何時なんだろう」

部屋に一つある窓の障子越しに、夜の月明かりが差し込んでいた。

畳に浮き上がる青白い光。蒼の色彩に染まった和室。そんな部屋の中をぼんやりと眺めながら、お兄ちゃんもう帰ってるかな、なんて考えがふと浮かび上がって、イリヤは欠伸をかみ殺しつつ、身を横たえていた布団からゆっくり立ち上がることにした。

音もなく襖を開けて隙間から覗き見る。

しかし、そこに兄は居なかった。

眠る前に空にした弁当箱と、残念ながら着ることのなかった数着の着替えが、自分が昼に動かしたそのままに机の上に置かれている。きっと、まだ兄はこの部屋に一度も戻ってきていないのだろう。

ちらりと見えた時計の針は十一時を指していた。

指折数えて八時間も眠ってしまった自分に愕然としてしまうが、それよりも今は兄の事だと気を取り直す。時間も時間だし、違う部屋に居るのかもしれない。昨日の事はあまり覚えていないのが本音だったが、相当無茶苦茶な態度を取った気がするし、それで

気を遣われてしまった可能性もある……。

昨夜からの自身の行動を少し悔やみつつ、イリヤは見当たらない兄の姿を探しに行くことに決めた。

廊下と部屋を区切る障子を開け、室外に出る。

そこは静まり返っていた。少し先の、硝子張りの廊下に月光が落ちているのが目に入る。誰もいない静寂。外から差し込む月光と、穏やかな蒼い闇に染まった木張りの床。零れた吐息の残滓は白く、冷たい夜にゆっくりと溶けていった。

「こっちも……暗い」

呟くことで意識的にその静寂を破り、イリヤは暗闇の中を恐る恐る壁伝いに歩いた。

きし、きし、きし……。

床板を軋ませながら一歩一歩廊下を渡り、しばらく行った角際の壁で押した物がスイッチだったのか、オレンジ色の明かりが視界に灯る。

ほう、と、感嘆の吐息が再び零れた。

視線の先に伸びた、よく磨かれた長い廊下。背の高い天井に吊るしてある、純和風の照明によって帯びた淡い橙の色味が、冷たい夜を暖めるように邸内を彩っている。側面の雨戸から見えるのはちょっと吃驚してしまうくらい広々とした庭で、そこにある蔵や外堀、道場らしき物から察するに、所謂典型的な武家屋敷と言う奴ではないだろうか。

「どうしよう、ちょっと探検したくなっちゃった。……ま、まぁ、お兄ちゃんも探さなくちゃいけないもんねっ！」

誰に言うでなく一人言い訳を零して、イリヤは少し息を弾ませた。

物音のしない邸内を、静かに歩く。

夜の空気は冷やかで服越しに肌を噛んだ。

窓ガラスを閉め切っている家内は、しかし、どこからか風が吹き通っていて、肌を叩くそれに少し身を縮こまらせながらも、廊下をひた進む。

兄を呼びつつ回廊沿いの部屋を覗いていったが、目当ての姿は何処にも見当たらなかった。そのまま少し戻って渡り廊下を進み、別棟の離れらしき所まで歩いて行ったけれど、そこにも人の気配は一つとして感じられない。どうやらこの家に居るのは自分だけらしく、肝心の兄はこんなに遅い時間にも関わらず、まだ外から帰ってきていないようだった。

――――――そういえば

その場で立ち止まって、イリヤはふと思った。

はっきりと正確な時間までは分からないけれど、兄は昨日も夜に外出していて、だからこそ自分は彼に助けてもらえたのだった。

自分の世界の兄は弓道部に入っているが、もしかして、こちらの兄も部活動か何かをしていて、帰りが遅くなっているのかもしれない。

自分だって最近は夜に出歩くことが多かったし、さすがに魔法ステッキとまでは言わ

ずとも、兄にも何か用事があったとしてもおかしくはないだろう――――イリヤはそんなことを考えた。

だとしたら、別に急いで兄の姿を探して回る必要はない。

そう結論を下しかけて――――それはそれとして、家の中は見ておこうと、そう思い直した。

だって、まだ兄が別の部屋で寝ているという可能性もあったし、正直なところ、知らない家という物はそれだけで魅力的に思えたのだ。幼い頃の冒険心が燻られたこともある。取り立てて他にする事がないというのも理由にできるだろう。だからこれは、人間として仕方ないことなのだ、うん。

そんなことをつらつらと考えたイリヤは、足取り軽やかにまた歩き出すのだった。

そうして、ひとしきり邸内を探索した後。

結局、家の中を一周しても兄の姿を何処にも見つけられず、所在無くなってしまったイリヤは、その合間に見つけた居間らしき場所に戻り、そこで暫く時間を潰すことにした。

とりあえず室内の照明を点け、部屋の隅に重ねられていた座布団を一枚引っ張り出し、それにちょこんと座る。そうして、部屋の真ん中に置かれた日本風の低い食卓に腕をついて、何とはなしに頬杖をつく。

しんとした静寂が場に降りた。

自分以外は誰も居ない空間。家の中でこの部屋の明かりだけが灯っている中。かち、かち、と、時計が時間を刻む音だけがやけに明瞭に聞こえるその中で、イリヤはただぼんやりと、机越しに向こう側を眺めていた。

腰模様に薄い桜の柄が入った、白い襖。

「……立派な家」

言ってから、つくづくそう思った。

探検して分かったが、本当に大きくて立派な家だ。自分の家が普通の一軒家で、純和風の日本家屋に憧れがあったこともあるけど、そうじゃなくてもしみじみと感心してしまう位の武家屋敷だと、そう思う。

目に優しい木造の色味。吹き通る風。純和風の家屋でありながら、行き届いた現代風の設備。雰囲気のある和室や回廊に、おまけに見た目にも風流な縁側なんかも兼ね備えてある。部屋の数も膨大で、ちょっとした旅館と言われても信じてしまいそうになる、そんな風格がこの家にはあった。

そして何よりも、とイリヤは付け加えた。

それは、この広くて大きな家が、本当によく手入れされていること。

埃一つ落ちていない廊下に、染み一つないまっさらな襖や障子、壁。どこを見ても、この家の住人が大切にしていることが伝わってくる、清潔で暖かなその空気。清廉な風が吹き通るこの家の雰囲気は、ここで丸一日も過ごしていない自分をも受け入れるような、そんな自由さを感じさせた。

家もまた家主に似ると言うが、それは本当だとも思う。自分の世界の兄も真面目で几帳面で、何事も細やかな部分まで気を遣う人だった。家にはセラという立派なメイドが

居るのに、それでも家事全般を極めんとしている兄の姿は、生来の性分なんだろうなぁ、と、日頃からその様子を見て思ったもので、そしてこの手入れを行き届いた家はそんな彼を彷彿とさせるのだから、やっぱりどこの世界でも兄は兄だと、思わず頬が緩んでしまう。

イリヤはふと部屋の中を見渡した。

この居間。いま思い立って数えてみれば、ここも十六畳もの広さがあった。それでもって、この広々とした部屋が当たり前のように隅々まできちんと綺麗にされているのだから、たいしたものだ。

……本当に、自分の兄のことながら、つくづくと感心してしまう。よくも、ともすれば大きすぎるぐらいのこの家を――――。

そこまで考えて、イリヤはもう一度部屋の中を見渡した。しんとした静寂に沈む、誰もいない居間。

「……お兄ちゃん、一人でここに暮らしてるのかな」

知らず、ぽつりと呟いていた。
同時に脳裏に蘇った、昨日の光景。
昨夜、自分が取り乱して兄に詰め寄った時。あの時の自分は現実を信じたくなくて、兄に対して懇願するように色々な事を尋ねて、結果、その問いかけに対する兄の返答は全てが全て衝撃的な物だったのを覚えている。

そしてその中でも、
あの時の問答を思い起こしてみて今一番気になってしまっているのは、兄が――――
『自分には家族が居ない』――――と、そう言っていたこと。

はっきりとそう聞いた訳ではない。
自分が彼に訊いたのは、向こうの世界の自分の家族の、こちらでの存在の有無だけだった。もしかしたら、こっちの兄には自分やクロみたいな姉妹の様な存在はいないかもしれないけど、ひょっとすると、自分の全く知らない兄や弟なんかが居るのかもしれない。
そんな事を考えると少し複雑な感情が胸に湧いたが――――そうであって欲しいと、

イリヤは心から思い願った。

だって、昨日のことを思い出すと、胸が痛くなる。

兄は言っていた。彼にはもう母親はいないと。そして、その後に尋ねてからはっきりと知った。きっと、向こうと同様にこちらの世界でも兄の父親であった、自分の父でもある衛宮切嗣に至っては――――。

そこでイリヤは、胸に迫り上がった感情を、間一髪、歯を噛んで飲み込んだ。

そうして気持ちを落ち着かせられるように、顔を俯けて、深く深く息を吐いた。

もう、自分の事は良かった。

勿論、それはイリヤにしてもとても悲しい事。俄かには信じられない事だし、その事実を前に、未だにどう反応していいのかすら分かっていない。

……だけど、それ以上に、一人残されたであろう兄の事を思うと、胸が引き裂かれそうになるくらいに、自分の事のように心がズキズキと痛んだのだ。

「……ダメ、だよね」

自分に言い聞かせる。

悲しんでいいのは自分ではない。

自分はこちらの兄の事を何も知らないし、もし本当に彼が一人で居るのだとしても、向こうの世界で沢山の家族に囲まれた自分が、想像で彼の事を思って憂う事などあってはならないのだと。

だから▪、顔を下に向けたまま、ただ膝の上でぎゅっと拳を握った。

きつくきつく、自分の身勝手な感情を無理やりにでも呑み込めるように。

そして

「――――うん？」

ふと、そんな彼女の目が、食卓の下で転がる何かを発見した。

「……」

うんしょと腕を伸ばしてそれを手に取ってみる。

どうやら、何かしらのポスターのようだ。

「……」

人の物を勝手に覗き見ていいのかどうか、心の中で興味と罪悪感が瞬時に対峙しあって迷って――――結局、それがどんな物かどうしても気になってしまったイリヤは、くるくるっとその用紙を卓上に広げて、そこに描かれた一枚絵の内容を確認する事にした。

「……」

さて

そこに描かれていたのは、
深い色味の付いた青空を背景に
男クサい笑顔で親指を突き出す軍服姿の青年達。
そして、深紅の
おどろおどろしい文字で書かれた見出しは、
ズバリ――――

「『恋のラブリーレジャーランド。いいから来てくれ自衛会』……？」

全く予想もしていなかった内容のそれに、イリヤは、がぼーんと音を立てて目を見開いた。

……。

……。

……。

「……え、えっ!?　そんな感じ!?　こっちのお兄ちゃんってそんな感じなの!!!??」

イリヤは目を皿のように見開いて叫び、つくづくともう一度そのポスターを眺めるが、それは決して彼女の見間違いなどではなかった。

そこに描かれていたのは、服越しでもよく鍛えられていると分かる身体の青年が三人、精悍な（男クサい）顔をして立つ一枚絵。フォントと内容がひどくアンバランスなその見出しは、彼らの表情や身体つきと合わさって、変な新興宗教の勧誘文句のように胡散臭い。

「え、えぇ……た、確かにお兄ちゃんは優しくて我慢強いし、向いてるのかもしれないけど」

思えば、向こうの兄も日頃から体を鍛えていた。イリヤはそれを弓道部に入っているからだと思っていたし、時折逞しい身体を見て赤面してしまうぐらいで特別気にしていなかったが――――もしかすると、向こうでもこういう道を目指していたからなのかもしれない。

イリヤはそんな考えに至ってしまって、兄の将来について心配になってしまう。
これは妹として応援するべきなのか、それとも妹だからこそ兄の事を考えて相談に乗るべきなのか、むむむ、と小さく眉根を寄せてしばらく悩んで。

「――――ふふっ」
結局、込み上げた笑いを抑える事ができなかった。
だって、そのヘンテコな絵柄のポスターに、なんだかイリヤは、とても安心してしまったのだ。

それには理由があった。
それは、一見文句の付けようの無いくらい立派な、この武家屋敷のこと。
広くて大きくて、けれど隅々までよく人の手の入ったこの家は――――どこか、奇妙にがらんとしている様な、そんな印象をイリヤは感じ取っていたのだ。

例を挙げれば、最たるは兄の部屋だろうか。
毎日兄が就寝して一番使っているだろうあの部屋には、しかし、置かれている物といえば布団とテーブル、座布団と置き時計ぐらいで、なんというか、無駄な物が一つとし

て置かれていなかった。普通、人が生活していればどんどん物が蓄積されて行くのが普通というもので、実際、イリヤも自分の部屋には漫画やアニメのＤＶＤ、アクセサリーやぬいぐるみなんかが自然と溜まって、少しでも乱雑にするとすぐにセラに怒られてしまうのが日常だったし、それは普通の事だとイリヤは思っていた。

――――そして、だからこそこの家には、兄の部屋にも言えるように、とても大切に使われていることが見て取れるのに、そんな当たり前の物の感覚がどこか欠け落ちているような、何とも奇妙な違和感を抱くイリヤだったのだ。

「……まぁ、こんなポスターが置いてあるんだから、気のせいだったんだろうけど」

言って、卓上に広げたそれを頬杖ついてもう一度眺めた。

相も変わらず、どこから見てもヘンテコな絵柄だ。こんな変な趣味のポスターを家に置いているこちらの兄は、もしかして向こうの兄以上に感情豊かな人柄をしているのだろうか。ひょっとすると、一人暮らしにかこつけて、案外自由気ままに暮らしているのかもしれない。

イリヤはそんなことを考えて、お兄ちゃんに聞いてみたいことが増えたな、なんて自

然と柔らかく笑って、そのまま兄の帰りを待つことにした。

■

それから、どれくらいの時間が経ったのだろう。
夜はその特有の静けさを保ったまま、いっそう深まっていった。日付はとうに変わっているにも関わらず、未だこの屋敷の家主は帰宅せず、銀髪の少女だけが一人その部屋に座って彼を待っている。
ひやりとした空気に沈む、肌寒い居間。
そんな冷たい空気の中で長時間人を待ち、そろそろ痺れを切らしてしまっても可笑しくはない、そんな状況の中に居る件の少女はと言うと、

「ど、どどど、どうしようっ、もうお兄ちゃん帰ってきちゃうかな!?」
焦っていた。
狼狽していた。
慌てふためいていた。
むしろ、待ち人がまだ帰らない事を祈っているのが、今のイリヤの心境だったのだ。

あれから暫くは、イリヤは楽しげにしていた。
なんせ大好きな兄を待っていたのだ。
考えてみれば、平行世界の兄なんてレアキャラ中のレアキャラだ。会おうとして会えるものではないし、逆にこの機会を生かして根掘り葉掘り聞きたい事を聞けるし良い事ずくめだと、むしろ待ち遠しく思っているぐらいだったのが、少し前のイリヤだった。
だが、時間が経つに連れ、夜の空気は彼女の思考をマイナスの方へと誘って行く。
思えば、イリヤはまだ一度も兄とまともな会話を成り立たせていない。

その事に彼女は唐突に気がついた。

そうして、そこから悪い方へと考えが一直線。

何故自分はあんな事をしたのか、兄は自分の事をどう思ったのか、この後兄に何を説明し、何を語るべきではないのか。そんな考えが頭の中をぐるぐると駆け巡り、後悔、緊張、不安。様々な感情が綯い交ぜになった胸に湧き上がった今の彼女は、ひどく不安定な精神状態に陥ってしまっていたのだ。

「……うぅ、お兄ちゃん怒ってないかな……？　でも仕方ないよね……わたしは知ってても、お兄ちゃんはわたしを知ってるわけじゃないのに……。

そ、そういえば、お兄ちゃんのことなんて呼べばいいんだろ――――って、もうわたし『お兄ちゃん』って呼んじゃってたっ!?　初対面の子からのお兄ちゃん呼びなんてありえない！　怖いよ!!　無茶苦茶だよ!!!　そんな子いる訳ないよ!?」

『どこのメンヘラって感じだよ?!』と続けて吐き出したイリヤは、それを最後に頭を抱えてその場で呻いてしまった。

口に出していっそう羞恥心を煽られたのだろう。

顔を真っ赤にしながらも眉間に皺を寄せた銀髪の少女は、誰の目も周りにないのをいい事に、うんうん唸りながらブツブツと独りごちていた。

――――と、そんな時だった

ガタン、と、遠くで、何かが▪軋めく音がした。

「……何？　これって、玄関の方から……？」

突然のそれに思わず顔を上げてしまって、気のせいでないかと耳を澄ますイリヤだったが、確かに、がたがたと乱雑に響く、引戸を無理やりに開こうとしている音が、先ほど見てきたばかりの玄関から聞こえてきている。

「……お兄ちゃんかな」

まず思いついた人物のことを口にしてみる。

けれど、首を振って甘い考えは切って捨てた。

もしも兄だとするのなら、自分の家に入る時にあんな風に手間取ることはないだろう。そうイリヤは推察する。そして考える。むしろ、これはどちらかと言えば、まるで空き家を狙ってこじ開けようとする、典型的な――――。

そんな事をつらつらと考えていた彼女の耳に、続けて、がちゃり、と、扉の鍵が開くような音が聞こえた。

「――――え」

思わず声を出して呆気に取られてしまう。

だが、ぎしぎし、と鈍く鳴る、足取り遅げに床を踏む音。そんな不気味な音を連れて、誰かがじりじりと闇を這う様にこちらに近づいてくる感覚を、イリヤは全身を通して感じ取ってしまった。

「――――嫌、怖い……っ」

一瞬間を挟んで、えも言えない恐怖が頭に染み込んでくる。無意識に周囲を見渡した

けれど、身を守るに役立つ物は碌に見当たらない。
――――それでも、最近の体験が身を結んでいるのか。
できるだけ距離を取るべきだという咄嗟の判断から、急ぎ机の反対側にまで回り込み、中腰になってすぐに動ける様な態勢を取った。

「……っ！」

気づけば足音が止み、正面の障子越しに人影が浮かんでいた。
いつからそこに居たのだろう。
身を半ば屈め気味にした黒い影は、ゆらゆらと、まるで幽鬼のように頼りなくそこに佇んでいる。

「……誰……？」

緊張に、掠れた声で問いかける。
影は応えない。
こちらの声は届いているのかいないのか。

イリヤはどちらとも判断がつかないままに、無言を持って揺らめき続ける影をじっと眺めていると、次の瞬間、がさり、と、障子の引き手まで伸びた黒い腕が、居間の仕切りを徐々に開けて――――

「……お兄、ちゃん……？」

隙間から覗いた見覚えのある赤銅色の髪に、彼女はふっと息を緩めて――――

「――――あっ」

――――　一方その人物は、頭から転げるようにしてその場に倒れ込んだ。

「……え？　お、お兄ちゃん!!???」

一瞬、呆然と思考が真っ白になったイリヤだったが、すぐに気を取り直して兄に駆け寄った。

彼は廊下と居間の境い目に倒れて動かない。はぁはぁと、途切れ途切れに荒い息を吐

いている。
彼女はその苦しげな兄の様子に焦りながらも、なんとかかんとか彼を居間に引っ張り込んで、その身体を仰向けに横たえる。
「――――っ!??」
そこで気づいた事実に、イリヤは絶句して息を飲んだ。
だがそれも一瞬。
依然として苦しげな兄の様子に、とにかく意識を確認しなくてはと声を大きく呼びかける。
「おにい――――っ、し、シロウさん!!」
「――――？　……ああ、えっと……イリヤスフィール、ちゃん……だっけ」
荒い呼吸に虚ろな瞳。幸い意識があった彼は、しかし、ひどく体力を消耗しているようだった。
「イリヤでいいから！　ってそんな事より、それ!!」
「……気分が良くなったみたいだな……よかった」

なのに、そんな状態の彼から漏れるのは自分を案じる言葉。ずっと自分のことを気に掛けてくれていたのだろう、掛け値なしの真摯な気遣い。
兄のその優しさは本当に嬉しく思うイリヤだったが、今はそんな事を気にしている場合ではなかった。

「そんなことより、その胸の怪我……!!」
彼の左胸が、赤く、血の色に染まって塗りつぶされていた。

「……ああ、これは」
「っ、横になったままでいいから！　無理しないでシロウさんっ」
「……あ、ああ」
イリヤは億劫そうに身を起こそうとする彼を押し止め、先ほど使っていた座布団を引っ張り出して二つ折りにする。そしてそれを枕代わりに彼の首元になるように差し込むと、半ば無理やりに彼をそこに横たえさせた。
「ええと、下着のシャツまで破れてる……っ、すごい血……!!」
「……」
「……？　シロウさん……？」

アタフタと看病する自分を、胡乱な瞳で見つめる兄に気づく。
「――――あ、いや……なんでもない」
その問いに彼は首を振って瞼を閉じる。呼吸を落ち着かせようと、ただ浅い息を繰り返しているようだった。

そんな彼の反応を怪訝に思うイリヤだったが、呼吸に合わせて上下する彼の胸元に、はっと我に気づいてまた食ってかかった。
「そんなことより、どうしてこんなに帰りが遅かったの!?　それにその胸の怪我は何!!?」
「……ああ……えっと、そうだな。一人家に残されても困る、よな……。わるい、今日はできるだけ早く帰ろうと思ってたんだけど……少し友人と揉めて……」
「そういうことじゃないよ!!　それに友達って、それどんな友達なの!!?　こんなことする友達なんて絶対おかしいよ!!!?」
▪朦朧とする彼の様子は、胸にこびり付いた血と合わさって尋常ではない。そんな兄が心から心配だった。だから曖昧な解答は許さないと、つんのめるように必死に問いかけていた。
「……あ、いや、これはそいつとは関係なくて、その後の――――」
しかし、そこまで訥々と説明していた兄が、突然、何かに気付いたようにハッとして

言葉を止めた。

「……シロウ、さん？」

「――――ヤバい」

心配げなイリヤを他所に、彼は一言そう漏らすと、次いで先までからは考えられない位に俊敏に身を起こし、何かに追われるかのように急いで彼女の方を向き、言った。

「――――ここは危ない。先に逃げてくれ」

「……え？　な、何が危ないの？！」

「いいからっ――――くそッ、何か武器になるようなのは……っ！」

よほど焦っているのか、彼女に対する発言の理由もおざなりに済ました士郎は、素早く室内に目を走らせ――――机の上に在る物を見つけ、動きを止めた。

「……はは、よりによってこれかよ……？」

苦い、乾いた笑みを彼が零す。

その視線の先にあったのは、先ほどイリヤが眺めていた――――あのポスターだっ

た。

そうして状況が飲み込めず目を瞬かせる彼女を置いて、暫し逡巡するようにそのポスターを見下ろしていた彼は、不意に、くっと顔を上げて▪瞳を鋭くすると、卓上に広げられたそれを拾い丸めて棒状にし、まるで剣を持つかの様に中段に構えて立った。

「し、シロウさん？　な、何を……？」

「――――同調（トレース・オン）、開始」

「……え？」

それは突然だった。

「――――構成材質、解明」

棒状にされたポスター沿いに、青白い光が▪舞う。

それは、最近慣れ親しんだ力の奔流。

「――――構成材質、補強」
イリヤは呆然とその光景を眺めた。
耳には信じられない言葉が入り込んで来る。
「――――全工程（トレース・オフ）、完了」
彼女にとって日常の象徴である筈の兄が、非日常の象徴である――――魔術を使っていた。

「……成功、した……？」
あまりにも理解不能な状況に呆然とするイリヤの横で、彼も同様に惚けた声を上げた。その様子は、自分が成した事を自分で信じられていないような、奇妙なチグハグさを感じさせた。
一方、そんな彼を見て少し落ち着いた彼女は、まだ半ば気を飛ばしながらも、兄に向かっての心からの疑問を呟いていた。
「……お兄ちゃん……それ」
「……あ、これは」
彼女の存在を失念していたのだろう。

士郎はその声に弾かれる様に振り返った。
視線の先には唖然と口を開く紅い瞳の少女。
『魔術は秘匿しなくてはならない』
彼の脳裏に、唐突に亡き養父の言葉が蘇った。
そうして、未だ自分の事を凝視する少女と手に持ったポスターを慌てて見比べながら、自分自身得意ではない言い訳を、彼がなんとか絞り出そうとした――――その時だった。

しゃらん、と、甲高い鐘の音が、家の中に響き渡った。

「――――っ！　あいつだ――――！」
言って、彼が飛び跳ねる様にくっと天井を見上げた。
「な、何が!?　さっきから何なの!!?」
「――――くっ、とにかく逃げるしかっ！　こっちに来てくれ!!」

イリヤの声に気づいた彼が、急にその腕を引っ張ろうとするが、てんで状況が読めない彼女は無意識にその場で抵抗してしまう。
「ねえ!!　だから、何から逃げるの!!?」
「それは――――ッッ、わるぃ――――っ！」
「え、えええええ!!?」
痺れを切らしたのか、彼はぐずぐずするイリヤを自身の胸に抱え込み、駆け出した。
「お、おにぃ、おにおにッ、おにににッッッ、お兄ちゃぁあん～～～～～～!!!?!??」
所謂お姫様抱っこ。
意図せずして憧れのシチュエーションを体験したイリヤは、もはや先程までの意味不明な状況全てを頭から抛りだして、ただ顔を真っ赤に兄の胸にしがみ付くしかなかった。
「……っ!!　目を瞑って口を塞いでくれっ!!」
しかし、今の彼に困惑する少女を気にする余裕などない。彼はただ必要事項だけを言って廊下を走っていた身をくるりと回転させると――――そのままの勢いで、背中から正面の窓に突っ込んだ。
「きゃぁあああああッ!!?!!?!?」

窓に嵌めてあった硝子が、悲鳴を上げるような音を立てて飛散する。
欠片が飛礫となって伏せた瞼にかち当たった。
その不快な感触と音に、反射的に大声を張り上げてしまったイリヤの身体を、風が、ごう、と、叩きつけるように吹き抜けていった。

「～～～～～～っ!!!!!」

ごっ、という音と共に地に着地する。
士郎が洩れそうになる声を噛み殺した。
こたえたのは少女一人を抱えて落ちた彼の方だったのだろう。加重した二人分の重力は相当なもので、身体の芯にまで奔った痛みを必死で堪えているようだった。

一方、着地した後に地面に投げ出されたイリヤ。
彼が引き受けてくれた分痛みは大したものではなかったが、先程からまったく状況が掴めていなかった。兄の怪我も慌てた様子も、自分が急に抱きかかえられたことも。

「～～～～！　もう、何なの～～～～っ!!?」

だからもうとりあえず、イリヤはこの意味不明な状況からくる鬱憤を叫んで捨てた後、赤らんだ顔とどくどくと早鐘を鳴らす心臓を何とか押さえつけようと、深く深く息

を吸い、深夜特有の澄み切った、だからこそ凍るように冷たい夜気を肺に浸して――――

「今度は女子供もかよ……ったく嫌になるぜ」

――――不意に

ぞっと背筋を凍らせる声が、朗々と闇に響き渡った。

「――――え？」

その声に弾かれるように身を起こし振り返ったイリヤは――――そこに在るはずのない、自身と兄以外の、第三者の存在を視認していた。

夜に溶け込む深い群青。
つり上がった口元は粗暴で、獣臭じみたものが風に乗って伝わってくる。
青い戦装に限界まで鍛えられた身を包む、獣の如きその男。
……現実味のない光景だ。
その男を視界に入れたイリヤは、彼の手が持つものに思わず目を疑った。
だってそれは見覚えがあった。
かつて友達が使っていたのを覚えている。
今はある魔術師が有している筈と理性が言った。
目前の男によって、ぶん、と、虚空に無造作に振り回された、不吉な光沢を放つ――
――どこまでも紅い、深紅の槍。

「ランサー……の、カード……？」

――――呆然と零れたその言葉に

男が、その瞳を獰猛に眇め、笑った。

ACT5 「遠い背中」

真円の月が、漆黒の闇を煌々と照らし出していた。
無音の庭に突如現れた青の槍兵。
白い月光がその男に落ち、黒々とした地より彼の青の色彩を、怖いぐらい鮮やかに浮き立たせていた。
張り詰めた場の空気にイリヤは押しつぶされそうになりながら、身じろぎ一つ出来ず、その男をただひたすらに眺める。
「……っは」
変な声が洩れた。
緊張に掠れ、イリヤは正常に言葉を発せない。
隣立つ士郎も息を飲み、手に握り締めたポスターを高々と前へ構える。
一方、そんなイリヤ達の様子にいっそう愉快気な表情を作った青の騎士は、口端を吊り上げたそのままに口を開いた。
「よお坊主、さっき振りだな。まったく、よくやってくれたもんだ。まさか一日に同じ人

間を殺すハメになるとは、いつになろうと人の世は血生臭いという事か。
――――で、おまえ、心臓を穿たれて生きてるとはいったいどういうこった？」
「……」
士郎は答えない。ただ、彼の右手に握り締められたポスターが、ぎり、と、見た目にはそぐわない硬い音を立てた。
「……だんまりか。まあ、いいだろう。おまえは後回しだ」
そう言って男は士郎から視線を逸らす。言葉の通り、もう一切の注意が彼には向けられていない。
「――――さて、そこのお嬢ちゃん」
そんな男の目が、イリヤに対して向けられた。
「――――」
その何気ない問いかけに、イリヤはぞわりと身体を竦ませた。
自分に視線を送ってくる獣の如き槍の騎士。彼の纏う青と対照に映える、その赤い瞳。
……獣の視線は涼やかだ。
青身の男は、この異様な状況において、こちらを十年来の友人みたいに見つめている

そうして汗ばむ手を胸の前で握り締めるイリヤに、男が何の感慨もなく淡々と言葉を続けた。
「そう、おまえだ。……ああいや、別にそんなに堅くならなくていい。オレは一つだけ、お嬢ちゃんに確かめてえ事があるだけさ」
「確かめ、たいこと……？」
「ああ、そうだ」
鸚鵡返しの彼女の疑問に、男は鷹揚として頷いた。しかしそう言われても皆目見当もつかないイリヤは、ただ無言をもって次の言葉を待つしかない。
すると、そんな彼女を射抜くように、見透かすように赤い瞳を眇めた男が、言い逃れは許さないとばかりに強い口調で言葉を紡いだ。
「お嬢ちゃんはオレを見て――――ランサーと、そう言ったな」
「……っ！」
反応してから、失敗したと悟った。

いや、相変わらず詳しい状況は判らない。しかし彼女が動揺したほんの僅かなその間。その一瞬。目の前の男が、隠しきれない程の獰猛な殺気を辺りに撒き散らしたのだ。

静かな瞳に一寸宿った凄絶な鋭気。それをすぐに収め元の飄然とした空気を纏い直した青の男が、次に観察するように、見定めるように、細めた瞳のままでまじまじとイリヤを見つめてくる。

「やはり、お嬢ちゃんが本命か。随分怯えた様子でいやがるから少し心配したんだが……。

――――なるほど、大層な魔力を身に秘めている。はっ、いいねぇ、素質は十分ってトコか」

そう言って軽く笑う青い男の姿に、背筋が凍る。

なんということのない、飄々とした男の声。

そんなものが、今まで聞いたどんな言葉より冷たく、吐き気がするほど恐ろしいなんて――――

「……しかし、分からねえな」

不意の恐怖に縛られたイリヤを置いて、一転、青の男がどこか腑に落ちていないような、怪訝そうな表情で独り言を洩らした。

「お嬢ちゃんの魔力は文句なしに一級ときているが、その割にゃあ、肝心のサーヴァントの気配が一切感じられねえ。たとえ同じサーヴァント相手に己が身を隠しきった所で、ここまで自らのマスターに距離を詰められては意味がないだろうに」

「……サー、ヴァント……？　マスター……？」

男が呟いた言葉に思わずイリヤは口を挟む。それを受けた男もまた、訝しげに眉根を寄せた。

「なんだ？　聖杯戦争関係者なら当たり前のこったろうが」

――――その言葉に、

イリヤは弾けるように、反射的に男に対して疑問をぶつけていた。

「また『聖杯戦争』!?」

「あ？」

「昨日からそればっかり！　あなた達は、なんでわたしやお兄ちゃんを付け狙うのっ!?」

「……」
「それに、なんであなたがそのカードを持ってるの!?　皆は、皆は無事なんだよね……!?」
「……だからおまえ、さっきからいったい何をスッとぼけてやが――――……いや」
途中で言葉を切り、不意に何かに気づいたように男は瞳を細めた。
「――――違うな」
言って、男はイリヤの様子を上から下まで無遠慮に眺めた。そうして口元に手をやり、思考を纏めるように考えを口にしていく。
「誤魔化そうとしているのかとも思ったが、どうやら本当に何も知らないみてえだな。言っているコトはとんと見当がつかねえが、確かにその動揺は本物だろう。
……あー、おいおい嘘だろ、くそったれ」

必死な形相のイリヤから目を切り、ガシガシと頭を掻く青い男。先の飄々とした様子でも物騒な様子でもなく、ただただ気が抜けたように下を向き、溜息なんかを吐いてぶつぶつと独りぼやいている。
奇妙に場の空気が和らいだ。
何せ、場を殺伐とさせていた本人が酷く格好を崩しているのだ。それも無理もない。

そうして急な展開にイリヤも思わず呆気に取られてしまうが、それはそれとして、自分の質問が流されていることにもハッと気がついた。
だから彼女がもう一度男に向かい、意識的に強い調子で問い重ねようとした。

「――――ちったぁ期待したんだがな」

――――途端、場の空気が死んだ。

「……ぁ」
その声は自分と兄、どちらの物だったのか。
とにもかくも、男の顔が上げられたのだ。
視線が交わる。赤い瞳。その恐ろしい色。
だが彼の瞳には何の感情も込められてはいない。つまらなそうに、まるで不毛な罰ゲームをさせられる時のように、ただ作業的に事を為そうとしているような、そんな平静で無感情な赤い瞳だった。

だけど、それなのに

そう、それなのに――――どうしようもないほどの絶望的な死への確信が、一瞬にしてイリヤの全身を貫き奔り抜けて行ったのだ。

イリヤは唾を飲んだ。

同時に先程までの疑問も何もかもを飲み込んで、死の予感に捉われたままにただ思考を巡らせた。

ダメだ。この相手には無理だ。自分たちはすぐに死ぬ。たぶん瞬きをした、その瞬間に。

ダメだ。無理だ。無駄だ。不可能だ。とにかく何をしても勝てない――――

――――少なくとも、今は。

辺りを見渡す。

斜め前に兄の姿。表情は見えない。ただ立ち尽くしている。

――――状況判断は一瞬だった。

今のイリヤは絶望に囚われている訳でも、自暴自棄になっている訳でもない。唇を噛み締め、感じる痛みに思考を加速させる。

恐らく敵の力は強大。何故かランサーのカードを有している。こちらにはルビーもない。理由は判らないが、兄の胸はあいつにやられたものだろう。だから――――

「シロウさん、逃げよう――――！」

イリヤはそう声を上げ、士郎の左腕を後ろから引っ掴んだ。

そのまま瞬時に後方を確認する。少し先に、外堀の出口と思しき門が見えた。あそこまで行けばきっと外に出られるだろう。彼女は素早くそう判断を下す。

腕を掴んだ兄は動揺からか、まだその場より動こうとしていなかった。

奇しくも、先ほどとは逆の立ち位置だ。頭を必死に働かせながらも、そんな感想をイリヤは抱いた。

――――そしてそうなら、兄が動けないのならば、自分がなんとかするしかない。自分はこれでも手強いカードの英霊達を相手取ってきたのだ。だからいつもとは逆に、今度は自分が兄を助けなくてはならない。絶対に、兄と一緒に生き延びるのだと。

そうやってイリヤは、非常な決意を胸に宿し、動かない士郎の腕をよりいっそう強く引っ張って――――

――――不意に

ざっ、と、誰かが地を踏む音が辺りに響いた。

その音に、イリヤは驚愕を飲んで振り返る。

「お兄、ちゃん……？」

……呼び方なんて気にしていられなかった。

だがその人物は、イリヤの不注意な発言を一顧だにせず、ただ前だけを見据えて佇んでいる。

――――そう

そこには、足を止め手に持つポスターを構えて男に対峙する、彼女の兄の姿があった。

士郎は動かない。イリヤからは前を向く彼の表情は見えない。
しかし彼のその背中は固く、そこから一歩も動く気はないのだと、そう強く言葉なしに物語っているようだった。
そうして彼女は暫し呆然とその背を眺めて、やがてハッとして我に返り、酷く冷静さを欠いた、けたたましい程の声を張り上げて叫んだ。

「お、お兄ちゃん！　何をしてるのっ!?」
「……」
「は、はやく逃げなくっちゃッ!!　なんで、このままじゃ殺されちゃうよ!?」
「……」
口を開かない士郎に、強い焦燥を得てイリヤは叫ぶ。
「ねえ、どうして、お兄ちゃん……っ！」
「……ああ、わかってる」
彼が短く答えた。その声の抑揚のなさが、彼女を苛立たせた。
「だったら――――!!!!」
早く逃げようよ、と、懇願するようなその叫びは、イリヤの喉元より出ることはなかった。

「だから君は――――イリヤは、逃げてくれ」
それよりも早く、兄が自分の名をそう呼んで、そんなコトを口にしたのだ。

「……え？」
イリヤは思わず疑問の声を上げていた。彼女が必死に予想立てた次の展開の中でも、全く想定外の言葉を耳にしたからだ。頭が真っ白になるとはこういうのを言うのだろう、なんて事を、今の彼女は場違いにも考えてしまう。
そうして唖然と立ち尽くすそんなイリヤを置いて、彼女に腕を掴まれたままの士郎が、目の前の相手をすっと見据え、言った。
「……どうせ、お前も逃すつもりはないんだろう」

士郎の視線の先では、いつの間にか槍を担ぐようにしてその場に屈みこんでいた青い男が、興味深そうにイリヤたちの遣り取りを観察していた。
士郎の言葉に男がすくっと立ち上がり、やけに気安げに返答する。
「まあな、目撃者は全員殺せときている。どっちにしろオレはおまえ等を逃すつもりは

ねえし、おまえ等二人は此処で死ぬ。これはもう決まっている」
「……」
「ったく、つくづく気に喰わねえ雇い主だぜ」
男は言いつつ、それを違える気はないのだろう。士郎もそれが分かっているのか、無言で彼から目を逸らさない。
するとそんな士郎の様子に少し感心するように、どこか興味をそそられたように男が言葉を続けた。
「それにしても、随分潔いじゃねぇか、坊主」
「……さっきで懲りたさ」
「――――は、違いねえ」

短く、小気味良い問答。内容とは逆に会話の調子は軽やかだ。
イリヤはそんな士郎を見る。向こうの世界の兄とも変わりないその姿、声。だけどそんな兄が、全然自分の知らない人のように、この異様な状況の中で悠然と佇んでいる。
……意味が判らなかった。
そしてそんな士郎の姿をつくづくと眺めた青い男が、またもやイリヤからすれば埒外の感懐を、目の前の彼に向かって紡ぎ出した。

「……いや、少しオレの目が曇ってたのかもしれねぇ。坊主、その手の物から察するにおまえさん魔術の力量はからきしだが、それを踏まえても良い目をしてるぜ。

向かう先が死地と知って恐怖し、それでも立ち向かう――――英雄の性を匂わす目だ」

「……」

士郎は応えなかった。しかし、男の言葉にイリヤは気づいてしまった。――――彼女の掴む腕から伝わる、抑えきれない兄の震えを。

その士郎の震えに心底楽しげに、腹の底から愉快そうに、男が笑う。

「あぁ、まったく悪かねぇ。オレの時代にはそいつを持ったガキが多くいたが、どいつもこいつも、いずれは良い男になったもんだ。

……おまえが肚の裡に何を抱えているのか。おまえがいま何を▪思い、この場に立っているのか。オレはそんなコトは知らねえし、欠片の興味もねえ。――――だがな、坊主。断言してやる。英雄たるオレが保証してやる。おまえはきっと、良い戦士になった」

「……」

「……ま、だからこそ芽が出る前に摘み取るのは勿体ねえし、オレの趣味でもねえワケだ

が」

そう言って、男は不意に虚空を睨めつけた。
不機嫌そうなその表情を隠そうともしない。
やがて、唐突に舌打ちを零し、男は瞳を閉じる。
次いで訪れた短い無音の間。
あまりにも満ち満ちたその静寂に、イリヤは無という音が響いているような、そんな錯覚にさえ陥ってしまう。
……そうして、男が緩慢に瞼を開いた。
彼の瞳が暗闇の中でも鮮やかに、赤々と覗く。
魔性の、どこか神々しいとさえ言える赤眼に魅入られるイリヤを余所に、男が短く、彼に言った。

「――――いいだろう。その目に免じ、テメェから殺してやる」

剥き出しの殺意が、目の前の少年ただ一人に向けられた――――

「……あ」

声にならない声が零れた。

ただ、それは視線を向けられた士郎の物ではない。無言で相対する彼の横に立つ、イリヤの物。

彼女に男の注意は向けられていない。

それでも、その視線に篭られた膨大な殺意は、向けられた彼の周囲すらも巻き込んで場を吹き抜けていく。そしてその後に吹き溜まる、圧倒的な死の気配。死の予感。

震える、身体が。どうしようもなく、わななく。兄の腕を掴んだ指先は凍るように冷たく、膝は身体を支えきれなくなって、その場に崩れそうになる。

――――――それでも

今、恐怖に駆られて場に流されれば、取り返しのつかない事になる。

そう本能的に察したイリヤは、唇を噛み締めて震えを無理矢理に抑えると、訥々と、呼吸を詰まらせながらも彼に縋り付くように言葉を紡いでいた。

「……そんなのダメ」
ゆさゆさと、彼の腕を揺り動かす。
「お兄ちゃん……いや、嫌だよ……！」
「……」
「ねぇ――――ねぇったら!!　おにぃちゃんっ!!」
涙すら滲むイリヤの呼び声にも、士郎は応えない。
しかしそんな少女を見かねた槍兵が、彼に代わって口を挟んだ。
「……あのなぁ、お嬢ちゃん。全くもってオレが言えた義理じゃねえんだが、ソイツの意気を汲んでやってくれや。
確かにどっちにしろオレはおまえ達を両方とも殺す。だが、おまえ達がどちらか一方でも、僅かでも生き延びる可能性を追い求めるとするなら、定石通り一人がオレを足止めするしかないだろう？」
「――――っ!!　あなたになんか――――」

言われたくない、と、その言葉は飲み込んだ。
そのまま顔を俯かせ、ぎゅっ、と、ただ士郎の腕を強く握る。

そんな事は、言われずとも分かっていた。

これでも手強い黒化英霊達と戦ってきたイリヤだ。敵の正確な力量は分からなくても、状況の判断くらいはできる。だから目の前の男がどうしようもないほどの理不尽な存在で、そんな相手に二人共逃げられない事なんか、彼女は最初からようようと理解していたのだ。

――――だけど

仕方ないじゃないか。そうするしかないじゃないか。

立ち向かう事ができなくても、逃げる事ができなくても、そこで諦めるなんて選択肢をとれる訳がない。自分が死ぬ事も兄が死ぬ事も、そんなの、どっちも認められる筈がないのだから――――。

そうして、士郎の腕を後ろから引っ掴んだまま無言で俯くそんなイリヤを、無感情な瞳でしばらく眺めていた青の槍兵は――――やがて、場の沈黙を破る小さな嘆息を漏らした後、低い、重い声で、口を開いた。

「……坊主、悪いが、さっきの発言は撤回だ。気は進まねえが――――まずはそこのお嬢ちゃんの方から、楽にさせてもらうぜ」

「え、ぁ」
「っ、待て……！　お前の相手は俺だッ!!」
「い、いや……」
どちらの言葉も飲み込めないまま、イリヤはただ声を洩らす。しかしそんな彼女には一瞥もくれず、男は士郎に言葉を続けた。
「……だがな、坊主。このお嬢ちゃんの様子じゃ、おまえが先に向かってきても意味がねぇ。どうあろうとおまえはお嬢ちゃんを気にしながらの戦いになる。元からオレとおまえじゃ話になんねぇのに、その上余計なハンデも背負われるってんじゃ、一秒すらもたねぇよ。……そんな最期は何にも残らねえし、そんな殺し、オレも御免だ。
――――だもんで、どっちにしろ胸糞悪いが、そのお嬢ちゃんを片付けた後におまえの相手をさせてもらうぜ」
男の紅い槍が、イリヤに対して向けられた。
「――――っ!!」
男のその動きにまず反応したのは士郎だ。

咄嗟に槍の前、少女の前に立ち塞がった彼は、半身になって右手でポスターを構え、左腕で彼女を庇うように男と対峙した。

「あ……おにい、ちゃん」

その士郎の動きに振り回されながらも、決して彼の腕を離すまいとして思わずたたらを踏んだイリヤは、前がかりになった自分の前に来た背中を目にし、無意識のうちに彼のことを呼んだ。

すると何故か、今の状況には全くもってそぐわない、暖かくて緩やかな、安堵にも似た感情が彼女の胸に込み上がった。

――――なんでなんだろう？

イリヤはそっと自分の胸に聞いてみて、けれど、その答えにはすぐに行き着く事ができた。

……考えてみれば簡単な話。

士郎はイリヤにとってのヒーローなのだ。

もう、ずっとずっと、幼い頃から。
怖くて震えている時にはいつだって現れてくれて、その背中は暖かくて、何よりも安心できる。

場違いにも胸の内に湧き上がったその感情に
彼女は恐怖も何もかもを飲み込んで、安堵の笑みを緩く零した。
兄が居ればもう大丈夫。
どんなに怖くても、兄が守ってくれるから。
そっと振り返って、笑いかけてくれるから。
そうやってイリヤは、込み上げる暖かな感覚に身を任せて、いつかそうしていた様に、兄のその背中をただひたすら自身の目に焼き付けていた。

だけど
現実はそんな彼女に
どうしようもなく厳しくて

「――――早く――――行けッッ!!!!!」

彼は振り返らず、彼女の腕を振り払い、そう怒鳴りつけた。

――――瞬間

弾かれるように、イリヤは駆け出していた。

「は――――いい合図だぜ坊主!」

「黙れ、この野郎――――っ!!」

彼女の背後から聞こえた二人の声。

それと同時に夜に響いた、どん、と地を強く蹴る足踏みの音。

「――――ハッ――――」

それらに背ごと耳を塞ぐように、彼女は必死に走る。顔を俯け目を瞑り息切れを堪えきれないまま、無我夢中に走る。まるでそのまま何もかもを抛り出して逃げるかのように、脇目も振らずにただひたすらに走っている。

それでも、頭には疑問が湧いていた。
なぜ、どうして――――そう、どうして。
どうして
どうして
どうして、今、自分は走っているのか――――

そうだ、助けを呼ばなくてはならない。

唐突にイリヤは一つの結論に至った。
思考は単純だった。今の自分では兄を守れない。つまり役立たず。それなら自分以外の、兄を助ける力を持つ誰かを探さなくてはならない。助けてくれるのなら誰でもいい。ルビーでも、ミユでも、クロでも。――――そうだ、自分はその為に走っている。兄

もきっとそう考えたのだ。自分は頭が悪いからすぐには気づけなかった。だからぐずぐずして少し怒られてしまったけれど、きちんと助けを呼べば今度はきっと褒めてくれる筈だ。……まったく、兄に怒られるなんていつ以来だろうか。記憶にも殆どない出来事だけに、随分とショックを受けてしまった。これでは更に印象が悪い。痛恨の極みだ。兄の前ではそんな自分で居たくなかった。だから、その失敗分を挽回する為にも、今はとにかく速く、走って走って――――

――――その時、背後に響いた

ぎん、という、耳につく甲高い金属音。

その音にイリヤは振り返った。

立ち止まった彼女の視線の先では、士郎が持っていたあのポスターが粉々になって虚空に舞っていた。その光景に思わず息を呑む。

何故紙があんな風に砕けているのかは分からない。けれどあの青い男が槍を引いている所を見るに、彼はあの道具を用いて男の一撃を躱したのだろう。そうイリヤは推測

する。そしてこうも思う。上手い、と。

存在感とでも言うのだろうか。漠然と感じるあの青い槍兵の印象は、自分が戦ってきたカードの英霊達に対する物によく似ていた。おそらく、それに見合う凄まじい力量を男は持ち合わせているのだろう。理由もなしに、直感的にイリヤはそう察していた。

――――けれど、そんな男の一撃を兄は防いだ。

なけなしの道具を代償にしたものの、それが逆に男の意表を突いたのだろう。目を見開いて短く間を挟む青の槍兵。対して、反動に身を任せて男に背を向け、距離を取った士郎の姿。

――――そのまま逃げて。思わずそう念じたイリヤの目に、

「……っ！」

背くように、身を翻して男に再度対峙する士郎が居た。

もう武器なんて持っていない。それなのに、地を踏み、敵を睨み、惚けたように見やるイリヤに背を向けて立つ、士郎の姿。彼の顔は彼女からは見えない。けれど彼の対面で心底楽しげに笑う、青の槍兵。それがイリヤには、彼女の兄の表情を反対にして映しているように思えて。

「……な……んで……」

もう、本当に、ワケが分からなかった。
自分がいるから、兄はああしている。
そんな事はイリヤにも分かっていた。けれど、だからこそ、余計に理解できなくなった。

――――どうして
自分の為に、兄があそこまでしてくれるのか。

最初に自覚できたものは、まず疑問だった。
次いで『怖い』という気持ち。多くの感情が形もなく綯い交ぜになる中で、それだけが、ようやくイリヤに認識できた感情だった。
そして一旦自覚してしまった感情は、彼女自身にも制御できない内にどんどん増幅して
「……っ!!」
ぞくり、と、酷い寒気が背を這い上がった。
……怖い。ただ怖いと、イリヤは思う。

『わからない』という事がどうしようもなく恐ろしいのだと、今の彼女には思えてやまなかった。

そしてそれが、自身のよく知る人物の事なら、なおさら。

こちらの世界の兄は――――あの人は、自分の事を知らない。

それは確かだ。だからこそ自分は一晩中ショックを受けていたのだし、だからこそ彼に向こうの兄の面影を見て自分は嬉しくなったのだ。

だから、あの彼は自分を知らない。それはもう受け入れてしまった、単なる事実にすぎない。

……それなのにどうして、知らない人の為にあんな風に、自身の命まで張ってしまえるのか。

イリヤにはその理由が全然理解できなかった。そして彼に自身の兄の姿を重ねてしまうからこそ、余計に怖くなった。

他にも疑問は際限なく胸に湧いてくる。

何故、彼が魔術を使っていたのか。

▪何故、彼はあの青い男に狙われているのか。
何故、彼は
自分に、振り返ってくれなかったのか――――。

……怖い。ただ怖い。
分からないことだらけで、イリヤの頭はもうぐちゃぐちゃだ。
もういっそ、彼の事を本気で別人だと割り切ってしまえれば、楽なのに。
そんな事を考えてしまうぐらいには、今の彼女は恐怖という感情でがんじがらめに縛られていた。

……ただ

それでも
彼の、あの背中からイリヤは視線を逸らせない。
見れば見るほど『怖い』という感情が押し寄せてくるのに、ただ目を背けてしまえば楽なのに、
どうしても、彼の、あの背中から――――

不意に、遠い光景が眼前にちらついた。
夕暮れの公園。疎らになった人影。
淋しさに震える一人の女の子。
そしてそこに現れた、目前の彼によく似た背中。

「――――っ！」

イリヤは目を瞑る。耳を塞ぐ。
そうして彼に背を向ける。
いま目の前にある光景が怖くなって、また駆け出した。

――――ああ、またやってしまった。
走りながら、他人事のように彼女はそう考えた。

イリヤは元来、怖がりで淋しがりだ。
ただもっと詳しく言えば、どちらかというとイリヤは『淋しい』よりも『怖い』が嫌い。

なぜなら『怖い』という感情は、自分の目の前で取り返しのつかない事が起こりそうな時に抱いてしまう物だから。もし自分の行動で何かが失われてしまったら、そう思うとイリヤは怖くてたまらない。だから肝心な時に決めきれなくて、クロには『ウジウジイリヤ』なんて言われてしまう事もあるけど、それは仕方がない事だと、自分でもそう思う。

一方、『淋しい』という感情は、なんとなく一人が嫌な時に漠然と抱く物。確かにこっちも嫌いだけど、ただ自分が耐えればいいだけの物だ。だからそう考えると、『怖い』よりも全然たいしたことがない。

「――――」

だから時々、イリヤはこうやって『怖い』から逃げ出してしまう。
目を閉じて、耳も塞いで、そうすれば目の前の現実から逃げられるから。そうすれば怖くない。
代わりに目の前が暗くて、何も聞こえない一人の世界に飛び込んでしまうけど、こっちはただ『淋しい』だけだから。辛いけれど、嫌だけど、心の中でただ耐えればいいだけだから。

目を閉じた。耳を塞いだ。
もう何も見えないし、もう何も聞こえない。
暗い世界。
一人だけの世界。
淋しいけれど、怖くはない。
これで良いのだと、今回だっていつものようにすれば良いのだと、彼女は自分に言い聞かせて、ただひたすらに走っていた。

だけど

ふと、イリヤは思うのだ。

怖くなって目の前の現実から逃げ込んだ
暗い世界の中で、
自分一人だけの、その淋しい世界の中で、
それでも
遠くから聞こえてくる、この声は、いったい何なのだろう。

『――――俺はイリヤのお兄ちゃんだから。
だから、いつだって――――』

不意に、イリヤは足を止めた。
ざっ、と、足が地面を引き摺る音が鳴る。
身体を翻す。そうして顔を上げて目を向けて
少し遠くなった、兄を見た。

「……お兄ちゃんが、死ぬ？」

呆然と呟いたイリヤの視線の先では
紅い槍の切っ先が、士郎の胸に向けられていた。

――――ふと、嫌な光景が脳裏を過った。

走る銀光。彼の胸に吸い込まれるように進む穂先。そしてその一秒後、紅い槍が柔らかな身を抉って突き抜け、心臓を穿ち、弾ける血液。目に染みるような、赤い、赤い、鮮やかな飛沫。そして最後に崩れ落ちる、ぴくりとも動かない、よく知った人物の身体。動かない。動かない。本当に、少しも――――

「……そん、なの」

イリヤは拳を握る。その拳に汗が湧いている。

絶望と焦燥に歪みそうになる表情を無理やり無表情に凍らせ、その下で彼女は早鐘のような自身の鼓動を飲み込む。

――――お兄ちゃんが死ぬ。

荒い呼吸に思考が詰まる。頭が一杯一杯な状況で、不吉な予感だけが脳裏に過る。

耳を、己の鼓動が痛いほどに叩いている。

冷たい汗が頬を伝う。

――――なんで、お兄ちゃんが死ぬ。

頭が上手く働かない。理由なんて判りっこない。

そんなの考えたコトがないし、考えたくもない。
――――だけど、お兄ちゃんが死ぬ。
その未来は確定している。
それが判っているから、自分は今こんなにも焦っている。焦った所で何も出来ないと知っているから、自分はこうしてただ立ち尽くしている。

だけど
もう、そんなコトは、関係なくて
だから、自分は――――わたしは――――

「そんなの、嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」

気づけば、イリヤは叫んでいた。
今の彼女は正常な感覚など持ち合わせていない。ただ感情に突き動かされただけ。恐怖も絶望も、怒涛のように湧き出てくる余計なモノは何もかもかなぐり捨てて、胸の内にあった一番大きな感情を、無様にもぶち撒けていたのだ。

――――だが

それでも紅い槍は奔るだろう。兄の胸に、寸分の違いなく。

そして、次の瞬間

イリヤの予想通り、槍を持つ男の腕が――――動いた。

その光景に息が詰まる。それを無理矢理に押し出して叫びを続ける。出しきれないで余った声が内に反響する。体の芯から響く音に酷い耳鳴りが、そしてそれに重なるように鼓動の音が頭に響き、一秒がいやに長く引き伸ばされる。本来ならば、速やかに移りゆくはずの視界がなぜか鈍く、静止した目の前の光景は、まるで一点の風景画のように。

いつの間にか声が掠れた。息が続かず知らないうちに喘いでしまい、酸素の足りなくなった脳は働かず、思考は茫洋として色味さえも失われていく。静止した光景は無機質にトーンを落とし、希薄な現実感が、場を朧に霞ませていった。

――――その時

ごとり、と、心臓が音を立てた。

その音に意識が覚醒する。ひゅっと笛のような音を零して息を吸い込んだ。茫洋と濁っていた頭が、取り込んだ冷たい酸素に、急速にクリアになっていく。目の前で止まりかけていた風景が、再生ボタンを押されたかのようにゆっくりと動き始め、イリヤの視界に、動き出した赤い槍の軌跡がまざまざと映りこむ。動画が次第に早送りされていくように、スローだったその動きが急速に速くなっていった。

「あ……ぁぁぁぁぁぁぁ……っ!!」

現状を認識した途端、悲鳴にならない声が喉元より零れた。恐怖に似た感情がイリヤに走る。だけどその感情に、更に景色は速くなる。嫌だと訴えるイリヤの想いが、かえって目の前の世界を正しく認識させた。

だから結局、どれだけ彼女が願っても叫んでも、槍は動いて、彼の心臓へ――――

「イリヤさん。貴女の声、確かに届きました!!」

――――突如

空から、そんな声が落ちてきた。

「え――――!?」
「な――――!?」

土郎と男と、驚愕の声が重なった。
原因は、文字通り場に落ちてきた何らかの存在。
視認できないほどの猛スピードで空から降ってきたそれは、向かい合う二人のちょうど中間に落ち、まるで彼らを分かつように土煙を轟々と舞い上げた。

「――――」

そうして、その場に立ち会った、もう一人。

「――――チィ！」

戦闘者の性なのだろう。

謎の声と現象を前に、男が背後へと跳躍する。

一息に十メートル。それ程の距離を苦もなく飛んだ青の槍兵は、自身の紅い槍を前へと構え、警戒の目つきを持って先の場を睨みつけた。

「――――え、な――――？」

一方、急な展開に全く付いていけない士郎。

状況を飲み込めずただ目を白黒させた彼は、ついで驚きに開けたままの口から煙を吸い込んでしまって、ごほごほと知らず咳き込んでしまう。

「――――」

そうして最後に、その場にいたもう一人。

先ほど届かない筈の叫びを上げたイリヤは、この現象を前に状況を窺う他の二人を置

いて、僅かな逡巡の間も入れず駆け出していた。向かう先は兄の許。依然として土煙に視界を防がれたその場所に、しかし迷いなく、一直線に彼女は突っ込んでいく。

「――――まだ、何にもわからないままだけど」

そんな少女の声だけが夜に響いた。

するとその声に呼応するように、先ほど庭に落ちてきた何かがイリヤの手に飛び込んでくる。

それを彼女は迷いなく受け止めた。そうしてぎゅっと強く握りしめて、速く、強く、顔を上げて迷いを切って、喉元に掛かった言葉を押し出すように、溜まり溜まった気持ちを腹の底から吐き出してやる。

「――――お兄ちゃんが死ぬなんて、そんなのは認められないから」

瞬間、ざあっと白銀の光が場に走り、辺りを白く彩る。

その清廉な光が走り抜けた後には、彼女がこの世界に来る直前のように、その身に薄い桜色の衣装が纏われていた。淡い、 華やかなその装いは、夜の闇にもありありと鮮

やぐ。

いつもは派手過ぎるとさえ感じるその格好が、今のイリヤには背中を押してくれているように思えて。

そうして彼女は湧いた決意を揺るぎなくするように、土煙の向こうに立つ槍兵をキッと強く睨みつけ、精一杯の声を張り上げて宣言した。

「――――お兄ちゃんは、わたしが守る！　だから力を貸して、ルビー……!!」

ＡＣＴ６　「槍兵（上）」

耳を聾した轟音の後、立ち昇った土煙。
紗幕のように場に掛かった白い煙のその後ろで、イリヤは自身の兄を後ろ背に庇うように立ちながら、目の前の青い男を強く睨みつけた。
そんな彼女の身に纏われた桜色の派手な衣装。
あまりにも急な展開と少女の奇抜な装いに、沈黙を保って状況を窺うしかない他二人。
……各々の思惑に、意図せず場が膠着する。
誰もが決め手を欠いて次の行動を選択できない、そんな奇妙なこの状況で、ぷるぷる、ぷるぷる、と、唯一の動きを見せていたのは――――

「イ……イ……ッ、イリヤさ～んっ！」

カレイドステッキ・マジカルルビー。

少女の相棒たる魔法のステッキだった。

「イリヤさんイリヤさん、イリヤさんっ!!!」

自らの主に受け止めてもらった彼女はよほど嬉しかったのか、声を上げ身をよじり、ピコピコとせわしなく明滅を繰り返して喜びを表現する。

「わっ、ちょっ!?」

「世界の狭間に投げ出されさまよい幾日や。皆さんとはぐれ、サファイアちゃんとすら交信が取れていませんでした……。

しかし、その時に聞こえた声！　気付いた時には空に投げ出されていた我が身！　それでもなお一瞬にして求められる事を察するわたしとイリヤさんの固い絆！　なんと素晴らしいことでしょう～～～～!!」

「ちょ、ちょっと待って、ルビーっ！」

「ああ、この懐かしのリアクション！　可愛らしいお手手のジャストフィット感！　やはり今こそ貴女をこう呼ばせてください、わたしの最初で最後のマイ・マスター……!!」

「わ、わかったから、ストップ！　お願いだからストップして、ルビーっ!!」

突然開始された一人と一体（？）のコント。

思わずあっけに取られていた他二人のうち、いち早く気を取り直した青の槍兵が、中腰に構えていた槍を地に付け、どこか気勢が削がれたように口を開いた。

「……あれだな、近頃の魔術師ってのは、えらく変わった格好してるんだな」

気の抜けたその言葉に、相棒の少女と漫才を繰り広げていたステッキが翻ってさらりと答える。

「そうですよー。これが流行りの魔法少女スタイルです」

「……おまけに喋る杖ときたもんだ」

「むむっ。しかしそう言うお兄さんも、実はこういうゲテモノ・っぽい服装が好きだと見ますが！」

「ゲテモノってルビーが言っちゃうの!?」

思わず愉快型魔術礼装にツッコミを入れたイリヤを尻目に、青い騎士はひどく愉快げに言葉を返した。

「さすがにそこまで先鋭的な格好はお断りだが……ま、同感だな。遊びがなさすぎるのは性に合わねえ」

「ですよねー。その格好もきちゃってますもん！」

「――――は、言ってくれる」

おかしげに、くつくつと肩を揺すって笑う男。ルビーの不躾な言葉をも▪飄々と受け止める彼は、まるで普通の、何処にでもいる気の良い青年のようで。
先ほどまでの彼とのギャップに、思わずイリヤは気を抜いてしまいそうになる。

「――――それにしても」
そんな困惑を隠せない少女をおいて、ルビーがもう一度くるりと身を翻して言った。
「これはまた面白い展開になってますね～」
彼女の振り向いた先には、一人の少年の姿があった。

「念のためにお名前をお伺いしてもよろしいですか、おにーさん？」
「……え？　あ、ええと……衛宮士郎、だけど」
よく分からない展開でよく分からない物体に矛先を向けられた彼は、戸惑いながらもなんとか返事を返した。一方、その返答の何が面白かったのか、そいつは興奮したように自らの機体を点滅させる。
「ふむ、ふむふむ！」
「え、ええっと、お前、いったい」
「ああいえすみません。ただ、やっぱりどの世界でもお兄さんは朴念仁っぽい方だなと

思いまして」
「は？」
「ちょ、ルビーっ！」
　慌てたイリヤが口を挟む。
「イリヤさん？　だってこれ完璧にイリヤさんのお兄さんですよね？」
「だからって、おに――――し、シロウさんに失礼だよ！」
「おや？　『シロウさん』？」
「……あ」
　イリヤは何故か、とんでもない地雷を踏んでしまったような気がした。

「……」
「……」

　軽い沈黙が降りた。――――そうしてふと、場にぴこーんと変な機械音が鳴って、ルビーがにやにやと意地悪いオーラを露骨に滲ませだしてきた。

「は、は～ん」

「……な、なんなの、ルビー」
「いえいえ。イリヤさんもなかなか隅におけないと思いまして」
「え」
「だってですよ？　あのイリヤさんが、まさか、お兄さんのことを『シロウさん』だなんて、親しげにお名前を呼んでいるだなんて」
「っ!!」
　ぼん、と少女の顔が一瞬で真っ赤になった。
「う～ん、でもルビーちゃん、少しショックです。見知らぬ世界でお一人。イリヤさんもさぞ寂しがられていたのかと思いきや、まさか平行世界のお兄さん相手に着々とラブコメってるとは。ひっじょ～に、ショックです!!」
「ち、ちがっ」
「ですが、同時にイリヤさんの成長を喜ばしく思います！　そちらも満更じゃないですよね、お兄さん！」
「あ、え？」
「も、もう、ルビーは黙っててっ!!」

　羞恥心から、イリヤは思わずそう叫んで――――瞬間、彼女は、場に走ったとんでも

ない殺気にぞわりと身体を竦ませた。

「――――っ!!」

いつの間にか湧いた雲が、月に掛かっていた。

急激に薄暗くなる場の中、何もかもが黒く縁取られて、炭を流したような暗闇が辺りを包み出す。

しかし、イリヤが咄嗟に振り向いたその先。風にゆるやかに流れていく薄煙の中から、その暗闇に置いてなお鮮やかな、深い青の色彩が浮き上がる。

そしてその影を固唾を飲んで見つめたイリヤの耳に、獲物を目の前にした獣が唸るような、殺気の浮いた冷たい声が、低く届いた。

「――――さて、今度はお嬢ちゃん達が、オレの相手をしてくれるってコトでいいんだな？」

紅い、美しい線が不意に宙を走った。

ぶん、という音を置き去りにした疾風。その余波に吹き散らされた煙の残滓が彼の周囲を嬲って消えて、後は場に、払われた朱槍の余韻をかすかに残す、しんとした静寂が降りた。

晴れた視界の先に立つ男のその表情は、先ほどまでの気の良い青年の物ではなかった。

代わりに浮かぶのは、親しみの一切をそぎ落とした無情な色。温度のない赤い瞳でイリヤを睨んだ槍の騎士は、聞いた人間がぞっと凍りつくように低い、鋭い声で言葉を発した。

「せいぜい楽しませてくれよ――――」

――――その言葉を合図に

獣の青い体躯が、くっと地に沈みこんだ。

「――――っ、ルビーッ!!」

男のその動きを視認したイリヤは、咄嗟に行動を開始していた。半ば無意識に発した

呼び声。自身の発した火急のその▪叫びに、緩んだ頭が急速に臨戦態勢になっていく。

そしてその声に応えるように、己が相棒が膨大な魔力を供給してくれたのを肌に感じて――――即座に砲弾に変換させたそれを、敵が動き出す前に撃ち放つ――――！

「砲射（フォイア）……!!」

狙い打つは目の前の青い獣。ロクに収束すら行わずに編み込んだ速度重視の一撃が、轟々一直線に標的を打破せんと迫っていく。

「――――はっ」

それを、青の騎士は一歩横に逸れるのみで躱して見せた。

とん、と、ステップを踏むような軽やかな動き。あまりにも流麗なその回避は、そのままイリヤと槍兵との隔絶した技量の差を表しているのだろう。そしてその証拠に先んじて攻撃を受けたにも関わらず、まるで彼女の一挙一動を愉しむように、男の口元には余裕の笑みが浮かべられていた。

「イリヤさん……！」
「うん、わかってるっ……!!」
だが、その程度は彼女たちも織り込み済みだ。
狙い定めるは不可能。そう即断したイリヤはステッキを素早く頭上に掲げ、一息にそれを振り下ろす。
「散弾（ショット）……!!」
相手の反応に追いつかないなら、照準を定める必要がない攻撃をすればいい。
ゆえに、彼女たちが選んだのは『点』の砲射ではなく『面』の散弾。
前面全てを覆い隠すような幅広の弾幕が、周囲の空間ごと目の前の標的を覆い埋め尽くした。

――――――しかし

青の騎士にとっては、この空間制圧でさえ、単なる目眩まし程度にしかならなかったらしい。
ひゅん、という音を立てた一閃なる槍の薙ぎ払いに、彼女の放った散弾はことごとく

四散する。

直後、弾いた魔力光によって、ぼう、と妖しく光った紅い槍。その長槍をそのまま半身に構え直した男の身体が、今度こそ、放たれる前の、引き絞った弓のようにぐっと屈められた。

……威力不足だ。

目の前の光景に、イリヤの脳裏にそんな考えが焼きついた。

範囲を広げた散弾では一発当たりの威力が小さく、先ほどのようにあっさりと防がれてしまう。それに、たとえあの槍の隙間を縫って攻撃できたところで、あの程度の魔力弾では大したダメージを与えられない。このままでは徒らに労力を消費してしまうだけだろう。

「――――だけど」

同時に、次に取るべき行動も頭には浮かんでいた。それもそうだろう。何時だったか、今までの戦いで自分たちはこんな展開も経験していたのだ。

『点』の砲射では当てるに能わず、『面』の散弾では威力が及ばず。なら、その両立を担う攻撃は――――

「『線』の――――斬撃（シュナイデン）！」

薄く、鋭く。

限界まで研ぎ澄ました渾身の一撃。

威力を十全に清廉させた大斬撃が、▪空気に亀裂を入れるかのように前面を横薙いでいく。

「ルビー！　もっと魔力をおねがいっ！」

しかし、その強烈な斬撃を放ったイリヤは、前を油断なく見据えたまま次弾の装填に取り掛かっていた。

もとより、彼女はこの程度の攻撃であの敵を打倒できるとは考えていない。

この一撃は布石なのだ。

先のように避けることも軽々しく防ぐこともできないこの一撃を、相手は本格的な防御の構えで迎え撃つだろう。意識も自然とこの斬撃に向けられる筈。

態勢だけでも崩させてもらえればこちらのもの。

そんな思考を巡らせたイリヤの目の前で、標的である青の槍兵は迫り来る一閃の斬撃に対して――――何故か、じっと立ち尽くすように動かないままで在り続けて。

――――次の瞬間

突如、男の姿が、その場から消え去っていた。

「――――え？」

イリヤは思わず惚けた声を上げた。

なにせ、まったく意味がわからない。だって彼女は瞬きすらしていない。油断なく前だけを見据えていた筈なのに。それなのに、本当に何の前触れもなく、この暗闇においてもあれ程目立っていた目の前の青色が、ごっそり視界から居なくなっていたのだ。

・彼に当たるはずだった斬撃が先の場を通り過ぎる。如何に強力な攻撃と言えど、標的がいなければ虚しく空を切るだけだ。

そうしてイリヤは斬撃を横薙いだ姿勢のまま、ただ呆然と目の前の空間を眺めていた。

「イリ――――」

ルビーが、彼女の名を口にしようとしていた。
何か気づいたのだろうか。
なら早く言って欲しいとイリヤは思った。
だって、たぶん大変な事になる。
このままでは取り返しのつかない事になるのだと、己の半身であるクロの折り紙つきの、彼女の直感が全力で警鐘を鳴らしているのだ。
だけど漠然と背中に這い上がるそんな危機感を前に、イリヤはただ呆然と前を見据える事しかできなくて――――

「――――上だッッ――――!!」

その時、背後から聞こえた、よく知った声。

「……っ！」

その声に反射するように、イリヤは己の頭上に全力で魔力を集めていた。

ばり、と鈍い破裂音が近くで鳴った。

咄嗟に張った物理保護壁。

複数に折り重なって出現したそれに、強烈な勢いを保ったナニカがかち当たり、あっさりとその全ての防御を突き破っていったのだ。

「――――へぇ」

そして直後に聞こえた、どこか感心したような声の主――――先ほど視界から突如消え去った青の槍兵が、いつの間にか彼女の頭上に忽然と現れ、そうして突き出した槍の反動で軽やかに地に着地するところを、ようやくイリヤは視界に納めた。

「――――っ、お兄ちゃん！」

「わっ!?」

イリヤは背に庇っていた士郎を引っ掴んで後ろに飛んだ。

驚く兄を気遣う余裕もない。
状況に驚愕している暇もなかったのだ。
幸い、どうしてかあの槍兵は距離をとるイリヤたちに追撃せず、彼女は無事に態勢を整えることに成功した。
「すみませんイリヤさん！　あまりのスピードに警告が遅れてしまいました」
「……うん、すっごく速かった」
イリヤはルビーを責めなかった。
先ほど追撃を狙おうとした自分たちが浅はかだったのだ。
今までに戦ってきたどんな敵よりも、あの槍兵は速い。
「はい……そしてそれだけに驚きです。いくら私たちより遠距離（ロング）での事とはいえ、まさかイリヤさんのお兄さんが反応なさるとは」
「……」
そうだ。これで兄に対する『わからない』が、また一つ増えてしまった。
そのことを怖いと、そう思う。
けれど、今は余計な事を気にしている場合ではない。イリヤは胸の内に湧いた恐怖に歯を噛んで思考を切って、別の話題を口にすることにした。

「ルビー、あの槍って」
「お察しの通りです、イリヤさん。アレは間違いなく、わたし達が知っているあのカードの槍と同一の存在です。……それに」
ルビーはいったん口を閉ざすと、普段の彼女に似合わない、ひどく深刻なトーンで言葉を継いだ。
「……それに、わたしが曲がりなりにもあの敵の動きを察知できたのは、実は理由があるんです。それは、『あの敵の身体自体がわたしの感知できる要素で編み込まれている』ということ――――ぶっちゃけると、にゃろうの身体は第五架空元素たるエーテル、それによって構成されているんです！」
「だ、第五……？　え、えっ、なにそれっ」
謎の用語にイリヤは思わずたじろいでしまう。
「要するに、あの敵はわたしたちが戦ってきた――――」
困惑するイリヤにルビーが説明を重ねようとした、その時だった。
「――――よう」
遮るようにして掛けられた言葉があった。
その声に彼女たちが咄嗟に振り返ると、先ほど尋常ではない動きをしてみせた青の騎

士が、どこか呆れたような視線をこちらに向けているところだった。
「あー、お前等、気を抜きすぎじゃねえのか？」
「……っ！」
「まぁ、見てる分には面白えからいいんだけどよ」
そう言って肩を竦める男にイリヤは困惑を隠せない。
思えば、先ほどからこの敵は自分たちをいつだって殺せたはずなのだ。
それなのに何故、彼は隙だらけの自分たちに声をかけるなど、わざわざ抵抗を助長させるような真似をするのだろうか――――。

「それにしても――――」
そんな時不意に、彼の瞳が射抜くように眇められた。
「どうやらお嬢ちゃんは、この槍の事を知っているらしいな」
「っ！」
「……やはりか。ま、最初から変だとは思っていた。聖杯戦争の事を知らない割に、何故かオレをランサーと呼ぶお嬢ちゃんの反応。そして、何より――――嬢ちゃんの戦い方は、オレの槍を知っている奴のもんだ」
魔槍ゲイ・ボルク。因果を歪め、心臓を必ず穿つという結果を約束する必殺の朱槍。

この槍の持ち主と戦う以上、イリヤは一定の距離を保ち、なんとか槍の効果の範囲外からの攻撃を行わなければならなかった。

「――――どこでコイツを知った？」

「……」

男の問いかけにイリヤは応えない

より正確には、応える余裕もなかった。

立て続けに起こる出来事に頭は困惑を超えてショートしかけていたが、その現状を僅かに残った理性で律して、この場をどうやってくぐり抜けるか、彼女はただそれだけを必死に考えていたのだ。

――――月が、白い月光を落としている。

淡い光に濡れた庭の地面に、彼ら彼女らの影がくっきりと落ちていた。

耳の痛い無音。

音もなく吹きすぎた風が、この場の打開策に懸命に思考を巡らせているイリヤの、その銀の髪を僅かに揺らした。

一方では、青の騎士がその少女を眇めた・瞳で眺めながら、片肩に紅い槍を担ぎ、と

ん、と、軽く槍の反動に音を鳴らしていた。後ろに無造作に括っている彼の長い髪が、同じように吹きすぎる微風に微かに揺れる。

「――――はっ」

――――不意に

青の男が心底楽しげに、愉快そうに虚空に笑い声を響かせた。

「……っ？」

「ああ、いや、悪いな」

先の笑いに、思わず体をビクつかせて身構えたイリヤの様子を察したか、口に手をあててくくつと笑い声を押し殺しながら、青の騎士は顔を俯かせて独りごちるように呟いた。

「――――いや、おまえ達を馬鹿にして笑ったわけじゃない。むしろ、オレはおまえ達に

腹の底からの賞賛を送ろう。

ま、ちと愚痴を聞いてくれると嬉しいんだが、オレはこの世に現界して以来、つまらねえ仕事ばかりをさせられていてな。……っとに、自分の運の悪さはよくよく知っているとは言え、こればっかしはどうにもやりきれねぇ。

――――でだ、そんな時の事だ。おまえ達のような、良い目をした連中に出会えたのは。ようやくオレにもツキが回ってきたのかと思えてきてね……ああ、そういえば、さっき出会ったお嬢ちゃんもかなり良い線行ってたけな」

「……」

「ま、そういう訳でおまえらに会えて良かったって話だ」

くっくっと、本当に嬉しげに笑っていた青の騎士は、そうして最後に言葉を締めると――――不意に面を上げ、凛とした顔つきを作ってこちらを見た。

雲の隙間から月光が落ちる。地に在る青と紅に反射する。

妖しい光沢を放つ紅い槍を手に、青の騎士は毅然とした態度でイリヤ達に相対し、言葉を紡いだ。

「勝手ながら、敬意を示させてもらおう。オレはランサー。言葉の通り、今回の聖杯戦争

では槍兵としてこの世に現界している。
……ああいや、これじゃ、お嬢ちゃん達はわからないんだったか」
男は自身の失敗に頭を掻くと、何の衒いもなく朗々と続けた。
「――――真名はクー・フーリン。太陽神ルーを父とし、母たるデヒテラの胎より生まれ落ちた、古きエリンの地の戦士だ」
その言葉に
何気なく為された彼のその名乗りに
――――その場の全員が、息を飲んだ。
「……っ」
イリヤも士郎も、あのルビーでさえも、口を噤んだまま、ただの一言すら発することができなかった。
呆然とするそんな彼女達を気にした風もなく、青の騎士は飄々と相変わらぬ態度で独

りごちる。

「この槍を知ってるならオレの正体にも薄々感づいてたろうから、先に言わせてもらったが……柄でもなかったか。まったく、お行儀の良い騎士サマじゃあるまいに。――――ともあれ、それだけオレがおまえ等を買ってるってこった」

男は言葉を続けているが、イリヤの頭には何も入ってこなかった。

だって、全くもって現実味がない。

目の前の彼は、黒化英霊のように物言わぬ敵ではない。自分たちと同じようにこの世に在り、誰憚ることなく軽口すら叩いているのだ。……それなのに、その存在が、まさか大昔の英雄そのものだなんて――――。

「やはり……これは……無理、ですね」

ぽつり、とルビーが静寂を破った。

「黒化英霊なんて比ではありません――――目の前のあれは、正真正銘のバケモノです。英霊とは、人々の『かくたれ』という想念によって編まれた言わば人類が考える最強の存在。その英霊が、まさか自我を持ったまま目の前に現れるなんて……とにかく、彼らは人の身で打倒し得る存在ではありません。反則です！」

「……反則」

その言葉が、他人事のようにイリヤの耳に聞こえた。

「ええ、あの八枚目のカードの少年もそうでしたが、今回も相手が最悪です。クーフーリンと言えば世界に三人と居ないほどの槍使い。武としての一を極限まで高めた、違うことなき大英雄です！

――――イリヤさん、とにかく撤退しましょう!!」

「て、撤退って言われても……っ」

イリヤは思わず泣き言を洩らしてしまうが、それも仕方ない。

先ほどの動きからして能力も桁違い。加えてその存在が英雄としての経験を持って敵対してくるのだ。カレイドステッキを有しているとはいえ、イリヤには万が一にも出し抜ける相手ではなかった。

彼女達のその遣り取りに、憮然とした様子で片眉を吊り上げた男が口を挟む。

「おいおい、つまんねえ事を言ってくれるなよ。

オレはこれでも雇われの身でね。下された指令は心底気に喰わないが、こっちの方からおまえらを逃すつもりはこれっぽっちもねえんだ。そんなコトは、今までのオレを見てればわかりきってるこったろう？

――――それに、まだお嬢ちゃんは何かを隠し持っている。これは直感なんてたいそうなモンじゃなく、単なる勘に過ぎねえんだが、こと戦いにおいてはそう間違いは起こさないと自負していてな。オレはいったいそれが何なのかは知らねぇが――――それを、真っ向から受け止めたいと思うオレがいる。打ち破りたいと思うオレがいる。結果なんぞどうでもいい。ただオレは、オレ自身の誇りを満たすために、おまえに全力を尽くしてもらわなきゃ困るんだよ」

そうして、男は長々とした口上を述べて

「……ま、お嬢ちゃんがもう何もないってんなら、さっきみたいにもう片っ方が足止めってのも悪くはないが。

なぁ、坊主？」

ついと持ち上げられた、槍の穂先が向いた先には――――

「ダメ……っ!!!」

イリヤは振り向かないままに、ただ下を向いて声を足元に叩きつけるように叫んでいた。

その声が張り詰めた空気に反響する。どくどくと、怖いぐらいに己の心臓が鼓動を刻

み始めた。
……状況は正確に把握していた。
きっと自分の背後には、どこか知らない人のように決然とした顔で立つ兄の姿があって、そして目の前の青い男に掛けられた言葉に対し、今まさに、その彼が、一歩足を踏み出そうとしているところだったのだろう。そんなこと、わざわざ振り向かなくても分かった。

「……っ」

だけど、そんな事は認められない。
先ほど自分は決めたのだ。
自分が、兄を、絶対に守るのだと。

「……何か」

知らず、口をついていた言葉に自分で驚く。そして即座に胸の内で反芻する。
『まだお嬢ちゃんは何かを隠し持っている』

青い男の先ほどの発言。
それが、不意に脳裏に蘇っていた。

「何か――――」
俯いたままに再度呟く。また、拳を強く握っていた。
男が言っていた、今の状況を覆す何か。
それを、自分はきっと知っている。
――思い出せ。
己に言い聞かせる。
――――早く、思い出せ。
ただ、言い聞かせる。
――何か、何か――――。

何か――――
!!!!!

その時、ふと、彼女の目に映ったものがあった。

「……そっか。敵が反則なら、こっちも反則すればいい」

沈黙を保っていたイリヤは、不意にそう呟いて――――瞬間、どこからか取り出した何かを、力いっぱい地面に叩きつけた。

甲高い音が鳴る。

その音が、張り付くような場の静寂を突き破った。

「カード!!? ですが、限定展開では……!」

そのイリヤの行動にルビーが驚きの声を上げた。

――――彼女が地に叩きつけたのは、右脚のホルスターに入れていた一枚のカード。

普通のタロットカードのようなそれの表面には、典型的な魔法使いの老人の姿が描か

れている。
　そしてその何の変哲もないカードに士郎と槍兵が疑問を浮かべる一方で、その場で事情を知るルビーだけが、しかしそれ故に、少女の行動に対して疑問を叫び上げていたのだ。

「――――ううん、違う」
　しかし、イリヤはその懸念を一言で制して
「もうわたしは、カードを使える……!!」
　迷いなく、自身の言葉を発するのだった。

「――――夢幻召喚（インストール）――――!」

　彼女の、非常な力の込められた宣言の、その声に呼び出されるように魔力の風が地面より吹き上がった。同時に足元に現れた魔法陣。その下より煌びやかな光が湧き上がって彼女を包みこんだ次の瞬間、少女の身には濃い紫紺のローブが纏われていた。

クラスカード・キャスター。
その冠に刻まれたるは、旧きコルキスの王女『メディア』
ギリシャ神話に記された裏切りの魔女。まだ神々の奇跡が満ちていた時代に生き、その頃の魔法を自在に手繰った比類なき魔術師。
その存在を、イリヤはその身に宿していたのだった。

ＡＣＴ７「槍兵（中）」

「……おいおい、そりゃあ」

青の騎士が、初めて本気の意表を突かれたように声を漏らした。

「――――シロウさんは下がっててっ！」

敵のその思いがけない隙にイリヤは好機を見る。

少女の身が虚空に浮かぶ。

月光が降りる蒼い闇に、幾重にも連なる魔法陣が現出した。

彼女は自身の兄を後方に庇ったまま、円環の杖と化した相棒を強く握りしめて、目の前の敵に向けてありったけの呪法を編み込んだ。

「――――Ａελλω――――」

発した本人以外には理解できない言葉。
その一言に応じ、先ほどまでとは比べ物にならない威力の光弾が撃ち放たれた。

「――――チィ！」
青の男が舌打ちを零して飛び退いた。
優に二十メートルは間合いを取っただろう。
先の距離では拙い――――紫電の光弾は、あの槍兵にそう判断させる程の速度すら兼ね備えている。
「逃がさない……！」
その彼に、イリヤは追撃を緩めない。
彼女が叫ぶと同時に周囲に魔力を込めるだけで、辺りを幾重にも囲む魔法陣が、ぼぅ、と妖しい色を灯して燦然と輝き始めた。

――――コルキスの王女メディアは比類なき魔術師だ。
彼の存在には詠唱など必要ない。神代に生きた魔女に自身と世界をつなげる手順な

ど不要なのだ。常として世界を回す神秘を帯びた彼女にとって、魔術とはただ命じること。己が番犬に、ただ『襲え』と告げるに等しい。

ならば、その存在を身に宿しているイリヤが、現代において桁違いの魔術を一工程で扱い得るのも道理だった。

続いて放たれた攻撃は際限がない。降り注ぐ光弾は爆撃に似ている。一撃一撃が必殺の威力を持つ魔術を、今のイリヤは矢継ぎ早に、それこそ雨のようにとめどなく繰り出していく。

そんな砲撃の標的にされた青の男はたまったものでなく、一所に留まることすら許されない回避を余儀なくされていた。

「クラスカードの限定展開ではなく夢幻展開とは――――凄いです、イリヤさん！　それに魔術師のカードであれば、カレイドステッキの私と相性抜群。これなら！」

イリヤの手元には、キャスター・バーサーカー・アサシンの三枚のカードがあった。その各々が適正クラスに応じた英霊の力を宿す魔道具。媒体にすれば伝説の英雄の

力を引き出すことの能うそれは、まさに反則級の代物と言える。
しかし、状況は引き続き厳しいまま。
そもそもバーサーカーのカードは、限定展開ですら満足に扱えるかどうか怪しく、アサシンのカードにしたところで、あの槍兵の尋常でない敏捷を前に、それも兄を抱えて隠れ逃げ切ることができるかその判断が彼女にはつかなかった。
となれば、残る選択肢は一つ。
過去に自分たちが相対した神代の魔術師のカード。それを用い、立ち向かう敵を桁違いの魔術で圧倒する戦い方――――

――――そう

イリヤが下したのは逃亡ではなく、敵の撃退という決断。

それが、どれほど困難な選択なのか。
そんなことはイリヤも理解していた。
なにせあの敵の力は絶大だ。速さ、技量、戦闘経験、そのどれもが自分を遥かに凌駕している。現に、つい先ほどの交戦中、自分は何度も死の覚悟を強いられたのだ。甘く見ていい相手ではないのは重々承知だった。

けれど、先ほどのルビーの言葉通り、この魔術師のカードとイリヤたちの相性は抜群だ。

規格外の魔術礼装であるカレイドステッキは、無尽蔵の魔力をその所有者に供給し続ける。そこにカードが宿す神代の魔女の知識を加えれば、一流の魔術師から見たとしても法外な魔術の行使を、それこそ湯水のように制限なく行うことができるのだ。

敵と同じ英霊の力を用いた戦い。勝機はそこにしか有り得ない。

……ただ

それでも、力及ばないこともあるだろう。

しかし、それならそれでイリヤは良かった。

一番に優先すべきなのは兄の無事の確保。自分があの槍兵を引きつけているうちに、兄には先に逃げてもらえばいい。そうすれば、魔法少女と化した自分一人ならば、他のカードの力も用い、隙を見てこの場から逃走することも可能かもしれない。

だから、いま彼女がすべきなのは弾幕を貼り続け、攻防の拮抗した状態を作り出すこと。それこそがイリヤなりの、この絶体絶命の場における最善の戦術だったのだ。

――――しかし

「それなのに――――!!」

胸を突いた焦燥に思わずイリヤは叫ぶ。

目の前の光景。

少女の目論見通り、神代の魔術によって次々と降り注ぐ魔弾。

もはや攻撃の間隙を・見つける方が難しいと思われるそれを――――しかし、青の騎士は、ただの一撃すら被弾する事なく避けきっていた。

「なんて、デタラメ……・ッ!!」

イリヤからすれば冗談でもない。

槍兵が砲撃を一つ避ける度に、その着地点を目掛けてイリヤは再度魔弾を放つ。けれ

ど次の瞬間には、男の姿は消えるような速度で掻き消え、気づけばまた避けられている事を彼女は知るのだ。

喩えるなら、絶対に攻略不可能なモグラ叩きをさせられている様なもの。命をチップに死のゲームに挑む少女の表情は、焦燥と不安にひどく歪められていた。

「こっの……!!」
「イリヤさん！」
「なんで、なんでっ、どうして当たらないの!?」
「イリヤさんっ！　少し落ち着いてください！」
「落ち着けって――――ルビーは少し黙ってて！　今はそれどころじゃ――――」
「お願いします、イリヤさん。今は、私の言葉に耳を傾けてください・」
「っ……ルビー……？」

知らず混乱状態に陥っていたイリヤは、ルビーの言葉にはっと我に返った。普段の彼女とは違う落ち着いた声色。真剣な調子。常と全く異なる相棒の様子が気に掛かって、彼女との会話に少しだけ意識を割く事ができたのだ。

「イリヤさん、落ち着かれましたか？」
「……う、うん。でも……」
「はい。そのまま、あの敵に向かって攻撃し続けたままで構いません。ただ、意識はいくらか、話をする程度にこちらに向けておいてください。
　きっと、今はそれで十分でしょうから」
「……」
　ルビーの意図は判らなかったが、イリヤは言われた通り槍兵に魔力弾を浴びせ続けながら、話の続きを待った。
「さて。ところでイリヤさん、あの敵の様子をどう見ますか？」
「どうって……もうわけが分かんないぐらい速いよ。キャスターのカードを使えたら照準なんて関係ないと思ってたのに、結局一発も当てることさえできてないし、こうしてる今だって、いつまた突然目の前に現れるか……！」
「――――そこなんです、イリヤさん。どうしてあの敵は、今、向こうから私たちを攻めてこようとしないのでしょうか」
「え？」
　不意にそう切り出されて、イリヤは思わず目を瞬かせた。

もう一度意識を完全に敵へと移す。イリヤが放つ砲弾を躱し続ける槍兵の姿。一瞬の閃光にも似たその動きは相変わらず捉えられない。

しかし、ルビーの発言を念頭においてよくよく観察してみると、なぜか彼は自分と一定の距離をとったまま、その回避行動を取り続けていることが分かってくる。

……たしかに奇妙だった。

これほど動揺したイリヤの状態を、ともすればあの敵は、自分以上に正確に把握しているだろう。加えてあの常軌を逸した俊敏性だ。たとえ僅かでも隙を見せるものなら、数秒の猶予すら与えずにイリヤの命を狩り取れるに違いない。

黙って思考を巡らせる少女に、ルビーが続けた。

「あの槍兵がそうする正確な理由はわかりませんが、きっと、カードのインストールは向こうにとっても予想外の行動だったのでしょう。それがイリヤさんがインストールを行ったことによるのか、はたまた、カード自体に関係することなのか……それは私たちには知り得ないことです。しかし、おそらく、相手も相手なりにこちらの出方を伺ってるのだと考えられます」

「……」

「ですが、このまま膠着状態が続くとは到底考えられません。あの男が私たちを観察している間も、私たちはこれといって、状況を好転させる手を打てていないのですから。いずれ見切られて、殺されてしまうのが関の山でしょう。

もとより敵は英霊という化け物。いくら魔法少女であるイリヤさんとはいえ、今、私たちがすがるに値する可能性があるとするのなら、たったひとつ」

「……カードに宿った、英霊の知識」

「そうです」

知らずイリヤは、ぎゅっと手にした杖を握りしめた。

――――集中する。

カードから流れ込んでくる感情を。記憶を。

伝わってくるこの英霊の残滓を真っ向から全部受け止めて、この場を打開する術だけを探す。

燃え盛るような愛情と魔術と姦計。

己の全てを夫に捧げ、そして裏切られた悲劇の王女。

あらゆるものを鮮血に染め上げ、呪いと災厄を振りまく魔女に変貌した彼女の記憶。

……知らず、胸が痛くなる。

それはどれだけの苦難だったのか。
それはどれだけの悲哀だったのか。
幼い子供に過ぎないイリヤには分からない。
ただ、
この英霊が辿ってきた艱難辛苦の生の記憶。その嘆きと悔恨が綯い交ぜとなった激情が、一斉に彼女を襲ってきて――――

「――――ルビー」
イリヤは、それら全てを胸の裡に飲み込んで、自身の相棒に声を掛けた。

「ねぇ。ルビーは、あの人の動きを察知できるんだよね？」
「それは……はい、できます。……が、先ほどお伝えしたとおり、私に可能なのはあくまでも魔力探知であり、あの敵の行動の予測ができる訳ではないのです。ですので、今のイリヤさんのお役に立てるかどうか」

「ううん、それで十分だよ。だからおねがい。あの人がまた攻撃をしかけてきたら、わたしに教えて」
「……本当にギリギリになってしまいますが……」
「うん、それで大丈夫。後はわたしがなんとかするから。……正直、上手くいくかなんて分からないけど。もしかしたら、わたしの作戦なんて、全然通用せずに終わっちゃうかもしれないけれど。なんとかやってみる」
「……イリヤさん」

イリヤの口元に苦笑が浮かぶ。
こんなにも殊勝なルビーは殆ど見た事がなかったのだ。そんな相棒の態度からだけでも、どれだけ自分が不安そうに見えたのか分かってしまう。

「わたしは大丈夫だよ、ルビー。
だって知ってるんだもん。▪どんなに厳しい時だって、逃げてたら何にも始まらないんだって。
決めたんだもん。どんなに強大な敵にも、自分ができる全力で立ち向かうんだって。
だから、お兄ちゃんのことも、自分のことも、わたしはどっちの事だって絶対に諦め

ないよ」

そう、全てを欲張る。

だって今のイリヤは魔法少女なのだから。

ただの少女の我儘を叶える奇跡を望んで、何が悪いのだろうか。

「――――う、うぅ、それでこそマイマスターです!!　わかりました、やってやりましょう!!　あの憎っくきにゃろうに私たちのコンビネーションを見せてやりましょう!!」

「うん！」

いつもの調子が出てきた相棒に強く頷き、イリヤはいっそう力を込めて前を見据えた。

再度、イリヤは強力な砲撃を二十、三十と一息に放つ。

転じて、それを軽やかに躱し続ける槍の騎士。イリヤがインストールしたのは魔術師のカードということもあってか、自身の動体視力等の強化は特にされていないようで、その目には青い軌跡がわずかに残像を映すのみだった。

……やはりタイミングはルビーを頼るしかない。彼女はそう再認識する。
改めて尋常でない速さの敵だ。イリヤだけではそれが自分の攻撃を避けられたのか、それとも逆に相手が攻撃を仕掛けてきたのか、その区別もつかない間に息の根を止められてしまうのがオチだろう。

続けてイリヤはちらりと下を見る。そこには、唖然と地上に立ち尽くす兄の姿。

兄を置いてけぼりにしてしまっているのは申し訳ないと思う。
ただ、今は逐一説明している場合ではないのだ。
そもそも、こっちだってあの彼に聞きたいことは山ほどある。
家族のこと、魔術のこと、数えていけばキリがない。
この危機を無事に抜け出せたなら、その時は今度こそ、互いにきちんと話し合わなければならないだろう。

「――――なるほどな」

その時、朗と短い呟きが場に響いた。

低い声。
ぞっと耳を通り抜けた声音。
その声にイリヤは思考を遮断する。

見れば、自身が空から放った光弾が地面に打ち付けられて、その反動で生じた土煙が場に広く立ち込めている。
そして、その煙の狭間から、青の残像と共に視界に映る赤い軌跡。
同時に聞こえてくる、ひゅんという槍の風切り音。

心臓が早鐘を鳴らす。
ちりちりと、研ぎ澄まされた直感が胸の奥で叫んだ。

来る――――

「イリヤさん――――!!」

直後、ルビーが叫んだ。
同時に身を襲う威圧感。圧迫感。
それに何かを考える前にイリヤは――――

ただ一言を、呟いた。

「――――?τλα☒――――」

途端――――世界が歪んだ。

「――――なっ」

瞬間、驚愕の声が文字通り目の前に現れた。

それに重なるように響いた、どん、という衝撃音。

地面が沈み、何か巨大なモノが、接近してきた青い槍兵めがけて落下したとしか思えない。

「テメェ……！」

殺気の浮いた声で男が敵意を放つ。

アトラス――――圧迫の大魔術。
少女によって唱えられた神言により、男の身体は空中で突如拘束されてしまったのだ。

「取った――――！」

イリヤは思わず叫ぶ。
相手が速すぎて捉えきれなかった自分。ゆえに狙ったのは一か八かのカウンター。その目論見が成功した今、自分は間違えていなかったのだと、そんな確かな手応えをイリヤは得ていたのだ。

もとより、これは穴の多い作戦だった。根本的に相手の速さに着いていけていないのだから、攻撃を仕掛けてくる方向に関してはヤマを張るしかない。通常の敵ならば、無防備な兄を狙うという事も考えられただろう。
しかし、兄との遣り取りや自身の彼との対話を振り返れば、幼い自分を前に、あの英霊が小細工を弄するとは到底思えなかった。
この敵は必ず真正面からやってくるだろうと、イリヤはそう踏んでいたのだ。

「――――イリヤさん、早く！」

ルビーが焦ったような声をイリヤに浴びせた。

見れば、依然として固まったままの槍兵がそこにいる。彼の足は地を蹴ったまま、何もない筈の虚空で縫い付けられ、自身の魔術が確かに効果を発揮しているのが見て取れる。

だが、黒化英霊戦でもあった対魔力という能力のせいか。

それとも、この魔術も結局借り物でしかないが故なのか。

槍兵の紅い槍はゆっくりと、しかし確実に、こちら側に向けて着実に動き出していた。

――――それでも

目の前の槍兵はまだ呪縛から抜け出せていない。

これこそが千載一遇のチャンスだ。

これを逃したら最後、今の自分にはこの敵を打倒する術はない。

ゆえに、ただの一言。
渾身の一撃を叩き込むべく、ありったけの魔力を乗せた神言を紡ぎ出す――――！

――その時だった。

「――――ハ」

男が――――青の槍兵が、その身を拘束されたままに、不敵に笑ったのは。

「――――あ」

途端、イリヤの身体が凍りついた。

「イリヤさん……!?」

その様子に焦ったルビーが叫ぶ。それは、相棒の少女が唐突に動きを止めってしまったから。

イリヤも当然切迫した今の状況は理解している。

だけど、それなのに、彼女の全身はまるで金縛りにあったように、ピクリとも動いてくれないのだ。

自分達は何か、とんでもない思い違いをしているのではないか。

そんな嫌な予感が焦燥とともに脳裏を過った。

呪文を紡ごうとした口元がわなないている。

どくどくと、鼓動が痛いくらいに耳を圧迫している。

言い知れない恐れが胸にこびり付いている。

動けない。

魔術や何かを掛けられたわけではない。

なのに、身体は完全に硬直してしまっていて――――だからイリヤは、固まったそのままに、ただ呆然と目の前の男を眺めた。

青い戦装に包まれた体躯。
妖しい魔力を帯びる朱槍。
そしてその、どこまでも不気味な気配を醸し出す
赤い、瞳――――

――――瞬間
イリヤは弾かれるように追撃の構えを解いた。
そうして即座に地上に下降し、そこに立つ士郎の腕をさっと掴み取ると――――そのまま動けない槍兵に背を向け、上空に向かって一直線に飛び出した。
「なっ、うわっ!?」
「イ、イリヤさん!?」
兄とルビーの戸惑った声が耳に入る。
「……っ!」

しかし、イリヤは脇目も振らず、何処までも上へ上へと飛行を続けた。

あの時、たしかにイリヤは追撃しようとしていた。
動きを封じ込められた男。それを狙って仕掛けた自分。
だけど、あの男の瞳を見た瞬間
イリヤは追い討ちを掛けるは無理と悟った。

――――――いや
それよりも、彼女はただ恐ろしかったのだ。

目眩のような、震え。
吐き気すら催す、既視感。
抑えきれない恐怖が、イリヤの胸中に湧いていた。
この世界に来て初めての夜に出会った、自分と鏡合わせの姿の少女と同じ、冷酷で残酷な色を灯す、あの、赤い瞳に――――――

「イリヤさん!!!」
「――――え」
ふと、イリヤはルビーの声に我に返った。

「……ぁ」
「イリヤさん!!!」
「っ……ルビー……？」
「しっかりしてください、イリヤさん！
そして落ち着いてください！　もう既に危機は脱しました！」
「え……？」
その言葉にイリヤは咄嗟に足元を見遣り、そうしてはたと気付く。

いつの間にこんなにも上昇していたのだろうか。優に百メートル以上は離れてしまった地面。その地上に立っている槍兵が、自分の指先ほどの大きさに見えた。
彼はこちらを眺め上げている。その表情は遠すぎて窺えない。
ただ、ここまで来れば流石に相手も手を出せないだろう。それぐらいの判断を下す余

裕は、今のイリヤにも辛うじてあった。

「一体どうなさったと言うのですか、イリヤさん」

「……それ、は」

イリヤは相棒の問いに答えようとしたが、うまく理由を説明できる気がしなかった。息切れもひどい。まだ心臓がばくばくと鳴っている。

その様子を察したのだろう、ルビーは諦めたように話題を変えた。

「いえ、今はそれは置いておきましょう。何はともあれ、ひとまずの危機は脱しました。ですが、まだあの敵は立ち去らず、地上で私たちを観察しているようです。これからどう動くべきなのか、何か考えはお有りでしょうか、イリヤさん？」

「……そう、だね……」

そう言って、二人は緊張感を依然保ったまま、次に取るべき行動を思案しようとして

「お、落ちるっっ……!!」

ふと、そんな声が近くで聞こえた。

「……あ」
「あらら。そういえば、そうでしたね～」
　そこで二人は思い出した。この場にいるもう一人の存在を。
「ご、ごめん、シロウさん！」
「うわっ!?」
　咄嗟に片腕だけで掴んでいたからか、ひどく不安定な態勢の兄に気付いたイリヤが慌てる。一方、少女のその行動に余計に身を揺さぶられた士郎は思わず身をバタつかせてしまう。
「ちょ、シロウさん！　あんまり動かないで!!」
「いや、そんな事を言われても……っ！」
「落ちちゃう！　このままじゃ本当に落ちちゃうよ!!」
「うーん。まあ、普通に考えれば、急に空に浮かばれてもどうしていいか困っちゃいますよね～」
「そんなコト言ってる場合じゃないでしょ!!」
　そんな遣り取りをしていると、さっきまでの緊迫感がどこかにすっ飛んでいくのだった。

そうして、やがて少女に両手で支えられてどうにかこうにか態勢を安定させた士郎が、気を取り直すように、溜めに溜めていただろう問いをイリヤたちに投げかけた。
「お前たちは一体……？」
その問いに、身を翻したステッキが少女の耳元でコソコソと尋ねる。
「そういえばそうですよ。イリヤさん、お兄さんにはどこまで説明なされたのですか？」
「えっと、実は、まだ何も」
「なんと……うむむ？　いえ、それはそれで、お兄さんからすれば『突然魔法少女が現れた！』という感じの、なかなかインパクトが強い印象を与えられてよかったのでは？主におもしろさ優先的な意味合いで」
「ええ!?　それは困るよ!?　……いや、本当のことなんだけど、お兄ちゃんには『私＝魔法少女』って思われたくないよ……」
「……あのさ」
「あ」
二人の内緒話に痺れを切らした士郎が割り入って、さらに少女の惚けたような反応に、軽いため息を零した。
その彼の様子にイリヤは悟る。彼も彼で、この特異な状況にいっぱいいっぱいなのだろうと。

そんな兄にどう話を切り出せば良いのか、そんなことを考えてオロオロしていたイリヤに、先ほどまでふざけていたルビーが助け舟を出した。
「まぁまぁ、お兄さん。その辺の話はまた後にいたしませんか？」
「……お前は」
「気軽にルビーちゃんと呼んでくれていいですよー。
で、それよりもです。何はともあれ、今はここに留まるのは危険だと考えられますので、何処か逃げるのに都合の良い場所を知りませんか？　こちらの世界でもいちおう冬木市は冬木市だと思うのですが、見た感じ、ど～も少しずつ地形が変わっているようですし。きっと、お兄さんの方がいろいろと詳しいと思うのですが」
「こっちの世界……？　……あ、そうだな……。ええと……」
士郎は口に手を当てながら少しの間考えて、そうしてふと顔を上げ、視線を横に流した。
「……それなら、あっちの山の方はどうだ？　中腹にちょっとしたお寺があって、そこに何人か住んでは居るけど、基本的に人気もほとんどない所だ。あんな危険な奴を引き連れて、新都や住宅街に向かう訳にはいかないだろうし……それに、山は遮蔽物に溢れてる。友人が寺に暮らしてることもあって俺も少しは知ってる場所だから……たぶん、な

んとかなると思う」
「あれは……」
「ああ。円蔵山っていう山なんだけど」

横で二人の会話を聞いていたイリヤは、その名称にはっと反応した。
円蔵山。そのはらわたに存在する地下大空洞――――そこは、イリヤが自分の世界からこちらの世界に来る、その扉となった場所だった。
……あの山に行けば、向こうの世界に帰るヒントが掴めるかもしれない。
それにミユやクロ、他の仲間たちの行方だって、もしかするとそこで何かが分かるかもしれない。

「……そうですね。それで良いと思いますよー」
「よし。……それじゃあ、もう少しだけ頑張ってもらって良いか？　……悪い、役立たずで」
「あ、い、いえ！　わたしに任せてください！」
考えこんでいて不意に声を掛けられたイリヤ。どこか落ち込んでいるように、自分を責めているようにも見えた士郎。

そんな兄に頼られた少女は、ふんぬと意気込みを彼に伝えた。
「むふふ。では行きましょうか、イリヤさん」
「もう、わかってるよ」
揶揄いまじりに笑うルビーにはむっと返し、イリヤは移動を開始した。

ごうごうと、上空の冷えた風が肌を叩いていく。
冬の夜気は冷たく、痛い。

だけど、自身が掴む兄の手から伝わる体温。
自然と安心してしまうその暖かさに思わず笑みを零してしまったイリヤは、ふと、最後になんとはなし、あの強敵が居た地上へと視線を投げかけた。

そんな時だった。

――――ぞっと、背筋を凍らせる悪寒が奔り抜けた。

ＡＣＴ８「槍兵（下）」

――――時間は、少し遡る。

風が緩く吹きゆく地上で、青の槍兵は静かに佇んでいた。
軽く腕を回すと、無理に動きを止められて固まった関節がきしりと音を立てる。その音に彼は少し眉根を寄せたものの、次いで首を鳴らしながら空を見上げ、そうしてぽつりと独りごちた。

「……随分と、高くまで飛んだもんだ」

地上より遥か上空。

彼が見上げたその蒼い闇。その中で、淡い金の月を背に、小さな人影がぼんやりと浮かび上がっていた。

「……こりゃあ、まんまとしてやられたか」

自分が手を抜いていたのか――――それとも、あの少女達が自分の予想以上に手練れだったのか。

彼は頭上を眺めつつそんな事をしばらく考えていたが、やがて、首を下げて視線を空から地へと戻すと、喉元でくっと浅い笑みをもらした。

青い男――――ランサーがあの獲物を空に逃してしまった理由の一つは、少女の姿形、その能力を、下手に前もって知ってしまっていたからだった。

もっと正確に言えば、少女が奇妙なカードを取り出して変身した後の話。紫のローブを深く被った彼女の装い。少し前に見覚えのあったその姿は――――今回の聖杯戦争で現界した、柳堂寺のキャスターと同一の物だった。

あれはまだランサーが元マスターと契約していた時のことだ。この冬木に来てよりしばらく地形把握に努めていた彼らは、何はともあれと冬木の地脈の下見をしていた際、そこを根城にしていた魔女と遭遇し、想定外の前哨戦を行うことになった。

その結果は言うまでもない。封印指定の執行者でもあった腕利きの元マスターに加え、何故かひどく消耗していた魔女、そして何の縛りもない自分の状態を鑑みれば、苦戦する筈もない戦いだ。実際、自分たちは相手に殆ど反撃すら許さずに戦いを終えた。

勿論、あの魔女も魔女なりに必死の戦いはしたのだろう。だが、自分にしてみればそれはひどく物足りないものだった。いったん己の槍と敵の魔術を交わしたなら、敵にも何らかの戦う理由があったのは判る。それでも、敵が曲がりなりにも自分たちから逃げおおせたのは、その『死にたくはない』という行動原理に基づいた、逃げの戦いをあの女が常に行っていたからだ。そんな相手に、槍の英霊たる自分が敗れる道理はなかった。

そして――――だからこそだろう。

突如その魔女と同一の姿形を取ったあの少女に対し、驚きながらも、自分は無意識の

うち、どこか侮りにも似た感覚を抱いてしまったのは。

「……はっ、誤算だったな。あの胡散くせえ魔女よりこっちのお嬢ちゃんの方が、戦闘者としてはよほど向いてやがる」

それは魔術の腕の話ではない。質の話をするのなら、少女の魔術は確かにあの魔女の物によく似てはいたが、威力も手数も速度も、そのどれもが多少なりとも見劣りした。たとえ自身の心中に湧いた油断を認めたとして、万が一にも遅れを取る程の相手ではなかった。

だが、戦うに当たっては魔術の技量など些末に過ぎない。

戦闘者にとって何よりも肝要なのは――――死なぬ為に戦うその過程で、死ぬやもしれぬ覚悟を可能とする――――その強い精神の有り様だ。

その点、一瞬でもタイミングを過てば即自らの死を招くと理解し、その上で反撃を狙ってきたあの少女の気概は合格だった。

確かに幼いが故の不安定さはまだある。状況に流されそうになる甘さも多分に感じ

はした。

ただ、あの少女の心の奥底に宿る、その小さくも確固とした強い決意は、生前戦いに身を投じ続けた自身の肌にもよく馴染み、ひどく小気味よかった。

「……」

再度、彼は無言で空を見上げた。

月光に煌々と照らされてよく見える彼らは、騒々しく何やら話をしているようだった。槍兵の自分には手を出せないと考えているのか、上空に依然として留まったまま。

そしてその判断は通常正しい。いかに一騎当千のサーヴァントとは言え、ただの一介の槍兵にあの高さを攻略する術など有りはしない。

「……だが、手がないって訳じゃねぇな」

だが、ここでの彼女達の過ちは、彼が並の槍兵ではなかったという事だった。

彼の真名はクー・フーリン。

アルスター伝説に曰く、影の国の女王スカサハに師事し、その技量を受け継いだ不世出の大英傑。

此度の聖杯戦争では槍兵として現界している彼だが、伝承で語られているのはその卓越した槍術の腕だけではない。あらゆる方面に才能を見せた彼は、スカサハより原初のルーン魔術の知識をも獲得し、それを十全に使いこなす優れた魔術師でもあった。

言うまでもなく、扱うルーンの中には遠隔攻撃を可能とするものも存在する。

そして現状、頭上の少女たちは・自分の方へと注意を向けていない。

無警戒の魔術による攻撃で、その彼らを不意打ったならば、さしたる消耗をするでもなく、この予想外に長引いた戦闘の幕を下ろす事も容易だろうが――――

「――――く」

その思考を、彼は一笑に付した。

……この後に及んで、あの少女たちの不意を打つ気など、さらさら有りはしなかった。

今さら自分は結果なんて物に拘泥しない。勝利なぞの為に誇りを犠牲にするのは馬鹿げていた。

自分が望むのはただ一つ。自身が誇りを掛けて研鑽を積んだこの槍術、英雄としての戦いの技術を、余す事なく真っ向からぶつけられる勝負そのもの。

確かに自分は魔術を使う事を憚りはしない。だが、自身が最も恃みとする得手が槍か魔道かと問われたなら、自分は迷う事なく己が槍と答えるだろう。

ましてや今回の聖杯戦争ではランサークラスを得て現界している。そしてあの少女たちは、その槍兵としての自分に一杯喰わせて見せた。

――――ならば、今、自身の本懐とも言える槍を捨てて勝利に走ったところで、一体何になるというのか。

「……改めて、オレはお前たちに敬意を示そう」

聞こえるはずのない言葉を彼らに投げかけ、ランサーは背を翻した。

先の戦闘で荒れた庭をゆっくりと歩いていく。

そうして入り口を遮る門にまでたどり着くと、彼はもう一度身を反転させ、その場で

軽くあたりを見渡した。

一階建てながら坪広に建てられた邸宅。

この国特有の造りをした倉庫や訓練場。

それらを配置してなお窮屈に見えないよう、全面に広いスペースを保って築かれた囲い門。

聖杯には、過去の英雄であるサーヴァントに一定の現代知識を与える機能がある。そしてその知識によれば、この家は現代においてかなり大きな部類に分けられるようで――――それは自分にとって、十分な間合いだった。

ざっ、と、ランサーは場を固めるように足下の土を軽く蹴った。

均した地面に踵を嵌め、身を屈めて手を付ける。獣のように深い前傾姿勢を取った彼の手で、紅い槍が、一層強い存在感を放って不吉に輝いた。

そうして最後に。

底のない赤の瞳が空に浮かぶ彼らの姿を射抜き、そして彼は冷酷な、しかし同時に賞賛を湛えた不思議な声音で、静かに告げた。

「――――この一撃、手向けと受け取るがいい」

■

「は、っ――――」

突如、足元から迫った強烈な殺気。
背筋を這う上がるように襲った最大級のその悪寒に、イリヤはただ浅い息を漏らす。
奇妙に固まった身体が、ぎし、と、油の切れた蝶番のような音を立てた。

「な、んだ――――――」
「こ、これは――――――」

兄とルビー。
困惑するような二人の声が、場に凝る静寂をついて鼓膜を震わせる。

大気が静かに凍っていく。
それは比喩ではない。
魔術師のカードのおかげか、これまで以上に感じ取れていた周囲の魔力が全て凝結し、上空から地上に向かって吸い寄せられていく。

その魔力の流れに呆然と視線を送ったイリヤは、視線の先、庭に降る月光の下。そこ

に、こちらに視線を向けている男の姿を見た。
温度のない赤い瞳と、それと対称的に激しく輝く紅い槍が、視界に遠く映り込んだ。

「――――あ」

言葉が凍る。
身体が、昏い予感に冷たく凍る。

――――やられる。
そんな言葉が脳裏に焼きつく。
何がどうなってなんかは分からない。
けれど、このままだと間違いなく自分たちはやられる。
こんな曖昧な直感、俄かには信じ難いけれど間違いはない。

棘のように身を蹂躙していく悪寒。
おぞましいまでの魔力を吸い上げて煌めく、あの槍兵の紅い槍。

あの槍が走れば自分たちは死ぬ。
それは絶対だ。
文字通り、あの男の槍は『必殺』の意味を持っている――――

「イ、イリヤさん――――」

ルビーの言葉も凍りついて続かない。
退却か、それとも防御か。
相棒がどっちを言いかけたのか、少し迷って、すぐにそのどちらもが実現不可能なのだと、そう本能で悟ってしまう。

自分たちは敗北する。
あの男が動けば自分たちは必ず死ぬ。

それなのに、そこまでもう理解しているというのに、イリヤは身じろぎ一つする事ができない。
だって、彼女が指先一本動かすだけで、それが決着の合図となってしまう――――

「――――っ」

だからこの戦い。
イリヤたちの敗北を止める事ができたとしたら、
それは――――

「――――水が差したか」

自分たちではなく、あの槍兵自身によるものに他ならなかった。

「――――――え？」

――――――不意に

風に乗って聞こえてきた男の言葉に、イリヤは思考を止めて声を洩らした。

そのまま呆然と地上を見遣れば、いつの間にか彼は地につけていたその四肢を起こし、どこか明後日の方角を向いてこちらから意識を逸らしているようだった。

不気味な胎動をしていた男の紅い槍も、気づけば、その不吉な光を収めていた。

……先ほどまで凍りついていた空気が急速に弛む。

麻痺したように活動を鈍らせていた身体が、死の影から解放されて貪欲に生へと食らいつく。

無意識のうちに止めていた呼吸を再開させ、取り込んだ酸素にふっと思考がクリアになったとき、地上から、今度は遠くからでも十分に聞こえる大声が響いた。

「すまねえな、お嬢ちゃんたち！　どうも都合が悪くなっちまったみてえだ!!」
「え――――」
「悪いが、勝負はひとまず預けさせてもらうぜ！」

唐突に投げかけられた言葉に、
イリヤたちが疑問を挟む暇もなく。

「――――あばよ！
オレが次に殺すまで、おまえら全員死んだりするんじゃねえぞ！」

男は短くそう言い置き、とん、と、軽やかに地を蹴ってその場を飛び出していった。

その様子を、上空から、少女たち三人は呆然と無言で見送り眺めた。
彼女たちの反応を待たず場を離脱したあの槍兵は、夜が深まり、民家の電灯すらほとんど消え始めた暗い冬木の街へ、みるみるうちにその闇の中へ溶け込むように、気がつけばその姿を紛らせて忽然と見えなくなってしまった。

まだ言葉もなく、男が消え去った街をようようと見下ろしていたイリヤの側で、ふと、他の一人と一機が口を開いた。
「うむむ。私たちは助かったんでしょうね～、たぶん」
「あいつ……本当に何だったんだ」
どこか気の抜けたような両者のつぶやきに、イリヤは思わずはっと我に返り、次の瞬間には相棒のステッキへと喰ってかかっていた。
「そ、そうだよ、ルビー！　あれ一体なんだったの!?」
「う～ん、なんと言われましても。あれはゲイ・ボルク、因果逆転の必殺の槍です。……とはいえ、どうにもその対人戦における反則ぶりばかりを警戒していましたが、あの槍兵の真名はクー・フーリン。彼の逸話を顧みるに、あのままでは私たちはうっかり取り返しのつかない一撃を受けていたやもしれませんね～」
「だからよく分かんないよっ！　って、わたしたち、うっかりで死ぬところだったの!?」

終わったことだと暢気に語るルビーに、がぼーんとショックを受けたようなイリヤ。

すると、そこで、依然として少女に掴まれる形で宙に浮かんでいた少年が、どこか決まり悪そうに口を挟んだ。

「あのさ。とりあえず、もう下に降りないか？」

「……あ」

「確かにあいつは危険な奴だし、実際に俺も殺されかけた……というか、やっぱり本当に殺された気がするんだけど……。それでも、こんなチンケな嘘でわざわざ隙を窺う奴じゃないと思う。……それに、このままだと何というか……落ち着かないんだ」

気まずげに紡がれた彼のその言葉に、イリヤは今はキャスターの杖の姿を取っているルビーを見た。その視線に、相棒は先端をぴこぴこと光らさせて無言で同意を示す。

なんだか少し微妙な空気感に、思わずイリヤも黙ったままで頷いて、ゆっくりと地上に降りることにした。

先ほど遠慮なしに自分が放った魔弾の所為だろう。庭はあちこちがひどく抉れていて、降り場に少し困った。

イリヤは微妙な位置調整をしながら下降しつつ、自分が掴んで吊り下げている兄の顔を盗み見ると、幸い、兄はこの惨状について特に気に留めていないようだった。
けれど、その一方で、何かを深く考え込むように真剣な表情を作っている兄。その様子に少しの不安が胸に湧きつつ、イリヤはたどり着いた地面に兄を下ろし、自分もそのすぐ傍に着地した。

地上では風が緩やかに吹いていた。
塀で囲まれているからか、冬なのに少し暖かい風が吹きだまるこの家の庭。
その庭の地面にやっと足をつけて落ち着けたのだろう。土郎はイリヤたちに視線を寄越さないまま、体の動きを確かめるように軽く屈伸運動をしはじめた。

その兄をイリヤは横目で盗み見る。そうして改めて考える。
この世界の彼。
異なる世界からやってきた自分たち。
先ほどまでの怒涛の出来事と、やっと落ち着けた今の状況。
聞きたいこと、確かめたいこと。
そんなことだらけで、いったいどうやってこの兄に話し掛ければ良いか、イリヤが躊

躇っていると――――

くるりと、

先ほどまで身体を動かしていた彼が背を翻し、彼女の方を向いて言った。

「よし。もう一回、お互いにちゃんと自己紹介しとこう」

「え？」

「ほら、俺たち、今まではなんだかんだずっと落ち着けないままだったじゃないか。今日はあいつが襲ってきたし、昨日だって、君は起き抜けで混乱してただろう？　だから色々話す前に、もう一度改めて自己紹介したいと思って」

「おーなるほどー！　ではでは私から――――」

「いや、お前はもういいぞ。……なんか話がややこしくなりそうだし」

「むむ」

二人の微妙なコントが繰り広げられている間に、思わず呆気にとられていたイリヤがハッと気をとりなおし、どうにかこうにか返答を返した。

「……えっと。わたしの名前はイリヤ……イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、です」
「うん、よし」

その自己紹介を受けて彼は頷き、告げられた彼女の名前を口内で幾度か呟き始めた。外国人風の名を呼ぶのに慣れていないのか、自分の中で馴染ませるのに少し苦戦した後、やがて彼は、イリヤにとって見事に聞き覚えのある発音で口を開いた。

「それじゃあ、イリヤだな。俺の名前は衛宮士郎。士郎って呼んでくれて構わない」
「……」
「よし。これでお互いの口から名前をちゃんと交換できたな。……ええと、それで俺も色々聞きたいことはあるし、たぶんそっちも俺に聞きたいことがあると思うんだけど……とりあえず改めて」
「……」
「――――さっきは助けてくれて、ありがとう」

……その兄の言葉に

イリヤは少し、息が詰まった。

だって彼女はこれまでずっと、自分がどうやって動けば全て上手くいくか、そんなことばかりを延々と考えていたのだ。

戸惑いや恐怖を飲み込んで、なんでも無いように。

そんな時、自分がそうまでして必死に守ろうとした人に、そんな考えもしていない言葉を掛けられてしまうと、堪えていた激情が怒涛のようにせめ寄せてきてしまう。

その胸に湧き上がった感情に、イリヤは知らず目頭が熱くなるのを感じながら、なんとか一言だけ、彼に言葉を返した。

「――――うんっ」

なんだかやけに、鼻がつんとした。

そうしてしばらく。

色々な感情が綯い交ぜになって胸に迫り上がったイリヤに、目の前の兄は何も話しかけずにいてくれたのだが、やがて、彼女が少しづつ気持ちを落ちつかせていたのを悟ったか、夜の緩やかな風が彼らの間を吹きすぎていった時、それに押されるように彼が新たな問いを投げかけてきた。

「さっきも言った通り色々と話したいことがあるんだけど、いいか？」

「あ……は、はい！」

「うん……ええと、まず俺から聞きたいんだけどさ。もしかして、イリヤは俺のことを知ってたのか？」

「え？」

「いや、さっきのあの男との戦いの時、たまに俺のことを『お兄ちゃん』って呼んだりしてただろ？　それに、気のせいかもしれないけど、なんだかやけに俺のことを気にかけてくれてるようだったからさ」

「あ、それは……え、ええっと……シロウさんのことはよく知ってたんですけど、シロウ

さんのことは知らないっていうか……」
　自分の兄と目の前の彼。イリヤはもう既に彼に全部事情を話す気ではいたのだけど、どこから説明していいのか少し悩んだ。
　すると彼が、
「あ。そう言えば、昨日の夜は親父のことも言ってたし、もしかして親父から俺のことを聞いてたのか？　……いや、イリヤの親父さんと切嗣は別人だったんだっけ」
「あ、うう、ええええ、知り合いっていうか、おとうさんの事も知ってはいるんですけど……。ふええ、ルビー、シロウさんにどう説明したら――――」
　そこまで言いかけて、イリヤはようやく気がついた。
　いつも騒がしい相棒が、なぜか黙ったままでいることに。
「……むぅ、この気配は」
「……ルビー？　どうしたの？」
「いえ……これは警戒すべきなのか、それとも待つべきなのかと思いまして」
「……？」
　歯切れ悪いその物言いに、イリヤは疑問を浮かべる。

その二人に、そのとき吹きつけた風にぶるりと震えた士郎が口を挟んだ。
「あのさ。とりあえず、もう時間も遅いし家の中で話さないか？」
「あ、シロウさん」
「いくらこの辺は暖かいって言っても、冬だし寒いだろ？　家に入ったらお茶も出せるし、着替えも新しいのを出せるからさ」
まだキャスターカードのローブ姿でいる自分を心配したのだろう。それは兄らしい気遣いの篭った申し出で、自然と口元に笑みが溢れてしまう。
「えっと、はい。わかりまし――――」

だからそれは、本当に突然のことだったのだ。

「あら、それじゃあその話、私にも聞かせてもらっていいかしら？」

不意に背にかかった声。

その突然の声に、やけに緩慢にイリヤは後ろを振り向いて――――彼女は思わず目を見開いた。

聞き覚えのある凛とした声。
見覚えのある端正なその顔。

イリヤが知っている、赤い外套を身にまとったその彼女は、自身の肩に掛かった綺麗な黒髪をぱさりと手で払い、挑戦的なまでに優雅なその口調で、きっぱりとこう言葉を継いだ。

「――――こんばんは、聖杯戦争のマスターさん」

ＡＣＴ９「来訪者」

兄が、背後で息を飲む音がやけに響いた。
理由は単純。イリヤ自身、突然場に現れた彼女に驚き、思わず口を噤んでしまっていたからだ。

夜に溶け込む艶やかな黒髪。芯の強そうな紺碧の瞳。すらりと華奢な身体に纏われた、彼女自身の鮮やかな気質を表しているような、深い赤のコート。
自己への強烈な自信をたたえたその笑みが、こちらに向けられていた。

――――そう、イリヤたちの目の前に現れたのは
向こうの世界でもよく見知った、遠坂凛、その人だった。

「リ、リンさ――――」

「おまえ、遠坂――――!?」

イリヤは思わずその人物の名を呼びそうになって、しかし続けて追い被さった兄の言葉に、出しかけた声を咄嗟に飲み込んだ。

そしてはっと思い至る。

目前の彼女に関する、一つの仮定に。

「ええ。こんばんは、衛宮くん」

「え、あ、なんで遠坂がここにっ!?」

「そうそう、突然ごめんなさいね、衛宮くん。こんな夜分遅くにお邪魔して」

「あ、ああ、いや、それは、別に構わないんだけどさ……」

二人のその会話に、イリヤは確信する。

ひどく動転した士郎にさらりと返す凛。

話の調子がどこか決定的にズレている気もするが、この二人はお互いにちゃんとした知り合いのようで。彼女の彼への受け答えに動揺した部分は特になく、逆に、こちらを

取り立てて気にしている風にも見えない。
……それはつまり、目の前のあの遠坂凛という女性は、イリヤの知っているリンさんではないという事だった。

「って、そういう事じゃないっ！　どうして遠坂がここにいるんだ!?」
「あら、衛宮くん。本当に心当たりはないのかしら？」
自身の疑問を流して返されたその問いかけに、士郎は目を瞬かせて少し考えこむ。
「……そういえば、遠坂。さっきお前、俺のこと聖杯戦争のマスターって……」
そうして思い返すように呟かれた彼の言葉に、途端、目の前の彼女の雰囲気が一変した。
「そう――――やっぱりなのね」

苦く、本当に苦く、何かを噛み潰すように一言だけそう呟いて、凛は瞼を閉じた。
ぎり、と奥歯を噛み鳴らす音が小さく響く。
誰かがそんな彼女に言葉を投げかける間もなく、凛は目を開いて目の前の士郎をもう一度見据えると、感情の読めない淡々とした声で言葉を継いだ。

「正直、誤算だったわ。よくもまんまと隠し通してくれたわね。まさか、あのお人好しの衛宮士郎くんが魔術師だったなんて、私には想像すらつかなかった」
「え……魔術師って。遠坂、もしかして、お前!?」
「ええ、そう。由緒正しき魔術師の家系、遠坂の現当主が私よ」
唐突に聞かされた事実に士郎が目を丸くする。一方、そんな彼の様子に、彼女は口端を吊り上げて自嘲するように浅く笑った。
「それにしても、ここまできて白々しいじゃない、衛宮くん」
「え……?」
「そっちの子、格好からしてキャスターのサーヴァントかしら? 幼い見た目をしてるけれど、おそらく凄まじい技量の魔術師ね。あなたの家のこの庭にも、信じられないくらい濃い魔力残滓が漂ってるもの。それなのに、こうやって証拠が目の前に落ちてるっていうのに、まだ誤魔化そうと演技を続けるなんて、それは随分往生際が悪いんじゃないかしら――――キャスターのマスターさん」
そう言って凛は士郎の横にいる少女を一瞥した後、次いで視線を少年に戻し、彼の手元近くを睨みつけるように瞳を眇めた。
そんな彼女にイリヤは思わず息を飲む。

一瞬こちらに向けられた碧眼。その硬質な色。そこに滲んだ明らかな敵意。それは場を凍りつかせ、切り刻むように辺りを圧迫する。

自分たちの目の前にいるのは、向こうの世界の彼女がイリヤには向けた事がない、本物の魔術師としての冷酷さを放つ、遠坂凛の姿だった。

やがて、呆然とイリヤが立ち尽くしている間に、彼女が吐き捨てるように言葉を続けた。

「そうよね。もとより、魔術師なんて冷徹で計算高い生き物だもの。自分の不利になるような事をわざわざ認めるはずもないか。もしかして、こうして私に色々考えさせるのも作戦の内なのかしら。……本当に、まんまと今まで騙されてきたものだわ」

「ちょ、ちょっと待ってくれ、遠坂っ!!」

「そ、そうだよ、リンさん、絶対何か勘違いしてるよ!!!」

取りつく島のない彼女の応対に、側で会話を窺っていたイリヤも思わず仲裁に入る。

だが、それが今は完全に逆効果だった。

「ふうん、もう私の名前までサーヴァントに教えてるんだ。情報共有は万全ってこと。

――――いいわ。そっちがその気なら、こっちだって遠慮なく貴方を『敵』と見なせるもの」

「なっ――――」

きっぱりとそう言い切り、彼女が左腕の袖を捲り上げる。
白く細い腕。
女性らしい綺麗なその腕に、ぼう、と。
燐光を帯びた、入れ墨のようなモノが浮かび上がった。

「あれって――――」

それが何なのかイリヤは知っていた。
自分の世界の彼女も有していた、連綿と受け継がれる魔術の後継者の証。

――――魔術刻印だ。

呆然と頭の隅でそう判断したイリヤを置いて、辺りの空気が急速に張り詰める。
直後、その緊張を切り裂いて、戦闘開始の合図が叫ばれた。

「アーチャー、初撃はお願い！　この戦い、一気にカタをつけるわよっ!!」

こちらに向けられた左腕が一際輝く。

薄緑色の魔力が魔術回路を一瞬で駆け巡った。

向こうの世界の彼女に照らし合わせるなら、その刻印に刻まれている魔術は――――

「――――っ!!」

イリヤは首を振ってその思考を切る。喚き出したくなる気持ちをようよう飲み込んで、ただ現在の状況をそのままに受け止めた。

――――ぼんやりと考えている暇はない。いま判ることはただ一つ。このままでは、自分と兄は、また立ち所に傷つけられてしまうということ。

だから湧き上がる困惑を無理矢理に抑え込んで、イリヤはとにかく全力で魔術障壁を張り――――

次の瞬間、しんとした静寂が場に降りた。

……。

……。

……。

「……え？」

「……は？」

一瞬、状況認識が遅れ、イリヤたちは言葉を忘れた。

そんな彼らの目の前で、淡い光を帯びた左腕を差し向けながら、そのままの状態で動きを止めた赤の彼女。

その彼女の発した開戦の声は、誰に返されることもなく、夜に飲まれて静かに消えた。

やがて、場を覆った奇妙なまでのこの沈黙に耐えかねたのか、ぶるぶると微かに身を震わせ始めた彼女が、ぎぎぎ、と、音を立てるようにゆっくり後ろを振り返って

「あ、ア、アーチャーッッ!!!!」

途端、憤怒の声が弾かれて飛び出した。

「アーチャー!!?　あんた、何わたしの命令無視してくれちゃってるの!!?　いま私、かなり覚悟を決めて言い放ったんだけどっ!!

というか、いつの間に霊体化してるのよ!!?　敵サーヴァントの前で実体化もせずいるなんて、致命的な失策よ!!　もう死刑ものよ、あんた――――って、何よ……は？

あの女の子はサーヴァントじゃない？　はっ、そんなわけないでしょ、だって――――あれ、ほんとにステータスが見えない……え、嘘、本当？

……で、でもっ！　さっき衛宮くんの左手の甲にちゃんと令呪が――――えっ、ない!!?　え、えっ、なんで!!?　だって、さっきは薄っすらだけどちゃんと――――」

虚空に向かって怒涛の勢いで話し掛けだした彼女。

意味不明な出来事の連続に、イリヤたちはただ唖然として場に佇むしかない。

「……もしや、あそこに居るのかもしれませんね」
「え？」
　ふと、その隙をつき、イリヤの手の内からルビーが耳打ちをしてきた。
「英霊がですよ、イリヤさん。あの凛さんは今、『アーチャー』と叫びました。そして先の戦いにて『ランサー』と自身を名乗った青い騎士。そこから考えるに、あの凛さんが話しかけているのは弓の適性を持つ英霊だと考えられます」
「……でも、誰もいないよ？」
「おそらく、霊体化しているのだと思います」
「霊体化？」
「はい。そもそも英霊という存在は、その名の通り霊的なモノを指します。座より降霊された英霊を具現化させる事も可能ですが、その為には膨大なエーテルが必要。俗な言い方をすれば、幽霊のような状態が基本的な彼らの姿なのです。……エーテル体でない以上、私にも霊体化した英霊を探知することはできませんが、あの凛さんの様子を見れば、おそらく間違いないかと」
「……」

イリヤはもう一度、あの彼女が話しかけている空間を見遣る。そこには人影一つもありはしない。

……しかし、ルビーの言葉を信じるのなら、あそこに居るのだろうか。

あの青い槍兵のような、そしてあの強大な巨人のような、自分たちの想像の埒外の存在が。

黙したまま考え込む少女に、ルビーが言葉を続けた。

「うむむ。それよりも、イリヤさん。そろそろこの格好を解除しませんか？」

「え……あ、そういえば」

彼女の言葉で改めて気づいたが、イリヤはまだカードのローブ姿のままだった。

「はい。先ほど凛さんが勘違いしたのも、きっとこの姿の所為でしょう。今のイリヤさんはなかなかの魔女っ子っぽい雰囲気を放ってますからねぇ。それに、この姿のイリヤさんもいいのですが、私としてはやはりいつものデフォルトスタイルが個人的に好みです！」

「あ、あはは。それはそれで複雑なんだけど……それじゃルビー、お願い」

「了解です！」

元気よくルビーが応え、そうしてぼんっと煙を立てて彼女がいつもの姿に戻った。

「――――なぁっ!!!?」

するとなぜか、素っ頓狂な声が横から聞こえてきた。

「え?」

「むむ?」

イリヤたちは思わずそちらを見遣る。

すると、唐突に驚きの声をあげた犯人――――こちらの世界の遠坂凛が、絶句したままパクパクと口を開け閉めさせ、イリヤたちの方に――――もっと正確に言えば、元の姿に戻った魔術ステッキの方に、指をさしたまま固まっていた。

そうして、一瞬の間の後。

「な、なんであんたがここにっ!?」

心からの叫び声が聞こえてきた。

そして、そんな彼女のリアクションに、
「え？」
と、もう一度疑問の声を上げる少女。
「おやおや？」
と、少し楽しげな声を上げる人工精霊。

「本当になんであんたがここにいるのよっ、この悪徳不良精霊!?」
「……」
「あんたは私がきっちり六年前に停止させたはずよ！　起動スイッチもきちんとＯＦＦにしたし、絶対に外に出れないよう大師父の宝箱の底に敷き埋めたっ!!　なのに、どうしてそのあんたがこんな所にいるのよ!!?」
「むふ、ムフフフ」
「な、なによ……」
「ル、ルビー？」
明らかに不気味な雰囲気を滲ませるルビー。凛とイリヤは知らず後ずさる。
すると、そいつはぐるりんと少女の手の内で一回転して、
「相変わらずマヌケなお人ですね～、リ・ン・さ・んは」

「「なっ」」

唐突に目の前の彼女を煽り始めた。

「だ、誰が間抜けだってのよ、このトンチキ魔術ステッキ！」

「それはもちろん凛さんがですよ～。さっきのあのドヤ顔、いったいなんなのですか？もしかして、私たちを英霊だと勘違いしちゃったんですか～？」

「そ、それは……」

「相変わらず凛さんはうっかりさんですね～。あ、でも、私はそれを責めたりはしませんよ。だって、もうそれ致命的ですもん。カレイドステッキのルビーちゃんが断言します。『うっか凛さん』というＤＮＡは、全並行世界・どの時間の凛さんにも刻まれているので、もう諦めるのが肝心だと具申させていただきます」

「なっ」

「それにしても、私の起動スイッチを強制的に切るなんて全く非道なお人です。そんなことだから私に愛想をつかされちゃうんですよ」

追い討ちのように放たれた言葉。その一言が臨界点だったのか。ぷつりと何かが切れた音が場に響き、直後、彼女は羞恥と憤怒で顔を真っ赤にし、が～～～っと怒りの声をあげた。

「ふっざけんじゃないわよっ！　六年前、あんたに無理やり契約させられた私がどんだけ苦労したと思ってんのよっ！　いつも使ってた公園には行けなくなるわ、少ないながらもちゃんといた友達はゴッソリ減るわ！　想像してみなさいよ!!　あんたに記憶を消された幼い私が、理由もわからないままある日を境に遠巻きに見られるようになったことをっ!!」
「ふむふむ、そんな事があったんですね～」
「元凶が何を他人事ぶってんのよ!!」
「……」
　イリヤは黙り込み、心中で彼女に言う。他人事も何も、ソイツは本当に知らないんだよと。ただ貴女を弄って遊びたいだけなんだよと。
　複雑な心境のイリヤを尻目に、ルビーが続ける。
「まぁまぁ、六年前の凛さんでしたら、それはもう可愛らしいコスチューム姿だったと思いますよ。その元お友達さんも、まるでアイドルのような凛さんに尻込みしてしまっただけではないのですか？　見てください！　ここにおわします我がマスター・イリヤさんの可愛らしさ!!」
「はぁ!?　ふざけんじゃないわ。こんな格好、他人に見られたら自殺もんよ！」
「ひ、ひどい……」

「あらら。これはもう感覚が老化しちゃってますね～。今の凛さんはもう年増ツインテールと成り下がっています。それは私も新しい契約者を探すってものです」
「と、年増ですって～～～っっ!!!!」
わなわなと唇を震わせて歯を噛み締めて、そうやって彼女と愉快型魔術礼装は罵声の応酬を続けるのだった。

「……でも、そっか」
ガミガミと言い争う彼女たちを横に置きながら、イリヤはぽつりとそう呟いていた。それは、ルビーに対する彼女の反応に、ここが『並行世界』なのだと、そう再認識することができたからだ。
もちろん、この世界が自分たちの世界と異なるのは既に判っていた。なにせ自分の身の回りの人間関係一つ取っても、この世界には父も母もいないし、兄も自分のことを知らなかった。それは悲しいことだけど、もう認めて乗り越えたことだった。
……だけど、イリヤが勘違いしかけていたのは、向こうの世界とこちらの世界。その二つの間には差異があると同時に、共通している部分もあるという事だ。それは目の前の二人を見ていれば分かる。こちらの世界のあの遠坂凛という女性は、イリヤの事は知

らない一方、兄やステッキのルビーのことは知っていた。……ルビーが雑に合わせている会話を聞くに、彼らが知り合う過程や時期に違いはあるようだけど、確かに彼らは向こうと同じで知人同士なのだ。イリヤは冷静にそう分析する。

そうして、そうと判れば次は応用だ。その『共通点』という視点でこの世界を見据えてみると、イリヤにはどうしても思い起こされることがあった。――――それは今までに遭遇した二騎の英霊。あの赤い槍を持つランサーと、最初の夜に襲ってきたあの巨人。絶大な力を持ったその両者は、イリヤたちが向こうの世界で集めたカードの英霊、それらと同一の存在だったのだ。

……確かに偶然に過ぎないという可能性もある。ただ、そう切り捨てるには、イリヤの胸に彼らの存在は強く刻まれすぎていた。強力な英霊。聖杯戦争。命のやり取り。……正直言って、二度と関わりたくない。けれど、自分たちがこちらの世界に来た切っ掛けを考えた時、その共通点がどうしても重要になってくるような。イリヤにはそんな気がしてならなかったのだ――――。

「――――はぁ。もういいわ」

不意に思考を寸断させた声に、イリヤは顔を上げる。
すると、自分が考え込んでいる間もずっとルビーと言い争っていたのだろう、ぜえぜえと荒い息をしつつ諦めたように肩を落とした彼女が、こちらを振り向き、真っ直ぐに手を差し伸べてきているところだった。

「ねぇ貴女、そのステッキをこちらに渡してくれるかしら」
「え？」
「だいたい事情は察するわ。どうせ、貴女もそいつに騙されて契約させられたんでしょう？　……業腹だけど、そいつの持ち主は一応私だから。ちゃんと責任をとって引き受けさせてもらうわ」
「あ、え、ええっと……」
その申し出にイリヤは困る。
あながち彼女の言う事は間違っていなかったが、このルビーは自分たちと一緒にこの世界にやってきたルビーなのだ。
何故ルビーが彼女に事情を話していないのかもわからないし、今、自分は彼女の言うことに従うべきなのかどうか、その判断がつけられなくてイリヤは少し迷ってしまう。

そうして少女が返答に窮していると、槍玉に挙げられたそいつが横から割り入ってきた。
「ダメですよ凛さん。私のマスターはもう貴女ではないのですから、私が凛さんに従う義務なんてありません」
「……」
その言葉に、凛は瞳を細めた。そうして静かに続ける。
「ねえ、あんた、ここはふざけるところじゃないの。それ、わかってる？」
「いつだって私は大真面目ですよ、凛さん」
「……こっちはね、もうすぐ聖杯戦争に挑むの。ずっと昔からの遠坂家の悲願を、絶対に達成しなきゃなんないの。私も十年かけて準備したわ。そのために、普通の人間らしい日々も、十代の女の子らしい感情も、そのどれにだって決してよそ見することなく、必死に魔道に打ち込んできたわ。――――それなのに、そんな待ちに待った大事な儀式を前に、あんたの気紛れで邪魔をされちゃ、こっちはたまったもんじゃないの。いい加減にしなさい」
「それはこちらの台詞です、凛さん。いい加減にしてください。貴女にどんな事情があろうと、私のマスターはここにいるイリヤさんだけです」
「……いい度胸じゃない」

張り詰めた糸のような、緊迫した空気が再度場に走る。

「ちょ、ちょっと二人とも……！」

余りにも急な展開にイリヤはついていけていない。けれど、このままではまた物騒な事になりかねないとは理解できた。

だからイリヤは自分の事情も何もかも、咄嗟にこの場で全部ぶちまけようとして――

――――その時

ばんっ、と、激しく何かを打ち付ける音が場に上がった。

言い争っていた三人はハッと背を翻す。すると、振り向いた先、敷地を囲う塀の側。そこで一人会話に加わらず沈黙を保っていた士郎が、その拳を、塀の壁に強く押さえつけて俯いていた。

かなり激しく叩きつけたのだろう。壁に押しつけた手の甲はひどく擦り剥け、赤く腫

れ上がっている。そして、その内側。何らかの感情を押さえつけるようにぎりぎりと強く握られた拳の中は、加えられた力に耐えきれず、微かに血が滲んでいた。

　思いがけず張り詰めた静寂。その中で、やがて彼は、下を向いてイリヤたちに表情を見せないまま、堪えきれない激情を言葉に乗せ、口を開いた。

「いい加減にしてくれ、お前たち……!!
　こっちは一体何が起こっているのか、どうしてこんなことになってるのか、未だに全然理解できてないままなんだ……！　英霊とかいう馬鹿げた奴らが現れて、学校でいきなり戦ってるかと思ったら、今度は俺が狙われて、そして殺されかけてっ……!!　意味の分からないまま命を拾ったと思ったら、次はウチに現れて……こっちはもういっぱいいっぱいなんだよっ!!」
「……衛宮、くん……」
「そしたら次はなんだ!?　急に現れた遠坂が、あの遠坂凛が俺と同じ魔術師で、よりによって俺のことを敵だって言い出すんだぞっ!!　いい加減にしてくれ……！　敵だなんだ、殺すとか、殺されるとか、そんな事なんでこんなに簡単に――――。そんなの、急

に言われたって、どうしたって飲み込めるわけないだろっ……!!」

それは、心からの叫びだった。

腹の底から湧き上がった激情を発し、それでもまだ自らの気持ちを抑えきれないのか、士郎はぐっと口を結んで言葉を噛んだ。

顔を伏せ、イリヤたちから視線を逸らしたまま、ぎり、と、壁についた拳を強く握る。

沈黙が辺りに降りた。

顔を俯かせたままのそんな彼を、赤の彼女が、呆然と目を見開き眺めている。

そうして、その無音の間を短く挟んでから、やがてはっと意識を戻した彼女は、不意にぽつりと、小さく口を開いた。

「……いいわ、衛宮くん」

「……遠坂……？」

士郎がはっと顔を上げる。

「あなたと話をしてあげるって、そう言ってるのよ。……私も少し、確かめたいことができたわ」
「あ……あ、ああ！　もちろんだ、遠坂……!!」
あからさまに喜びを露わにする彼の反応に、毒気が抜けたのか。彼女は少し呆れたようにため息を吐いた。
「……はぁ。……そういうことだから、そこのトンチキ魔術ステッキ。あんたのことも後回しよ。あとできっちり、落とし前はつけさせてもらうけどね」
「ふんっ、です。凛さんに何を言われようと、私のマスターはイリヤさんだけですけどね！」
「……ふん」

そいつの返答に彼女は鼻を鳴らし、そうして振り向くこともなくすたすたと衛宮邸の中へ入っていく。他人の家だというのに、やけに堂々とした迷いのない振る舞い。
その背を、家主である士郎が慌てて追っていった。

「……」

場を立ち去るそんな二人の背中を
後ろからぼんやりと見送り眺めながら、
イリヤは少しの間、無言でその場に立ち尽くしていた。

「……？　どうしたのですか、イリヤさん？」
そんな彼女に気づいたルビーが声をかける。
「あ、ううん……なんて、いうか」
「……む。もしや、あの凛さんに対する私の接し方についてでしょうか？　……それなら申し訳ありません。むやみに言い争いになるのは得策ではないと分かっているのですが、どうにも、どこの世界でも凛さんと見るや口答えしたくなってしまうのがこのカレイドステッキに刻まれた機能と言いますか、本能と言いますか……」
「ううん、違うよ。……いや、もちろんそれもやめて欲しいんだけど……そうじゃ、なくて」

そうして、イリヤは歯切れ悪く一旦言葉を切って。

視線を地面に落としながら、ぽつぽつと、胸のうちを零すように小さく呟いた。

「……さっきの、お兄ちゃん」

「ああ、なるほど」

彼女の言葉に、ルビーが合点がいったように言葉を返す。

「英霊であったり聖杯戦争であったり、カード収集に携わっていた私たちにも驚き続きの展開ですから、お兄さんに至っては言うに及ばずでしょうね～。それに私の登場が少しでも遅れていれば、お兄さんはあのランサーに殺されていてもおかしくありませんでした。確かに鬱憤を溜められるのも仕方ない状況だとは思います。

……が、しかしです。そのお兄さんを懸命になって守ったのはイリヤさんなのですから。そこまで気に病む必要はないのでは？」

「ううん」

ルビーのフォローに、イリヤは静かに首を振った。

「……ランサーって人との戦いの時だけじゃないよ。この世界に来てすぐ、訳も分からないまま襲われた時やその後だって。わたし、ルビーがここに来てくれる前から、ずっとあのお兄ちゃんに助けてもらってたんだ。それで勝手に不安になってうだうだしてるわたしが、いっぱいいっぱい迷惑を掛けてたのに、あの人はぜんぜん嫌な顔一つしな

かった。
……それなのに、さっきだって気を遣ってくれて、わたしはバカみたいに泣きそうになっちゃって……ほんとにわたし、お兄ちゃんのこと何にも考えてあげられてなくて……自分の事ばっかりだったんだなって」
「……イリヤさん」
自身を責めるように呟いた少女に、ルビーは掛ける言葉もなく、ただ微かな沈黙だけが辺りに降りた。

そうしてやがて、少しの時間が経った後。
重くなった空気を変えるようにイリヤは顔を上げ、先の二人が向かった家の方に視線をやった。
まだ黒い闇に包まれる外とは対称的に、人が入った家屋では、玄関内の電灯がオレンジ色に明るく灯っている。
その光景をぼんやりと眺めた後、イリヤはふと思い立って自身の頬を両手で叩いた。

ぱん、と乾いた音が、静かな夜に響き渡る。
ひりひりと痛んだ頬の刺激に気合を入れながら、彼女は軽く深呼吸し、そうして家の中に向かうことにした。
どうやらこの長い夜は、まだまだ続くようだった。